
夜葬曲

スピカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜葬曲

【Nコード】

N0639T

【作者名】

スピカ

【あらすじ】

この作品は2部構成です。

1章

夢で見る夕焼け。何度も見てしまうその夢の場所を捜す主人公。でもその夢は、心が忘れさせていた、とても残酷で、もの哀しい過去の断片だった。

消されていた、幼い頃の悲劇の記憶を辿る物語。

2章

3年後。必然の如く、悲劇を生んだ一本の刀が主人公のもとへ届けられた。

今も生き続ける殺人者。遠い昔から決められていた運命が、二人を向かい合わせる。

生まれたわけを知り、避けえぬ運命と向かい合う物語。

1・私を待つ、あの場所へ

「夜葬曲」

1・私を待つ、あの場所へ

コンコン、と窓をノックする音が夢の中に響いた。

「・・・・・・・・」

コンコン、ともう一度窓をノックする音が鳴った。

「ん・・・・・・・・」

瞼に感じる強い日差し。私は瞼を強く閉じた後、ゆっくりと目を開き始めた。なだれ込む光が私の意識を「今」へと変えてゆく。

「・・・・・・・・」

私は左手で髪をかき上げた。そしてそのままうなじへ手を回し、窓の外へ目を向けた。少しだけ開けられた窓の隙間に、海鳥が器用に足を乗せて立っていた。

窓をノックしたのはこの海鳥のようだ。私がそう思うと、海鳥は「正解」と言わんばかりにくちばしで窓をノックした。

「・・・・・・・・もう起きたよ」

そう答えながら、私は窓辺に肘を付いた。そして海鳥の瞳を覗き込んだ。

海鳥は「く〜」という感じの声を上げると、翼を広げ、バスの屋根の方へと飛び立った。それを合図にするように、バスがゆっくりと動き出した。

(ここは・・・・・・・・何処?)

私は自分が今何処にいるのか全く知らない。何故なら気の向くままにこのバスに乗ったからだ。ついでに言うと、何処へ行けばいいのかも分からない。

でも一つだけ分かっていることがある。それは、私には行きたい場所がある、ということ。その場所が何処にあるのか、どうやって行けばいいの分からない。ただそれだけのこと。その場所を捜して、今日も風に吹かれるままに生きている。

私の行きたい場所。それは夢で見る場所。子供の頃から、何度も見ている夢。音がなく、ただおぼろげな風景が流れていく、長い夢。不思議なことに、目が覚めるとその夢は私の記憶に残るのを拒むようにスーッと薄れていく。だから何度見ても憶えられない。唯一記憶に残っているのは、

港町。昔からあるような商店街。一車線の道路。海が見える場所で、鳥居に寄り掛かって夕日を見ている私。

これだけ。それすらもおぼろげなのだ。でも私は、その場所を捜し出したくて無計画な旅に出た。手がかりである、海が見える港町、を頼りに海岸に沿っての旅は、もう2ヶ月位になる。

旅というよりは、放浪に近いかも……。

こんなにも無計画な旅には、それなりの訳があった。それは、私の最愛のお爺ちゃんの死。

私の家ではお爺ちゃんがアンティークショップを経営していた。両親も兄弟もいない私は、物心ついた時からそのお店でお爺ちゃんと二人で暮らしていた。お爺ちゃんは私にとって、親であり、良き理解者だった。親友のような感覚もあった。そんな私の一番大切な人が亡くなった晩、気の済むまで泣き続けた後、私は「あの夢」を見た。

目が覚める直前、お爺ちゃんが「行ってきなさい」と私の肩を押すように語り掛けた気がしたのだ……。

私はお店を休業にして、アンティークショップを飛び出した。これ

が旅の始まり。全てが「何となく」とか「気がする」といった曖昧な感覚だけど、今のところ後悔はしていない。

バスに揺られながらポーッと景色を眺めていると、決まってお爺ちゃんとの思い出に包まれる。それは様々な彩りだけど、一番よく思い出すのは、お店の外に飾ってある豪華な椅子に腰掛けている私に、お爺ちゃんが話し掛ける。というもの。

「これはこれは、可愛らしいお姫様だ。お姫様のお名前は？」

「・・・朱音。水無月、朱音」みなつき あかね

こんな会話のやり取り。きつとお姫様ごっこでもしていたのだろう。何故か分からないけど、いつまで経って忘れない思い出。と言うより、思い出はいつもここから始まる。

「ご利用ありがとうございます。・・・町です」

バスの中にアナウンスの声が響くと、続いて炭酸飲料のキャップを捻ったときの音がしてドアが開いた。乗っていた少ない乗客は皆この町でバスを降りた。新たに乗ってくる人もいなく、乗客は私人となった。

「・・・貸し切りみたい」

私は窓をもう少し開けた。深く息を吸い込むと、ほんのりと潮の香りに包まれた。旅の初めの頃はそれだけで子供の様にはしゃいでいたけど、さすがに2ヶ月も子供心は続かない。薄くなった感情が無理をしていただけだということを明るみにし、自分が大人であることを自覚させる。

「出発致します」

再び、あの音が鳴った。

窓を完全に開け、頬杖を付き、横目で外の景色を眺める。窓の外は崖になっていて、ガードレールの奥にはずっと見続けてきた海が広がっている。でも、キラキラと輝く水平線は、もう私の心を満た

してはくれない。夢の場所を捜すはずなのに、気持ちはそのに傾ききっていない。もう飽きたとか、一人でこうしているのが不安とか、そういう気持ちじゃない。ただ・・・こうしている自分が本当に正しいのか、分からなくなっただけ。

旅に出たのは、本当は無意識の口実で、私はただ、お爺ちゃん居ないアンティークショップにいるのが辛いだけじゃないかって、そんな気が混じり始めた。

・・・考え込んでもしようがない。

(こんな時・・・お爺ちゃんなら・・・)

私はふと、お爺ちゃんに教わったことを思い描いた。

「色んな道があっても、最後は自分の意思で選ぶんだ。そして自分の意思を信じる。そうすれば、例え選んだ選択が間違っていたとしても、後悔までは至らない。朱音にはそうやって生きて欲しい・・・心のままに、生きて欲しい。分かるね？」

「・・・分かるよ。お爺ちゃん」

お爺ちゃんが私にくれた言葉。今も胸に響いている。

(そうだよな。これは自分で決めたことなんだから)

理由はどうあれ、私は自分の意志でここにいる。それだけは確か。なら、それでいいんじゃない？

再び窓の外へ目を向けると、海鳥がバスに並ぶように飛んでいた。

私は不思議と海鳥と目が合った。

「・・・港、近いの？」

声を掛けると、海鳥は「く〜」と鳴いて返事をした。

「そう。じゃあ次のバス停で降りようかな」

海鳥は再び鳴いた後、羽を休め、崖の下へと降りていった。

「ん、ん〜・・・ああ」

私は大きく背伸びをした後、窓を閉め、カバンを握り締め、次の

バス停を待った。

ふと、窓に映る自分の顔がにんまりしているのに気が付いた。

「よし・・・大丈夫、だね」

私は運転手に聞こえないように、小声で窓に話し掛けた。

「ご利用ありがとうございます。渡瀬です。」

「どうも」

「ありがとうございます。良い旅を」

「あ、はい」

私は思いがけないお釣りを貰った後、バスを降りた。

何よりもまずは深呼吸。それから第六感を働かせる。・・・私にそんなものがあるのか知らないけど。

「右？それとも左？」

今日も気の向くままに、私は流れる。

2・必然への誘い

2・必然への誘い

私はバスを降りた後、町の方に行ってみることにした。海沿いからは離れるけれど、観光もこの旅の楽しみ方の一つだ。色んな場所を訪れては名産品を買い集め、誰も居ない自宅へと郵送していた。きつと不在通知が溜まっていることでしょう……。ご迷惑をお掛けしています。

海を背に歩き続け、私は商店街へ出た。潮の香りが町を覆っている。そのせいだろうか、古くからあるようなお店の看板には錆が目立っている。それが何とも言えない味が出ていて、私は好きです。古の魚屋、古のお寿司屋、そして古の乾物屋。さすが海沿いの町、海産物を扱ったお店が多く目に映る。でもそれだけに・・・食べ飽きた物ばかりだ。海沿いばかりを歩いているのだから当然と言えば当然かな。

私は笑顔のまま小さな溜め息をついた。すると、お爺ちゃんと思いが私の中でふと灯った。

「朱音、寿司や刺身を食べ過ぎると痛風になってしまうことがある。あんなに痛い病気はないらしいぞ。朱音が痛風になってしまったら、お爺ちゃんはとても悲しい。だからな朱音、この刺身を変わりに食べてあげよう」

お刺身はお爺ちゃんの大好物だった。

急に笑いが込み上げてきて、声に出そうになった。私は歩みを止め、笑いを堪えた。通り過ぎていく人達が不思議そうに私の顔を覗いていく。私は口元に手を当て、咳をしてその場を誤魔化した。そ

れから大きく息を吸い込み、息を止めた。

(これからは、私が変わりに食べてあげるからね)

商店街を歩き終わると、一軒家が連なっている通りへ出た。天気がいいからだろう、布団を干している家がよく目に付く。

(私も帰ったら干さなきゃなあ)

そんなことを思い描くと、まだ帰れないことを悟っているのか、ふと遠くを見ている自分に気が付いた。

(帰れない？それとも、帰りたくない？)

自分の問い掛けを、私はゆっくりと瞬きをして潰した。そして髪をかき上げながらトボトボと歩き出した。

通りを進んでいくと、一軒家に混じって歯科医院があつた。歯医者独特の匂いが、微かに鼻に届いた。

がら空きの駐車場に止まっている一台の車のドアが開いた。運転席から降りたお母さんが素早く助手席へ移動した。助手席のドアが開くと同時に、子供の泣き声が漏れ出した。

「ほら早く降りなさい」

と言って男の子を引きずり出すお母さん。男の子は泣きながら抵抗するものの、その抵抗も虚しく、力いっぱい引きずられて行く。

「いつまで泣いてんの。お姉ちゃんが笑ってるよ」

(・・・私のこと、かな?)

ふと、男の子と目が合った。

「ほら、がんばって」

男の子はお母さんの腕を振り解くと、自ら歯科医院の入り口へと歩き出した。そしてドアへ手を掛け、躊躇いながらもほんの少しドアを開いた。するとその隙間から悲鳴が勢い良く溢れてきた。

男の子はドアを閉め、後ろを振り返った。

「何処行く気？」

男の子はお母さんに背中を押されるように、悲鳴が鳴り止まない

中へと連れて行かれた。

その一連の光景を見ていた私は、奥歯が痛くなってきた。私自身、歯医者にいい思い出はない。・・・当然だけど。

(歯医者に関する・・・一番嫌な思い出は、つと・・・)

多分、親知らずを抜いた時だ。抜歯の後、メソメソしたい気持ちを抑えながら家に帰ると、お爺ちゃんが晩御飯にマーボー豆腐を作ってた。歯を抜いた後に刺激物。これ以上の拷問はなかった。

(ワザと?・・・それとも、ボケ?)

嫌な音が聞こえてくる歯科医院の前を、私は足早に過ぎ去った。

幾度となく交差する、今と思い出。過去と未来の間で、私は今も揺れている。

(過去と未来、朱音はどっちに行きたい?)

久しい友達の声。これも過去のもの。

(私は・・・どっちでもないな)

(どういう意味?)

(過去は知っているし、学べる。未来はこれから行けるし、創造できる。だからどちらにしても、今が大事)

(学べるし、創造できる、か。ちよつとつままない)

(つままないって何よ)

(もつとこつ・・・はちゃめちな答えを期待していたのにさ。もつともらしい答えを言うんだもん)

(そう言う奏はかなでどうなのよ?面白い答え、聞かせてくれるんでしょうね?)

思い出から覚めると、立ち止まっている自分の足が、いつもより重く感じられた。

「過去は、思い出。未来は、自分の望む姿。望む・・・姿」

私は顔を少し上げ、先に続く道を見据えた。

(この先に・・・何を望む?)

「もちろん、夢の場所」

そう声に出すと、一匹の猫がブロック塀から飛び降り、私の前で背伸びをした。

猫は気持ち良さそうに高い声を上げると、ゆっくりと目を開き、私を見た。

「・・・目、どうしたの?」

猫は不思議なことに、左目だけが赤くなっていた。

私の問い掛けに、猫は首を傾げた。答えるつもりはないようだ。

「ねえ猫さん、この町を案内してくれる?」

猫は気だるそうに鳴いた後、ひょいっと塀の上に飛び乗り、器用に歩き出した。そして少し進んだ後、振り返って私に向かってもう一鳴き。

「・・・着いて来たって?」

別に私は動物と話が出来るわけじゃない。何となく話しかけて、何となく解釈して。ただそれだけ。

のんびり気ままに歩く、一人と一匹。

「ねえ、何処行くの?」

猫は返事の変わりに尻尾を振った。

「・・・内緒?」

次第に家も少なくなり、空き地と電柱が多く目に映るようになった。そんなことは気にも留めず、猫は歩き続ける。時折揺れる猫の尻尾に合わせて、私も首を振った。・・・ただ、何となく。

ふと猫から視線を外すと、再びガードレールと水平線が私の目に飛び込んできた。潮風が私達を撫でてくる。私達はいつの間にか、海岸沿いの道に出ていた。

辺りは朱色に染まりかけていて、もうすぐ夢の時刻。

「夢の場所、知っているの?」

私は海を見ながら猫に話しかけた。しかし、波の音しか聞こえない。視線を戻すと、猫は私を無視して歩き続けていた。

「あ、ちよつと待ってよ」

私は小走りで猫を追いかけ、再び後ろに並んだ。

猫と夕日を交互に見ながらしばらく歩いてみると、何だか懐かしい気持ちに包まれた。際立つ心音が、不思議と切なさを伝えてくる。

「何だろう・・・この気持ち」

私は自分の胸に手を延ばしたが、触れることはなかった。躊躇うように震え、開いた手は次第に握られていく。

汽笛の音が響いた。

大きな音で我に返ると、私達は港に着いていた。猫は私よりずっと前で立ち止まっていて、髭を器用に撫でている。私は猫に歩み寄った。

「ここに連れて来たかったの？」

猫は欠伸で返事をした。そして来た道を戻り始めた。

「あ、ちよつと待って」

私の言葉が分かるのか、猫は立ち止まり、私の方へと振り返った。「お礼にいい物あげる」

私はカバンの中を手探りながら、猫に近づいた。目当ての物を見つけると、私はしゃがんで猫の頭を撫でた。

「これ、この前訪れた町で買ったんだ。君、首輪してないから、その代わりにね」

私は手作りのビーズアクセサリを猫の首に付けてあげた。

「私の腕には大きすぎただけで、猫さんには丁度いいみたい。これでまた会った時に分かるね」

また会える。ふと零れ落ちた言葉だった。けど・・・本当にそんな気がする。

「本当にありがとね」

私は心を込めて頭を撫でた後、別れを告げた。

私は港には寄らず、その先を目指して歩き始めた。次第に高鳴る心音。きつと、何かがある。

(・・・何が?)

分かっている。私の勘が伝えてくる。

(夢の場所。きつとそう)

緩やかな坂を上る途中、私は口で呼吸を始めた。単に坂だからではない。高鳴る心音が呼吸を乱しているせいだ。

もう少しで坂の終点。ここを登り切れば、あの場所が私を待っている。そう思うと、次第に急ぎ足になっていく自分を静められなくなった。舞台の幕が上がるように、正確にはその逆だけど、少しずつ見えてくる未来。そしてついに。

「・・・おつと」

坂を登り切ると、その先には緩やかな下りのカーブが私を待っていた。

「そりやないでしょ・・・」

登りきった途端にあの場所があるものだと思っていた。しかし、これが現実。一気に力が抜けて、私はその場に両膝と両手を付いた。アスファルトが私の顔を照りつけてくる。

「ドラマのようにはいかない、か」

道路に話し掛けても仕方ない。けど、すぐ顔を上げる気にもならない。

「勘が外れたのは初めてじゃない」

また歩けばいい。ただそれだけのこと。

「ただ・・・それだけの、こと」

温い風が頬を撫で、伝えてくる。「夏はまだまだ続くよ」と。

私はゆっくりと立ち上がった。滲む汗を拭い、火照った腕を冷やすように、深い溜め息を吹きかけた。

「・・・暑い」

そう呟くと、朱色だった周囲に少し陰りが現れた。不思議に思い、夕日を見上げると、薄い雲が太陽を覆い始めていた。

「なるほどね・・・っ」

私は息を呑んだ。さっきまで何も無かったこの道の先に、赤い鳥居が立っているのが見えたからだ。

「・・・間違いない、鳥居だ」

カーブの手前辺りに、その鳥居は姿を現した。その奥には石段がずっと上へと続いている。

「夕日に照らされていて見えなかったんだ。やっぱり私の勘は当たっていたんだ」

と、次の瞬間には私は走り出していた。

「本当に・・・あつたんだ・・・この場所」

私は昂ぶる心音に呼吸を奪われながらも、鳥居の元へ走りついた。そして、肩で息をしながら辺りを見渡した。

鳥居から石段までの間には砂利が敷き詰められていて、雑草が生い茂っている。ここだけじゃない。雑草は辺り一面に見られる。

ここは誰も手入れをしていない空間。誰も近づかない空間。ひっそりと、誰かに見つかるのをずっと待っていたように思える。

「やっと、逢えたね」

私は誰でもない、この場所に話し掛けた。

私は鳥居に寄り掛かってしゃがみ、ガードレール越しの夕日を見続けた。ただ、ひたすらに。

不思議と何も浮かばなかった。ここに至るまでの旅のことも、これからのことも。

太陽はやがて海に浸かり始めた。水面に溶け込み、その身を水面で揺らしている。

「湯加減はいかがですか？」

それは太陽の半分くらいが海に浸かった頃だった。ポツリと漏れた、子供のような私の言葉。

(どうして・・・この場所を夢で見たんだろう・・・)

考えては見たものの、すぐにどうでもよくなってきた。もうすぐ太陽が海に沈む。今はこの景色を見ていたい。

やがて空に青が群れ始め、朱色を塗り替えていく。

(そろそろ・・・行こうかな)

鳥居に手を掛けながら起き上がると、私は石段があるのを思い出した。石段を見上げると、結構な高さであることが分かった。

「・・・どうしようかな」

この奥には何があるのだろうか？

ふと生まれた疑問はやがて、私を不思議な感覚で包み込んだ。

体が・・・揺れる。

「・・・え？」

どれ位ボーっとしていたのだろうか。ふと我に帰ると、全身が冷めて粟立っていることに気が付いた。

「この先に・・・何かあるの？」

その声を漏らすと、背中に焼けるような痛みが現れた。

「何？・・・熱い」

身を焦がすような痛みは、私の背中に何かを描くように動いていく。

私は痛みには耐えられなくなり、その場に蹲った。それでも容赦なく、焼ける痛みは動き続ける。

息を止めながら耐え続けると、やがて痛みは動くのを止め、ぼやけて消えていった。全身の粟立ちも、後を追うように消えていった。

(鳥居に長い間寄り掛かっていたからかな？きっと、太陽の熱を帯びていて・・・それで焼けるような痛みが)

鳥居に触れると、じんわりと熱が伝わってきた。

「・・・やっぱりそうね」

(でも・・・それだけでは)

浮かんだ疑問を、私は考えないことにした。

(石段の奥は明日にして、今日は宿でも探そう)

運良く、鳥居の側には町の案内板が立て付けられていた。酷く錆びてはいるものの、何とか読める。目を凝らしながら宿を探すと、面倒なことに気が付いた。

「今日降りたバス停の近くだ・・・」

結構な距離を歩いたことが脳裏に浮かび、私の力を吸い取った。

「・・・仕方ないか」

他に宿はなさそうなので、私は黙って歩き始めた。

これから先、私はどうするのだろうか？旅の目的を果たした今、もう流れる必要は無い。家に帰って、受け継いだ店を開けるのだろうか？

あの場所で一人なのは・・・やっぱり寂しい。

「・・・こんな気持ちになるなら、まだ見つからない方がよかったなあ」

そう呟きながら顔を上げると、道の先で何人かの人々が私を見ていた。

「……？」

私の視線に気が付くと、町人は慌てた素振りで見え、その場から逃げるように去っていった。

（一人で喋っていたからかな？）

そう思うと急に恥ずかしくなった。私は口元を強く締め、何事も無かったように歩き出した。しかし、人とすれ違う度に、視線が私に纏わりつく。

（一体何なのよ……よそ者がそんなに珍しいの？）

私は長い一日の終点である宿まで、急ぎ足で向かった。

「すみません。お部屋空いていますか？」

私は逃げ込むように宿に入り、すぐ目に留まった女将さんらしき人に話し掛けた。

「はい、空いていますよ」

目が合った瞬間、女将さんの顔が硬直した。

「……何か？」

「……いえ、何でもありませんよ」

少し動揺した声と、表面だけの笑顔。私にはそう感じた。

「お部屋にご案内します。お荷物をお預かりします」

差し伸べた手に荷物を手渡すと、女将さんは歩き出した。私はその後が続いた。

「こちらの部屋になります」

案内された2階にある部屋に入ると、窓から海が見渡せた。思わず声を出しそうになったが、見事抑えることに成功。私は落ち着いた素振りで見え、女将さんに声を掛けた。

「あの、すぐお風呂に入れますか？」

「ええ、大丈夫ですよ。大浴場は1階になります」

落ち着いた声で返された言葉。動揺していたように見えたのは私の思い過ごしのようなのだ。

「助かります。今日はずっと歩きっぱなしで、汗びっしょりなんです」

「そうでしたか。今日はどちらへ？」

「この辺りでバスを降りて、港の方へ」

「港の方・・・そうですか」

(・・・?)

「それでは、食事は入浴の後でお持ち致しますので、どうぞゆっくり・・・」

私は早速、浴場へ向かった。浴場は思っていたよりも遥かに大きく、銭湯のような作りになっている。まだ早いせいか、私以外誰もいない。

「いいねえ」

長々と湯船に浸かっていると、今日見た夕日を思い出した。

「海に浸かるとき、太陽もこんなに気持ちいいのかなあ」

目を閉じると、その時の光景が鮮明に映りだした。

「・・・気持ちいい」

「痛、」

背中に刺激痛が走った。

「やっぱり火傷したのかな？」

私は湯船から出ると、髪を洗い始めた。シャンプーの量が多かったのか、泡立ちが強い。目に入らないように瞼を閉じると、戸が開く音が聞こえた。

(貸し切りもここまでか)

「湯加減はいかがですか？」

入ってきたのは女将さんのようだ。

「ええ、丁度いいですよ」

「・・・そうですね」

冷めた声で言葉が返ってくると、何故か背中に視線を感じた。

「・・・あの、何か？」

「いえ、失礼しました。どうぞごゆっくり」

「・・・はい」

遠のく足音に、戸が閉まる音。私は溜め息の後、桶に溜まったお湯を頭からかぶった。

ゆっくりと目を開けると、鏡に映ったいつもの自分と目が合った。

「私は・・・変？」

入浴の後食事を済ませると、すぐに睡魔に襲われた。転がり落ちるように遠のく意識。

長く、不思議な一日の終わり。

3・始まりの歯車

3・始まりの歯車

「ここは・・・何処」

私はいつの間にか、知らない場所を歩いていた。

とても・・・不思議な町並み。変わった建物ばかりが並んでいて、それでいて調和がある。まるで町そのものが、大きな建築物のような気さえする。

「これは・・・夢か」

私は今、目を瞑った自分の意識の中にいる。それは何となく分かった。

「それで？どうすればいい？」

階段を上り、建物同士を繋ぐアーチ状の通路の下を潜り、今度は階段を降りる。迷路のような町を闇雲に歩き続ける私。

「・・・何か聞こえる」

遠くで音・・・いや、音楽が聞こえる。この音は・・・ハープ？耳を澄ましながら、音のする方へ体を向けたときだ。突然、頭上に轟音が響いた。

「さ、起きて下さい」

女将さんの声だ。女将さんは襖を力任せに開け放ち、私に大きな声を浴びせた。

「起きろ、と言っているのが聞こえないのですか？」

昨日とは違う声色。冷たい感情が宿った声。

「あ・・・つと。朝食ですか？」

夢の中から引きずり出された私は、まだ馴染んでいない体を巧く動かせないまま答えた。

「今・・・起きます」

フラフラと立ち上がると、鋭い目をした女将さんが私を見据えていた。

「すみません、えっと、あの」

起き上がったものの、言葉が続かない。口をモゴモゴさせていると、痺れを切らせた女将さんが冷たく話し掛けた。

「さあ、もうお帰りになって下さいな」

「?・・・??」

「聞こえましたか?もう帰ってくれと言っただんです」

「・・・へ?」

まだはつきりしない思考回路は、この現状を把握できないでいる。あの、今何時ですか?」

宿泊は一日。きつとチェックアウトの時間が迫っていて、これ以上いるならもう一日分の料金が発生してしまう。だから起こされたのだろう。

「・・・朝の8時です」

「・・・どうやら違うようだ。」

「さ、早く荷物をまとめて」

一体・・・何なのよ!

「・・・っ」

行動に移さない私に苛立ったのか、女将さんは私の荷物を持って部屋を出ようとした。

「ちよ、何するんですか」

「早く出て行って下さい」

「何だっ言うの?私がかかしましたか?」

さすがに頭にきた私は、女将さんに強く問いかけた。しかし女将さんは動じることなく、目を細め、冷たく私に、

「答える必要はありません」

と言った。

「・・・じゃあせめて着替えだけでも」

そう言つと、女将さんは鋭い舌打ちをした。

「・・・この疫病神」

そう言い残すと、女将さんは私の荷物を置き、再び襖を力任せに閉めた。

次第に足音が遠のいていく。

「・・・もう何なのよ」

結局私は訳を知ることなく、旅館を追い出された。しばらく佇んで考えてはみたものの、答えが出るはずがない。仕方なく私は、昨日夕日を見た場所まで行くことにした。

・・・と、その前に、食べ損ねた朝食を取ろうと思い、お店を探すことにした。

「まだ早いけど、お店やつてるかなあ」

溜め息交じりで吐き出した言葉。最悪な一日の始まり方だ。

少し進むとのれんを出している蕎麦屋が目にとまった。

「ラッキー」

そのお店に駆け寄る私。しかし、私と目が合ったお店の主人は、慌てた素振りですら「準備中」の札を入り口に掲げ、そそくさと中へ入っていった。

「やっぱりまだ早いか・・・」

その時は、そうとしか考えなかった。でもその考えは、徐々に違和感へと姿を変えていた。

ワザとらしく、水を撒いたり、塩を撒いたり、なかには「本日休業」と張り紙をされたりなど、お店を見つucker度にそんな悪態をつかれた。

それだけではない。

「・・・見られている?」

確かに視線を感じる。それも冷たく、刺さるような鋭い視線だ。

通り過ぎる人の殆どが私を見ていく。私が視線を向けると、睨み返してくる。中には怯えて駆け出す人もいる。誰もいない場所を歩いていても、どこからともなく視線を感じる。

私は今、町全体から見られている。

私は立ち止まり、荷物を持つ手に力を込めた。とても苛立たい。そしてそれ以上に悲しかった。更にそれを越える、止め処ない恐怖心。荒くなる呼吸が、涙を誘う。

私は締め付ける心を振り解くように走り出した。視線を感じ続けながら、あの場所を目指した。あの場所に行ったら、すぐに帰ろう。そしてもう二度とここへは来ない。そう心に念じながら、私は走り続けた。

鳥居に手を掛け、滴り落ちる汗が土に吸い込まれていく様を見ながら、私は呼吸が整うのを待った。

が、振り切った心の乱れが私に迫り着き、また呼吸を乱し始める。私は海が見える方へ向き直り、昨日と同じように鳥居に寄り掛かった。そして力なくその場にしゃがみ込んだ。

(忘れよう。どうせこの町とはさよならするんだから・・・)

ようやく落ち着いた私は、石段へ目を向けた。茂る木に囲まれたその場所は、何処か冷たい印象を感じさせる。

辺りに誰もいないことを確認すると、私は汗を拭い、重い体を動かした。

「・・・一体、何段あるんだろう」

石段を見上げると、上の方は霞んでぼやけている。この暑さのせ

いだろうか？

「・・・ふう」

私は荷物を置き、石段を登り始めた。と同時に、涼しい風が私を駆け抜け、木々を揺らしながら頂上へ登って行った。

「・・・早く来いって？」

勿論、何となく、ね。

石段は間隔が狭く、普通に登るとつま先がぶつかってしまう程だ。その度にバランスを崩される。だから私は下を向いて、小刻みに足を運び続けた。しかし、その動きが異様に疲れる。

「っふう・・・」

私は膝に両手を付け、何度も深く息を吸い込んだ。それから上を見上げると、石段の終わりを示すように、赤い鳥居が立っていた。

「まだ・・・半分もある」

長い石段に嫌気が差し、私は頂上から目を逸らした。すると木々の間から、キラキラ輝く海と水平線が目飛び込んできた。

「はあ・・・奇麗」

しばらく眺めていると、無性に頂上からの景色が見たくなってきた。

「頑張る価値はあるかな、」

私はもう一度登る気になり、足元に視線を向けた。

「ここは立ち入り禁止だ。帰った方がいい」

突然の声に驚き、私は背筋を伸ばした。

「あっ」

と声を上げると、私の体はバランスを失った。全身を駆け巡る寒い感覚が、辺りを静寂へ変える。

（・・・落ちる？）

「ほら」

大きな手が私の腕を掴み、私の支えとなった。

「あ、ありがとう・・・ごめんなさい」

前を見ると、一人の男性が涼しそうに立っていた。

「無事か？」

そう聞こえると、辺りの静寂は覚め、夏の音が木霊し始めた。全身の冷たい空気も消え、また体が火照りだした。

「手、離すよ」

涼しい声。

「あ、はい。助かりました」

「気をつけた方がいい。この高さから落ちたら怪我じゃ済まない」
こうなった原因の男性は私を見ずに、遠くを眺めながらそう言った。

「何を・・・見ているの？」

「ん？・・・遠く」

釣られるように視線を追うと、澄んだ青空と、薄い雲。それから燃え盛る太陽が目映った。

また暑さで頭がボーっとしてきた。

「風が出てきたな。少し座って休んだらどうだ？」

その優しい声の主は視線を戻すと、彼はまだ遠くを眺めていた。

風に吹かれ、乾いた髪がサラサラと揺れている。

「そうしようかな」

私は言われたとおり、石段に座ってみた。ひんやりとした石段と、駆け抜ける風が私の微熱を攫っていく。虫の声も静かになり、木の揺れる音だけが、私の耳に届いている。

（不思議な感じ・・・）

私は急に、夏が恋しくなった。

「ねえ、あなたの名前は？」

「知りたい？」

「知りたい」

「・・・どうして？」

「呼んでみたいから」

私から始まった会話。誰が聞いても変なやり取りだろうな。

「・・・真愁しんしゅう」

「真愁さん？変わった名だね。年齢は？」

「知りたい？」

「知りたい」

「・・・どうして？」

「・・・さあ？」

「君の年齢は？」

そう言われて初めて、自分が名乗っていないことに気が付いた。

失礼しました。

「私は、水無月 朱音。24歳」

「・・・朱音・・・」

真愁の口元が少し緩んだ。私には、そう見えた。

「・・・どうかした？」

「いや・・・。なら俺も24だな」

「なら俺もって、自分の年齢でしょ？」

私は思わず吹き出してしまった。彼が私の中で、不思議な人、か

ら、変な人、に変わった瞬間だった。

チラリと真愁の瞳を覗くと、彼はまだ遠くを見ていた。

「・・・・・・」

少し、嬉しかった。真愁だけは私を変な目で見ない。たったそれだけの事なのに、嬉しかった。それだけ私は怖かったのだろう。この町の人から向けられる視線が。

「ずっとこの町に住んでいるの？」

「生まれた頃からずっとな。ここから出たことがない」

「この町・・・好き？」

私は遠まわしに聞いてみた。

「どうか・・・何も感じないな」

「・・・そう」

(私は・・・怖いよ。この町が)

「この先は、立ち入り禁止?」

「そう。誰かがそう決めたわけじゃないけどな」

「どういうこと?」

「町の人は絶対にここには来ない」

「どうして?」

「・・・さあ、ね。登っても何も無い。疲れるだけだ。朱音みたい
にね」

ドキツとした。久しぶりに、本当に久しぶりに名前を呼んでもら
えたからだ。

「そっか。じゃあ、ここまででいいや。いい景色も見られたし」

その言葉どおり、この先に対する興味はなくなっていた。名前を
呼んでもらえたこととお腹いっぱいになったのだろう。

「朱音は、どうしてここに来た?」

「ん?」

真愁が少し俯いて言った。

「ここへ来たのは、ただの偶然。子供の頃から見続けている夢の場
所を捜して、流れ着いただけ」

私はその夢を詳しく真愁に説明した。

「私って、子供の頃のことって全然覚えてないんだけどね。思い出
そうとすると、肩がこるって言うか、面倒になるって言うか。あん
まり考えたくなくなるんだよね。だからどうしてこの場所を夢で見
るのか、自分でも分からないんだよ」

「子供の頃に・・・見た場所だから?」

「多分ね。何故かは分からない。だけど、そんな気がしてならない
の。私が覚えている一番古い記憶は、お爺ちゃんに遊んでもらって

いる夢。だからこの場所を見たのは、それよりも前ってことになるよね。それが全、然、思い出せない」

「・・・別にいいだろ。思い出さなくても」

「ま、そうだろうね」

「今は、何処に住んでいるんだ？」

「今度は少し嬉しそうに私に問いかけた。

「ここからずっと遠い場所。私を育ててくれたお爺ちゃんの家で、アンティークショップを経営してる」

「アンティーク・・・？」

「知らないの？歴史のある物ばかりを扱うお店のこと」

「知らないな。聞かせて欲しい」

「例えばね、」

私は手振り身振りを加えながら、無我夢中で話し続けた。真愁は、まるで我が子の話を聞くように優しく頷きながら、ずっと私の話を聞き続けた。

「何だか不思議な気持ち。ずっと昔にも、こんな事があったような気がする。遠い昔、今みたいに、私の話を、私の隣で、優しい人が。」

「お爺ちゃんの顔しか浮かばない。と言うより、他の人を知らない。どうした？」

「・・・いえ、何でも」

私は頭を掻きながら、唇を噛んだ。

「それで、どうやって値段を決めるんだ？古い物ばかりなんだろう？」「古い物ばかりって訳じゃないけどね。私は買いたい人を見て値段を決めるんだ」

「つまり？」

「どんな物にも思い出はあるの。私はその思い出に触れて、価値を決める」

「・・・思い出に触れる、か」

「私ね、手で触ると分かるんだ。その物が持っている感情とか、記憶とか。分かると言うか、伝わると言うか。例えばね、古ぼけた椅子があるとするでしょ。その椅子に触れると、どんな人が座っていたとか、どんな場所にあったとか、どれだけ季節を過ごしてきたとか、座った場所から見える景色とか、そういうのが見えるの」

これは、あまり話したことのない私の秘密。何の躊躇いもなく、流れるように話したのはこれが初めてだった。

「それは、凄い力だな」

真愁は遠くを見ながら言った。どこか、切なそうに見える。

「疑わないんだね。普通、信じないよ？」

「疑わないよ。だって、」

真愁は私を見ると言葉を詰まらせ、息を呑んだ。何だと言うのだろうか？

「・・・便利そうだ」

そして再び、遠くを見た。

「便利、かぁ・・・。それがそうでもないんだよね」

私も遠くを眺めた。

「誰かに触れると、その人の心の在り処が分かっちゃうんだ。嘘も飾りも無い心は、奇麗とは限らない」

「・・・そう」

真愁の寂しく微かな声は、風に攫われる様に消えた。

「ま、当たっているかは分からないんだけどね。そんな気がする、って感じ」

私は背伸びをしながら、脳天気を演じた。と言うか、元々そんな性格の私。

「あ、思い出した」

「何を？」

「私、お腹空いてたんだ。朝も昼も食べてないから、今にもお腹の虫が鳴りそう」

さすがの真愁も笑わずにはいられなかった。

「・・・いいな、朱音は。心そのままで」

ほんの少し、空が朱色に染まってきた。黄昏の時。

「もうすぐ日が暮れる。そろそろ帰った方がいい」

「・・・そうね」

私はふらふらと揺れながら腰を上げた。

「楽しかったよ。ありがとう、真愁」

「ああ。気を付けて帰れよ、アンティークショップに」

「ん。また逢おうね」

私はまた視線を落とし、ゆっくりと石段を降り始めた。

「そう・・・だな」

消え入りそうな声に振り返ると、そこに真愁の姿はなかった。

石段を降りきり、長いこと置きっぱなしにしていた荷物を持つと、私は港に向かって歩み始めた。

相変わらず、鋭い視線が私を捉えてくる。沸々と嫌な気持ちが高き上がってくるのが分かる。足は途端に重くなり、胸の内が次第に激しく揺れていく。

（一体・・・何なのよ）

ヒソヒソと話す声が、私の中で罵声に変わる。

（折角いい思い出ができたのに、）

全ての音が、私に向けられた憎しみに聞こえる。纏わり付く町の声に、私は耳を塞いで港へ走った。

港へ駆け込み、帰りの切符を買おうとカバンに手を伸ばした時だ。

「・・・朱音、ちゃん？」

「え？」

関を貫く、私の名を呼ぶ声。

4・鍵を持つ人

4・鍵を持つ人

私は慌てて声の主を捜した。流れる群集の中、私は一人の老婆と目が合った。その瞬間、二人の時間が止まった。

再び時が動き出すと、老婆は唇を強く閉じ、慌てて私から目を逸らした。そして私の中で、疑惑が確信へと変わった。

(この町の住人は私を知っている。忌わしく思い、私自身を戒めている)

ここを去って終わりにするか、追い求めて不可思議の正体を知るか。自分の意思で未来を動かす時だ。

(私は・・・真実が知りたい)

そそくさとこの場を去ろうとする老婆を追いかける為、私は走り出した。

「待つて、お婆ちゃん」

人ごみを掻き分けていると、ふと心が問いかけた。

(後悔しない?)

(・・・しない。衝動に駆られていても、これは私の意志。私は、自分の選択を信じる)

答えを返すと同時に、私は老婆の手を掴んだ。

「お婆ちゃん、どうして私を知っているの?お婆ちゃんだけじゃない、町の人みんなが私を知っている。どうして?何でこの町は私のことを嫌っているの?」

「ご、御免なさい、人違いでした」

私の気迫に気圧されたのか、驚いた様子で老婆は答えた。

「そんなはずない。お婆ちゃん、さつき私の名前を呼んだでしょ？」
次第に頭が熱くなつていくのが分かる。行き着く所を知らない感情は、私の中全てを駆け巡り、やがては結晶へと姿を変え、体の外へと流れ出した。

「教えて・・・どうして、何でみんなが私を知っているの？」
どうして・・・みんなが、私を嫌うの？

最後の方は言葉に成りきらなかった。私は体を支えることが出来なくなり、その場に泣き崩れてしまった。

「朱音ちゃん・・・辛い目にあつたんだね。ほら、泣くんじやないよ。さ、立って」

お婆ちゃんは私の肩を揺らした後、ぎゅつと支えた。そして力強く私を立ち上がらせた。と言うより、持ち上げた、かな。

「・・・っ・・・っ」

それでも涙は止まらない。施錠の外れた心が私を支配し続けている。大粒の涙が滞ることなく溢れてくる。私は瞳を両手で覆い、涙を受け止めることしか出来なかった。それはまるで、幼い子供のよう。

「よしよし、もう泣かない。ね？」

お婆ちゃんは私を覆うように包んでくれた。それが私の心の施錠をもう一つ外し、今度は甘えたい気持ちに暴れ出した。

あの、暖かさを求める幼い頃の感覚・・・。

私は側にあつたベンチでしばらくの間泣き続けた。すっかり空が茜色に染まった頃、涙は枯れ、心は満たされた。

泣き止んでからしばらく無言でいると、私にようやく恥ずかしいという感情が戻ってきた。それが余計気まずく、口を微かに開いては言葉を呑み、唇を噛む。どれだけそれを繰り返したか分からない。
・・・後どれ位続くのだろう。

最初に、静寂を破るのは・・・何の音？

くー。

それは私の、お腹の虫の音。

聞いた途端、お婆ちゃんは大きな声で笑い出した。その声は、次第に私の顔を赤く染めていく。そして空の色が、それをそっと隠してくれた。

「そんなに笑わなくてもいいでしょ」

「いやいや、ごめんね、安心したんだよ。お腹空いたのかい？」

「ん、ちよつと。あいや、結構、かな？昨日の夜から何も食べてないから」

思い返すと、丸一日何も食べていないことに気が付いた。

「朝早く、旅館を追い出されたんだ。それからどのお店に行っても嫌がられてさ、結局何も食べられなかった」

学校から帰ってきて、今日あった事を愚痴る小学生のように私は話した。

「帰りの切符は？もう買ったのかい？」

「まだ。それどころか、船に乗って帰れるのか調べてない」

「多分・・・帰れるよ」

「え？」

「・・・いや。何でもないよ。それより、私の家に来るかい？」

少し戸惑い、躊躇いながらもお婆ちゃんは私を優しく誘った。どこか、覚悟を感じさせる表情をしている。

「・・・いいの？」

「ああ・・・それじゃあ、行こうかね」

お婆ちゃんはベンチから立ち上がると、私の手を引いて歩き出した。私は躓きながら、お婆ちゃんの隣に急いだ。

私はこの時、お婆ちゃんの心を覗けなかった。覗こうとしなかった。代わりに、柔らかく暖かな手は、幼い頃の記憶を映し出し、私の心をふんわりと包む。心が羽を得たようだ。

「・・・トキ」

港のすぐ側の一軒家。その家の表札にそう書かれている。

「お婆ちゃんの名前？」

「そう。カタカナで、トキ」

「じゃあ、隣に書いてある、ルル、は？」

「一緒に住んでいる猫の名だよ」

そう答えながら戸を開けると、一匹の猫が行儀良く私を迎えた。

「ああっ」

「どうしたんだい？」

私を迎えた猫には見覚えがあった。そう、間違いない。

「私を港まで案内してくれた猫だ」

「じゃあ、ルルに首輪を付けたのは朱音ちゃんかい？」

首輪とはビーズアクセサリーのことだ。

「そうそう、案内してくれたお礼にと思ってね」

私はルルを抱き上げた。ルルは抵抗することなく私に身を任せた。

「・・・あれ？左目、良くなったんだ」

会った時、左目だけが赤くなっていたのを、私は鮮明に記憶していた。

「何だか雰囲気が違うねえ。本当に私を案内した猫？」

そう独り言を言うと、猫は欠伸をしながら前足で首輪を搔いた。

「・・・だよね」

予想外の再会を果たした私は、姿の無い予感を感じた。これは運命？それとも・・・。

「さあ、突っ立ってないで入んなさい」

「あ・・・うん」

私はまだ、何も知らない。きっとこれから知ることになるのだろう。但し、私がそう望めば、だ。

(・・・本当に知りたいの？)

「ご飯作っている間に、お風呂に入っちゃいな」

最初は遠慮しようと思ったのだけれど、肌触りの悪いシャツがそれを許さなかった。私をそのかすように張り付き、無言で訴えてくる。

「・・・助かります」

「遠慮はいらないよ」

気のいい声に、私は手を合わせて感謝した。

（色々な道があっても、最後は自分の意思で選んだ。そして自分の意思を信じる。そうすれば、例え選んだ選択が間違っていたとしても、後悔までは至らない。朱音にはそうやって生きて欲しい。・・・心のままに、生きて欲しい。分かるね？）

湯船に浸かりながら、私はお爺ちゃんがくれた言葉を思い出した。

「分かっている。今私は、自分の意思でここにいるよ」

私は白く染まった湯船に浮かぶ香草を手にとった。葉に付いた水滴を振り払い、茎から葉脈を辿り、先端まで目で追う。

「いい香り」

立ち昇る湯気が香草を撫でると、先端に水滴が出来上がった。大きくなった水滴は、ゆっくりと葉脈を降り始めた。やがて水滴は茎を伝い、私の手を伝い、生まれた場所である湯船へと還った。

「・・・在るべき所へ、か」

これも予感の一つなのだろうか？ 辿っている運命の一部なのだろうか？

「・・・お腹空いた」

「随分と長湯だったね」

「おかげでサッパリしました」

「さ、いっぱい食べて」

私は酔っ払ったようにフラフラと畳の上を歩き、お婆ちゃんの向かい側に腰を下ろした。丸いテーブルの上には沢山の手料理が所狭しと並んでいる。どれも美味しそう・・・だけど、

「こんなに食べられないよ」

「そうかい？あんまり大きなお腹の音だったからね、つい」

「むう・・・」

お婆ちゃんの笑い声が、私の恥ずかしい気持ちを蘇らせた。

「頂きます」

予想通り、全てを平らげることは出来なかった。残しては申し訳ないと思い、限界以上には食べたのだけど・・・。

ルルも食べ過ぎたのか、横になって動く気配が全く無い。

「ご馳走様」

「無理しなくてもよかつたのに」

「大丈夫」

・・・だと思っ。

食後のお茶を入れているお婆ちゃんに、私は尋ねることにした。

「お婆ちゃん。私、どうしても知りたい。何故、この町の人を私が知っているのか。それから、どうして私を拒むのかを」

下を向いたまましばらく黙っていたお婆ちゃんが、ゆっくりと口を開いた。

「世の中、知らなくていいこともある」

「やっぱり、おばあちゃんは何かを知っている。」

「それでも、私は知りたい。信じたいの、知りたいって私の気持ちをね。だからお願い、知っていることを教えて。」

急須に注がれたお湯が煎じられ、湯飲みへと注がれていく。徐々に湯飲みを満たしていく音が、やけに鮮明に聞こえる。

「朱音ちゃんはね、この町に住んでいたことがあるんだよ」

衝撃の言葉を述べながら、お婆ちゃんは私に湯飲みを差し出した。

「私が・・・ここに住んでいた？」

「本当に小さい頃にね。多分・・・4歳までかな。港のすぐ側に鳥居があつてね、」

「知ってる。今日行つてきたから」

「・・・そうかい。石段は登つたのかい？」

「途中まで。登りきらないで引き返したの」

「そうかい・・・。石段を登りきると、神社があるんだ。朱音ちゃんはその神社で生まれ、育つたんだよ」

「知らない・・・そんなの知らない」

いくら思い返しても、そんな記憶は見当たらない。一欠けらも捜し出せない。

「きつと忘れてしまつたんだよ。とても辛いことがあつたから」

「辛いこと？」

それがきつと、町の人が私を拒む理由なのだろう。

「昔・・・この町で何があつたの？」

「・・・」

「お婆ちゃん？」

「・・・」

お婆ちゃんは下を向いたまま、沈黙を続けている。顔を上げるところか、少しずつ前のめりになっていく。

そんな姿を見た私は、何も言えなくなつた。湯飲みの中で揺れている水面を、黙ってみているしかなかった。

「・・・ごめんね、朱音ちゃん」

お婆ちゃんは土下座をするような姿勢に蹲ると、掠れた声で泣き出した。

「ごめんね、やっぱり言えないよ。もう、これ以上は・・・許しておくれ」

許しを請うお婆ちゃんの姿を見た私は、苦しいほどに胸が締め付けられた。

本当に痛い。お婆ちゃんの苦しみが伝わってきて、息が出来ないほどに痛い。

「いいよ、お婆ちゃん。お願いだから泣かないで。もう何も、言わなくてもいいから。もう・・・いいから・・・だから・・・」

お婆ちゃんの心を両手で掬い取ると、瞬く間に指の隙間から零れ落ちた。私には抱えることの出来ない心。

私とお婆ちゃんは一緒になって泣き続けた。ルルも、一緒に泣き出した。

「誤らないで・・・お婆ちゃんが泣くことなんてないよ」

私の言葉に、お婆ちゃんがより強く泣き始めた。私もそれに続き、ルルも私たちに釣られた。

悲しい心が乾くまで泣き続けた後、私は後悔しなかった。

みんなが泣き止んだ後、私はお婆ちゃんが敷いてくれた布団で並んで眠った。月明かりだけの薄暗い部屋で目を閉じると、頭の中がすぐに真っ白になった。きつと泣きすぎたせいだろう。

(あの日のようにまた、自分が分からなくなるところだったな)
ふと、心に浮かぶ声。

(あの日・・・って、いつよ?)

5・誠めの傷跡

5・誠めの傷跡

背中を何かが伝う感触がする。その軌跡を追うように、今度は燃え上がるような痛みが背中を這う。

「熱、い」

紅蓮の炎が私に焼印を施す。そんな感じだ。

「痛っ」

激しさを増す痛みにも、私は目を開けた。

「・・・夢じゃないの？」

目が覚めた今も、痛みは消えず、熱は私を焼き続けている。

「背中が・・・」

私は布団の中で蹲り、痛みを耐えた。

どれだけ時間が経ったか分からないが、ようやく痛みはぼやけ、徐々に熱が退いていく。

私は布団を跳ね除けた。

「・・・っ」

夏の空気すら冷たく感じる。荒く息を吐きながら、背中に手を回して優しく撫でる。

「・・・」

汗で纏わり付くシャツを着替えようと思い、私は静かに立ち上がった。

静かに居間の電気を付け、バックから替えのシャツを取り出した。続いて背中を気遣いながらシャツを脱ぐと、ふとあることを思い出した。

（そつだ・・・旅館でお風呂に入った時、女将さんが私の背中を見

ていた……)

背中を凝視する視線を思い出すと、急に体が寒くなった。

「……」

私は脱いだシャツをバツクの上に置き、ゆっくり視線を左に向けた。そこには等身大の鏡があり、鏡には、何かに怯えた目をした私が映っている。

「……怖い」

私を囲むように騒ぐ虫達の声が心を乱し、不安を煽る。

私はゆっくりと鏡に背中を映した。

「圭り」

現在では使われていない言葉のようです。「けい」と読みます。

意味は「家畜などを、罠り殺す」

「はぁ……あぁ……」

人は本物の恐怖に対峙した時、何も言えない。失ったように、言葉が出てこない。

発狂しそうなほど怯え、視界は歪み、全てが闇に覆われていく。

私は震えながらシャツを着て背中を隠した。そしてこの場から、自分を染めようとする闇から逃げ出した。

自分の思考すら振り払うように、暗闇の雲に覆われた空の下を私は走り続ける。

(何も考えたくない)

私の背中めがけ、後ろから無数の手が伸びてくる気配がする。これは幻想じゃない。私を呼び覚ます、意識の訴え。

(付いてこないで)

後ろを見ない。

(触らないで)

前も見ない。

(何で・・・私が)

どこも闇。

(うるさい。聞きたくない)

目に映る全てが闇。

(もう・・・楽になりたい)

街灯のない海岸沿いの道路を走り続けると、不気味なまでに赤く染まった鳥居が見えてきた。

(きつと、全ての始まりがここにある。このまま逃げ切れないのなら、どこまでも纏わりついて来るのであれば・・・いっそ、全てを知って、)

「壊れてしまえばいい」

自分が自棄になっっているのは分かっている。それでも止められない。止められやしない。

「っ、

恐怖に飲み込まれる前にと思い、私は石段を駆け上がった。

破裂しそうな心音が、私の息を崩す。

異常な呼吸音を木霊させながら、私は一心不乱に石段を登り続けた。
(みんな消えてしまえ。全て・・・消えてしまえっ)

思うように上がらない足が纏れ、私は石段に両手を付いて倒れ込んだ。

(痛・・・)

拳を握りながら横を見ると、わずかな風に靡く木の枝、そしてそ

の奥下には、漆黒に染まった海が今にも全てを飲み込もうとつこめ
いていた。

(・・・怖い。この町は・・・黒い闇)

そう思うと、この町であった事が次々と脳裏に張り付いた。
萎縮するように蹲っていく私。このまま闇に染まると思った時、
たった一つだけ、光でできた思い出が浮かんだ。

「・・・真愁！」

大きすぎて掠れた声で、私は光の名を呼んだ。

「真愁！」

「こんな真夜中にここへ来るなんて、物好きだな」

出会った時と同じ、涼しげな声。

「どうした？ 怯えているのか？」

私は頑なに強張っている顔をゆっくりと上げた。するとそこには、
明るい表情で私の顔を覗き込む、真愁の姿があった。

「真愁・・・どうして？」

「どうしてって、俺の名を呼んだら？」

ああ・・・光が・・・闇を抜く。

私は全てを真愁に話した。何故かこの町の住人が私を知っている
こと。私を思っていること。港で会ったおばあちゃんのこと。背中
に浮かび上がった文字のこと。恐怖に駆られ、自棄になってここま
で走ってきたこと。

言葉を吐き出すにつれ、私は少しずつ落ち着きを取り戻していっ
た。でも、目の奥に潜む恐怖心だけは拭い切れなかった。

「話は分かったよ。・・・それで？これからどうしたい？」

「・・・」

「これ以上怖い思いをしたくないなら、朝までここにいればいい。俺と一緒に居てやるよ。夜が明けたら船に乗って帰れ。そしてここでことは忘れる」

(全てを、忘れる選択)

「もし・・・もしもだ。真実が知りたいのなら、ここを登りきれ」

「知る手掛かりがあるの？」

「・・・さあ、」

真愁はバツが悪そうに目を逸らした。

「俺は選んでやれない。自分で決めるんだ」

私に選択を迫る真愁。それを照らすように、千切れた暗闇の雲から月明かりが差し込んだ。

光の矢筋を辿って空を見上げると、訴えの象徴のような、欠けた月が静かに輝いていた。

(これはきつと・・・私に咲く運命)

「私は、ここで遭ったことを忘れることなんてできない。忘れたフリもできそうにない」

それだけ深い闇。心に根付く、深い闇。

「それに、全てを忘れることができたとしたら、真愁もおばあちゃんも、ルルも消えちゃう。私の中で消えちゃう」

私が本当に怖いのは・・・。

「いい思い出を忘れて生きるのは嫌。私の中で、誰かが消えてしまふのは絶対に嫌」

私の為に泣いてくれたお婆ちゃん。町を案内してくれたルル。そして、光を感じさせてくれた真愁。

・・・消えさせはしない。

「それは自棄になつての意思じゃないな？」

「・・・うん」

「選んだ選択を、後悔に繋がらないな？」

真愁は私に手を差し伸べた。この手を取ったら、私はもう戻れない。

(どうしよう・・・。なあんてね)

私は迷わず真愁の手を取った。

「後悔なんかしない。私が自分の心で選んだ未来なんだから」

真愁は鼻で小さく笑うと、グツと私の手を引いた。

「じゃあ、行こうか」

私達は手を繋いだまま石段を登り始めた。先ほどとは違い、月明かりがしっかりと足元を照らしてくれている。ふと横を見ると、漆黒に染まっていた海に、ほんの少し輝きが戻っていた。

「海が恋しいのか？」

「別に、そういう訳じゃ、」

「心配するな。朝が来たら船に乗って海の上にいるさ。それまでは・・・俺が守ってやるよ。何があってもな」

真愁の言葉に、私の胸が少し疼いた。

「おやおや？私に惚れたのかな？」

「・・・馬鹿、そんなのじゃない」

真愁は何もなかったように、私の手を握ったまま石段を登り続けた。

(じゃあ・・・どんなの?)

石段の頂上にある鳥居の前で真愁は立ち止まり、私の方へ振り返った。

「この鳥居が入り口と言えるな。最後にもう一度、」

「聞かなくていいよ」

私は真愁の言葉に割り込んだ。

「ここで逃げたら、私は闇から抜け出せなくなる」

「・・・そうか。そうだな」

私達は最後の石段を登り、鳥居をくぐった。わずかな月明かりにさらされた古びた神社が見える。

（ここが・・・私の家？生まれ、育った？）

「何か思い出したか？」

「・・・何も」

明かりの付いた神社を想像してみたが、全く記憶は呼び起こされなかった。縁日の賑わいも試してみたが、結果は同じだった。

（明かりに縁日・・・。怖がっているだけじゃない）

何を想像しても、今感じている恐怖は和まなかった。

「神社に入るぞ」

私は無言で真愁の後ろを付いていった。

「ん・・・硬いな」

真愁は神社の入り口の戸に手を掛けると、息を止めてそう言った。その声に混じり、戸の軋む音が耳を劈いた。

「・・・つと、」

両手で力を込めて戸を開くと、舞い上がった埃の二つ二つを月明かりが照らした。

「よし、入るぞ」

私は声を出さず、後に続いた。足音を殺すように、そっと足を運ぶ。

「喋らないな。怖いのに、」

「ひっ」

私は息が止まった。硬直した私の手が真愁の手を締め上げた。「いで、どうした？」

「ひ、人がいる」

私は闇に薄っすらと浮かぶ人相を指差した。

「これは人じゃない、ただの像だよ」

「あ、や、」

言葉が出てこない。

「ちよつと待ってるよ」

真愁は小走りで入り口に戻ると、開きかけの戸を全部開放した。さつきよりも多くの月明かりが差し込む。

「ほら、よく見る。ただの観音像だ」

真愁の言うとおり、私が見えた人相の正体は、桐の箱の上に乗った観音像だった。

「本当だ。・・・なあんだ」

しかし、これはこれで怖い。

(これは・・・年代物の箱だね。紫色で模様が施されている) 流れるような曲線は、美しいとしか言いようがない。

「それにしても、脅かさないでくれる？別に怒ってないけどね」

「何をブツブツ言っているんだ？早く済ませよう」

「ん、うん」

「手掛かりがあるとしたら、家の中か」

そう呟きながら、真愁は歩き続けた。私は黙って後に続く。

奥に進んで行くと、一枚のドアが私達の行く手を遮った。躊躇わずに真愁がドアを開けると、たくさんの月明かりが私達を照らした。眩しさに目を細めながらも、私は真愁の後ろからドアの向こうを覗き込んだ。

(窓がたくさん。それでか)

ドアの向こうは長い渡り廊下に繋がっていた。両脇には窓が連なっていて、月明かりが窓枠の影を廊下に映し出している。

「この廊下はどこに繋がっているの？」

「・・・行けば分かるさ」

真愁はそう言うのとドアをくぐった。勿論、私もそれに続く。私は向こうのドアまで、子供のように窓枠の影の上だけを歩き、廊下を渡った。

「渡り廊下とは、隣り合う建物を繋ぐ廊下だ。つまり、このドアの

向こうは？」

「私が・・・育った場所？」

「そうなるな」

私は思わず固唾を呑んだ。

6・私の知らない扉

6・私の知らない扉

長いこと使われていなかったのだろう。ドアノブを回すと、金きり音が響き渡った。その音は私を強張らせ、身震いを起こさせた。「ここが、私の家？」

埃の匂いが充満した部屋は、私を呼び覚ます懐かしい感覚を纏っていない。

「入ろうか」

私達は中へ入り、手掛かりになりそうなものがないか辺りを見渡した。

テーブルを囲むように配置された椅子。埃で灰色に染まったテレビ。本棚に隙間なく並んでいる本。

暗闇にすっかり慣れた目で物色を続けると、壁に掛けられている、ある物に目が留まった。月明かりが反射し、わずかに輝いている物。

「・・・折り紙」

側に寄ると、それは折り紙でできた金メダルだと分かった。

折り紙の中央には、平仮名で「あかね」と書かれている。

「私・・・本当にここに居たんだ」

「大丈夫か？」

「うん・・・」

実感がわずかに浮かんでくる。だけど、しっかりと私の中に納まらない。

「それに触るのか？」

「・・・え？」

「物に宿る記憶、探るんだろ？」

真愁は分かっていた。私がどうやって手掛かりを捜すのかを。

「やってみる」
分かりは壁からメダルを取り、目を閉じた。

幼稚園

運動・・・会？

お弁当には、私の好きな

かけっこで・・・一等賞

お父さん？・・・が、喜んでいる

「・・・何が見えた？」

「純粋な思い出。・・・楽しそうだった」

「よかったな」

（よかった？）

・・・そうかもしれない。いや、そうだ。私は笑っていたし、お父さんも嬉しそうだった。

（でも私・・・まだ信じきれない）

「・・・ここには手掛かりがない気がする。他の場所を捜そう」

私達は客間を後にし、別な場所へ移動することにした。

客間を抜けて少し進むと、正面にガラス戸が見えた。玄関のようだ。位置で言うと、神社の裏側だろう。玄関を中心に、廊下が左右に分かれている。覗いてみると、左は台所とダイニング、右はリビングに続いているのが分かった。

「台所・・・家族の、団欒？」

「行ってみるか」
私は静かに頷いた。

台所には様々な陶器や調理器具並んでいて、蜘蛛の巣があちこちに張っている。勿論、ここに美味しそうな匂いはなく、カビの匂いが充満している。

足を踏み入れると、ミシミシと床の軋む音が響いた。

「気をつけるよ」

「うん。それより、虫がないか心配。そっちの方が怖いよ」

真愁は鼻で笑うと、私の前に立ち、蜘蛛の巣を払いながら先に進んだ。

「そう言われると、戸棚や引き出しを空けるのが怖くなるな」

(・・・やぶへび)

そう思いながら食器棚を覗くと、曇ったガラスの向こうに子供用の茶碗が見えた。

(私の・・・かな)

ガラス戸を開け、私は茶碗を手を取った。そして、目を閉じた。

「ご馳走様でした」

「朱音、残しちゃ駄目でしょ？」

「あたし・・・お稽古があるから」

「朱音にお稽古はないでしょ。お兄ちゃん你真似しないの」

「だって・・・」

「だって、じゃありません。食べるまで遊んじゃ駄

目だからね」

「おかゝあさくん」

「好き嫌いはいけません。いつも言っているでしょ？」

「……朱音？」

「私……よくお母さんを困らせていた。好き嫌いが多くてね、いつも何か残していたんだ。最後には……泣きながら食べていた」
見えた記憶に混じる追憶。今だから感じる、湿った感情。

（もう好き嫌いしてないよ。もう残したりしないから、心配しないでね……お母さん）

「私には、兄がいるみたい。会話に出てきただけで、顔は見えなかったけど」

「……そう。……他を捜そう」

台所とダイニングを一通り見て回ったが、他にめぼしい物はなかった。私達は来た通路を戻り、再び玄関へ出てきた。

リビングへ向かおうとする私に、真愁が声を掛けてきた。

「朱音、子供の靴があるぞ」

言葉に釣られて玄関を見下ろすと、埃にまみれた小さな靴が横たわっていた。

「赤い靴……」

しかし、片方しかない。玄関を見渡しても、もう片方は見つからなかった。

「どうして……片方だけ？」

私は赤い靴を手に取り、目を閉じた。

「朱音見つけ」

「お兄ちゃん、見つけるのが早いよ」

「朱音がいつも同じ場所に隠れるのが悪いんだ」

「そんなことないってば」

「それとな、かくれんぼする時は外に出ちゃ駄目だって言っただろ？」

「ごめんなさい・・・」

「またそうやって泣きそうになる」

「だって・・・お兄ちゃんが怒るんだもん」

「もう怒ってないって」

「・・・本当？」

「本当々」

「朱音はこの社が好きなのか」

「やしる？」

「いつも隠れてるこの小さな小屋だよ」

「うん、好き」

「なあ、この中に何があるか知っているか？」

「知らないよ。お父さんに絶対に開けちゃ駄目だって言われているもん。お兄ちゃんは知っているの？」

「まあな」

「ずるい、朱音にも教えて」

「内緒だぞ？」

「うん、内緒」

「この中には刀があるんだ」

「かたな？」

「侍が持っているやつだよ。テレビで見たことがあるだろ？」

「分かった。悪い人をやつつけるやつだ」

「そうそう、それぞれ」

「・・・刀？」

「どうした？何が見えた？」

「私と兄が、かくれんぼをしていた。私は社の裏に隠れていて・・・兄にすぐ見つけられて・・・兄がその時話してた。この社の中には

刀があるって」

私はそこまで話すと身震いをした。真夏だというのに、寒気を感じる。

「他の場所に行ってみよう」

私は靴を元の場所に置き、立ち上がった。そしてリビングの方に目を向けると、玄関の斜め向かいに襖ふすまがあることに気が付いた。

「ここにも部屋がある」

私はそつと襖を開けた。

「ここは・・・子供部屋？」

中を覗くと、可愛いカーテンと、二つ並べられた学習机が目に映った。

「入るのか？」

私は返事をせず、中へ入った。

「ここは・・・私の部屋？」

カーテンが閉まっているせいで月明かりが乏しく、よく見えない。目を凝らし、辺りを見回す。

「・・・？」

畳を見下ろすと、大きな黒い模様が見えた。

(これは、何だろう?)

私はその模様に手を伸ばした。

「朱音！」

突然の大きな声に、私は驚いて手を引っ込めた。

「な、何？大きな声で」

「・・・いや、済まない」

私は深い溜め息をついた。

「で？どうしたの？」

「いや・・・その柱、見てみるよ」

「ん？」

真愁の指先を追うと、押入れの端の柱に目が向いた。

「傷、あるよな？」

よく見ると、真愁の言ったとおり、柱に横線の傷が付いていた。

「本当だ」

横線の傷の端には「4さい」と書いてある。私の身長だろうか？

「・・・ん？」

ふと押入れを見た時だ。押入れの戸に細い穴が空いているのに気が付いた。

（何だろう？）

丸みを帯びた三角の穴。位置も何となく不自然。

私は押入れを開けてみた。中は上下に分かれていて、上の段には小さな布団が収められていた。傷のあった下の段には何も入っていない。

私は押入れを閉め、もう一度不自然な穴を凝視した。

「この穴から・・・何か感じる」

私はそつとその穴に触れ、目を閉じた。

「君は二人を連れて、」

「そんな、みんなで逃げましょう」

「すぐそこまで来ている。私が食い止めるから、その内に」

「無茶よ」

「無茶でもいい。資格こそないが、私は家族の・・・だ」

「でも・・・でも！」

「闇を抜える二人を頼んだよ。・・・さあ、早く」

「二人とも、私の手を離さないでね」

「久しいな、水無月の者。と言っても、お前と会うのは初めてか」

「話しは聞いている。お前が・・・か」

「お前に用はない。・・・を出せ」

「まさか・・・」

「早く、この中に入って」

「怖いよ・・・お兄ちゃん」

「大丈夫、俺が守ってやるよ」

「逃げる、朱音！」

「・・・い、おい、しつかりしろ、朱音」

意識が私に戻ると、異常なほどの震えが私を襲った。

「分かった。・・・見えた」

それは戦慄の記憶。見えたのは血。聞こえたのは悲鳴。感じたのは何よりも黒い感情。

「聞いて、真愁」

「もういい、止める」

「お願い、聞いて」

私は短く息を何度も吸いながら、真愁の手を取った。

「お願い・・・。一人じゃ抱えきれそうにないの」

今にも闇に飲まれそう。その闇の中で、記憶の中で見た悪鬼が微笑を浮かべて手招いている。そう思うと、気が狂いそうになる。

「・・・お願い」

真愁だけが、私の光。

「・・・分かった、聞こう」

真愁は私の手を包んでそう言った。

「落ち着いて、ゆっくり話すんだ。自分を見失わないように、な」
震える私を見守り、優しい声を掛ける真愁。暗闇の中で感じる真愁の感情は、やがて私の心音を調律し始めた。

自分が戦慄に負けないように・・・。

自分が壊れてしまわないように・・・。

「私が子供の頃、ここに住んでいた頃。夜に何者かがこの神社に訪れたの。誰かは分からないけど・・・その夜、悲劇は起こった」

私はさつき見た記憶の底を掬い上げ、語り始めた。

7・欲火に焦がれる者

7・欲火に焦がれる者

4歳の頃の私は、兄と同じ部屋で寝ていた。夜が怖い私は、夜中に一人でトイレに行くことができず、兄と一緒に着いて来てもらっていた。・・・あの夜もそう。

「ねえ・・・お兄ちゃん、起きて」

「うん・・・何だよ」

「トイレ行きたい」

「・・・一人で行けよ」

「一人じゃ怖いもん」

私のわがままに兄は嫌がっていたが、結局折れてくれた。目を擦りながら、しぶしぶ私の手を引いて一緒にトイレへ。

「ねえ、ちゃんといる？」

「いるつてば。早く・・・しなよ」

大きな欠伸がトイレのドアを突き抜けて聞こえる。気の抜けるような安堵感が私を訪れた。

「ごめんね、ありがとう」

「ん、いいよ」

再び私の手を引いて部屋に戻るうとする兄。歩く度に床の軋む音がする。

「もっとゆっくり歩いてよ」

「朱音は怖がりだなあ」

兄にしがみつきながら部屋に戻る途中、リビングの方に明かりが点いているのに気が付いた。

「まだ起きているのかな？」

「まだ10時だから、大人は寝ないんだよ。なあ、ちょっと行ってみようか？何か美味しい物食べているかもしれないぞ」

「ええ、ずるい」

「よし、行ってみよう」

兄は私の手を引き、リビングの方へ。そして、そつと襖に手を掛けた時だ。乱暴に玄関の戸が開かれた。私達は驚いて悲鳴を上げた。

「はあ、つあ……。お前達、まだ起きていたのか？」

玄関を開けたのはお父さんだった。

「ご、ごめんなさい。トイレに行って、明かりが、見えたから……」

兄は言葉を詰まらせながら、手振りを交えて説明した。こんな時でも、兄は私の手を離さなかった。

「いや、いいんだ」

お父さんは肩で息をしながら言った。

「あなた、どうしたの？」

リビングから慌ててお母さんが出てきた。

「今さっき、社に行ってみたら、見知らぬ人がいた」

「まさかさっき電話で連絡があった……」

「かもしれない。社の中にある時雨を手にしたら、大変なことになる」

時雨しぐれとは、社の中に収められている刀の名前。

「さあ出て来い、水無月！長い間この時を待ったぞ！」

突然、外に荒々しい叫び声が聞こえた。叫び声と言うより、獣の咆哮に近い。

異常なまでの威圧感に怯えるように、玄関の戸がカタカタと音を立てた。

私は訳が分からず、お父さんとお母さんの顔を交互に見つめていた。二人とも、青ざめている。

「君は二人を連れて行け」

「そんな、みんなで逃げましょう」

お母さんは泣きそうな声をしている。

「すぐそこまで来ている。私が食い止めるから、その内に」

「無茶よ」

「無茶でもいい。資格こそないが、私は家族の守人だ」

「でも……でも！」

「闇を抜える二人を頼んだよ。……さあ、早く」

その言葉が、私が聞いたお父さんの最後の言葉。

お父さんが玄関に向かつて走り出すと、お母さんはその場に泣き崩れた。

「おかあ……さん？」

4歳の私には、この時何が起きたのか全く分からなかった。

「これが……宿命」

小さな声でそう呟くと、お母さんは覚悟を決めた顔で立ち上がり、私達の手を取った。

「二人とも、私の手を離さないでね」

お母さんが駆け出そうとしたその時、外から声が聞こえた。

「久しいな、水無月の者。と言つても、お前と会うのは初めてか」

「その禍々しい目……間違いない」

「察しがいいな」

「……話しは聞いている。お前が鴉か」

「お前に用はない。水無月の血筋を出せ」

「やっぱり……鴉が……」

お母さんの手に力がこもった。

「出す気はないか。なら呼んでもらおうか」

外から激しく砂利を踏む音と、鋭い風切り音が聞こえ始めた。そ

の音に続き、砂利と金属がぶつかる音が聞こえた。

「まさか……」

お母さんは無言のまま私達の部屋へと素早く移動した。そして部屋の照明を消すと、押入れの襖を開けた。

「早く、この中に入って」

その言葉にいち早く反応した兄が、先に押入れに入り込んだ。

「朱音、早く入れ」

私は訳が分からないまま言葉に従った。押入れの中に入ると、兄は私を引き寄せ、背中から私を抱いた。

お母さんは押入れを閉めると、戸越に小さな声で言葉を送った。

「何があっても、この中でじっとしていて。声を出しちゃ駄目よ」

その言葉が、私が聞いたお母さんの最後の言葉。

「……」

「……」

「……」

「……」

「怖いよ……お兄ちゃん」

「大丈夫。俺が守ってやるよ」

頭を撫でながら、耳元でそっと囁く兄。

重なり合う心音。私は今……守られている。

乱暴に玄関を開ける音が暗闇に響いた。私を抱く手に力が入る。

「声、出すなよ」

私は頷いて答えた。

・・・ギイ・・・

・・・ギイ・・・

・・・ギイ・・・

床の軋む音が家の中を徘徊している。

遠ざかる足音。完全な静寂が、余計に私の正気を削っていく。口を窄め、ゆっくりと呼吸をするものの、破裂しそうな心臓に振り回され、痙攣するように体が揺れる。

再び床の軋む音が聞こえ始めた。徐々にこの部屋へと近づいてくる。

・・・ギイ

・・・ギイ・・・

ギイ・・・

ギ

音が部屋の前で止まった。

スーッと静かに襖が開く音。

緊張の限界に達した私は、呼吸の仕方を忘れ、喉を鳴らして息を

吸い込んだ。

お兄ちゃんが慌てて私の口に手を当てた。

「隠れてないで、出てきたらどうだ？」

見知らぬ男の声に、私は祈るように手を握り合わせた。

「そう恐れるな。・・・迎えに来ただけだ」

唸る心音を少しでも抑えようと、私は握り合わせた手を胸へ運んだ。

「出て来ないか・・・残念だ」

男は突然、押入れに刀を刺してきた。

目の前で刀が妖しく揺れている。私の息が完全に止まった。目の前が霞み、意識がまどろむように曖昧になっていく。

唐紙が擦れる音を響かせながら、ゆつくりと刀が抜かれていく。

開けられた穴から月明かりが差し込んだ。

無音の時。私は強く目を閉じた。

どれだけの時間が過ぎたのかわからない。刹那？永劫？

尽きるように瞼から力が抜けていく。私の意志に逆らい、開かれる眼。

うつろう瞳が最初に映し出したのは、刀で開けられた穴から覗く、

深紅の眼だった。

「あ・・・あ・・・お、お兄ちゃん」

「逃げろ、朱音！」

兄は勢いよく押入れを開けると、男に飛びかかって行った。

「早く逃げろ」

よろめく男の足にしがみつき、小さな力で抵抗を始めた。

「でも・・・でも、」

「いいから、早く行け！」

「・・・っ」

気迫のこもった言葉に押されるように、私は走り出した。喚きながら、泣きながら、必死に足を動かした。そして気が狂いそうな中、靴に足を乱暴にはめ込み、よろめきながら再び駆け出した。

「これが、この家を襲った悲劇。真愁・・・私・・・」

「朱音、もういい」

「私・・・私」

「もういいって」

欠けた記憶。大切な人を全て奪われる記憶。色濃い、漆黒の記憶。

「もうすぐ夜が明ける。もうここを出よう」

「まだ・・・終わってない」

そう・・・まだ終わりじゃない。

「何を言う」

「この後・・・私はどうなったの？背中に浮かび上がった文字は何？」

そう、欠けた記憶にはまだ続きがある。

・・・知りたい。全てを見届けなければ、私の世界は救われない。

「この家から逃げた後の事なんて、どうやって知る？何を触っても分かるはずない」

いや・・・それは違う。

「一つだけ、方法があるよ」

「・・・？」

もうこれしかない。欠けた真実を埋める、唯一の方法。

私は深呼吸をした後、自分の胸に手を当てた。

「私自身に触れば・・・見えるはず。試したことないけどね」

そう言って、下手な作り笑いを浮かべると、真愁は真顔で私の瞳

を覗き込んだ。

「ふう・・・止めても無駄か」

覚悟を察してくれた真愁に、今度は本当の笑顔を浮かべた。

「繋いだ手、離さないでね」

「ああ、約束だ」

その言葉を胸に宿し、私は目を閉じた。

8・そして始まりへ

8・そして始まりへ

(ここが・・・私の世界?)

精神世界の始まりは、自分の部屋だった。

(一番落ち着く場所だから?)

私は少し戸惑いながらも、白い雰囲気が漂う部屋を見渡した。

(ここに手掛かりはない。でも、どうすればいいの?)

勝手が分からないまま、とりあえず私は部屋のドアを開けた。すると、ドアの向こうは、

(ええ?)

星空に繋がっていた。

(何が何だか・・・)

360度全てが宇宙。ドアに掴まりながら、恐る恐る片足を伸ばすと、足元に波紋が広がった。

(・・・)

続いて体重を乗せてみる。底が抜けたり、沈んでいくような感じはしない。

(歩ける、かな)

私はドアをくぐり、亜空間を歩き出した。

しばらく進むと、空間にドアが浮かんでいた。アンティークショップの入り口と同じドアだ。

少しだけドアを開いて覗いてみると、お店の模様変えをしている私が見えた。

(これは・・・旅に出る直前の記憶だ)

開いたドアから目を離し、亜空間の奥を見ると、様々な扉が浮かんでいるのに気が付いた。

(古い記憶ほど、奥にあるのかな?)

私はドアを閉め、奥に向かって歩き出した。

ドアや扉の向こうは、その記憶の司る場所に繋がっているらしい。例を言つと、友達の家のドアを開けると、その友達との記憶が見られる。

私は忘れた記憶の扉を探し始めた。

精神世界に存在する扉は、分かり易いものばかりではない。本の表紙や、車のドア。大きな鏡や、テレビ、水溜りなど。何を象徴しているのか分からないものもたくさんあった。

どれも覗けるのだろつけど、今は目的がある。私は目移りをやめ、目的の扉を探すために精神世界を歩き続けた。

しばらく進むと、それらしい扉が私の正面に姿を現した。

(間違いない、これだ)

わたしはそう確信した。何故なら、その扉はパズルピースのようにバラバラになっていて、扉の縁ふちだけが立っていたからだ。

(壊れた記憶・・・直せるのかな)

私は辺りに漂っているドアの破片を手に取り、縁へと運んだ。

正しい位置に持っていくと、欠片は音もなく融合する。

一つ、また一つとはめていく度に、私の不安は募っていく。この感じは忘れられない、もう二度と忘れられない。

(そう・・・あの時の感じだ。こんな破片からも伝わってくるなんて・・・)

私は最後の欠片、ドアノブのついた欠片を手に取り、静かにはめ込んだ。

ゆっくりとドアノブを回すと、カチャ、と音を立てた。

私は固唾を飲んだ後、古の扉を開けた。

扉の向こうに石段が見える。位置からして、鳥居をくぐった所だと言っか、鳥居が扉なのだろう。

私は扉をくぐり、この記憶の中へ入った。完全に扉をくぐると、扉は音もなく消え去った。

「帰れるのかな・・・」

不安に駆られながらも、私は石段を登り始めた。辺りにはあの時と同じ、不穏な空気が漂っている。

そう・・・ここには続きがある。

「私は・・・知りたい」

気持ちを声に出し、私は石段を登り続けた。真実を確かめる為に失くした記憶の結末を知る為に。

石段を登りきり、神社の裏へ回る。そして玄関の前に立った時、中から声が聞こえてきた。

「逃げる、朱音！」

やっぱり間違いない。

(この後・・・何があったの?)

緊張しながら玄関の前で立ち尽くしていると、中からバタバタと音が聞こえてきた。その音に驚いて身構えると、勢いよく開けられた玄関の戸から、幼い頃の私が泣きながら飛び出してきた。

「あ、待って」

私の声が聞こえるはずがなく、幼い私は全速力で石段へと駆けて行く。

私は見失わないように後を追った。石段を降り、港を過ぎ去り、景色は商店街へと変わっていく。

幼い私は商店街へ入ると、大きな声で喚きだした。すると、お店

に明かりが灯り始め、あつという間に人だかりができた。

「どうした？」

「何かあつたの？」

「・・・朱音ちゃんかい？」

幼い私は大人に囲まれると、今度は安堵感の涙を零し始めた。

「神社に・・・知らない人が・・・お父さんが・・・お母さんも・・・お兄ちゃんも」

幼い私がぐちゃぐちゃの片言で話すと、町の人達の顔が青ざめていった。

「まさか・・・本当に？」

「港の騒ぎと関係が？」

「こんな片田舎で？」

「神社には刀が・・・」

「・・・一大事になるかも」

次々ときりなく飛び交う言葉に耳を傾けていると、目の前の光景が歪み始めた。それに合わせ、意識が遠のいていくが分かる。そして突然、停電が起きたように目の前が真っ暗になった。

しばらくすると、意識に明かりが灯り始めた。付けられたテレビのように、目の前に光景が広がる。

(ここは・・・?)

私は見知らぬ部屋に居た。

(・・・そうか。さっき私は気を失ったんだ。だから意識が飛んで・・・)

今見えている光景は、町人の何人かが集まって会議をしている様子。全員畳の上に座っていて、雑談が飛び交っている。皆が何を話しているか分からないが、緊迫した空気に包まれている。

幼い私は部屋の隅で丸くなっていた。泣き疲れた様子で、顔に全く覇気が無い。

私は、私の隣に座り、ただ呆然と部屋を眺めている。

(意識がハッキリしない。この時の私がそうだからか)

しばらくすると、一人の男性がこの部屋を訪れた。全員が静まり、男に視線が集まる。

男は安堵の表情で、

「死んだよ、さっき警官が撃ち殺した」

と言った。察するに、死んだのはこの事件の元凶である、鴉という奴だろう。

男の言葉に、辺りは再び雑談が飛び交い始めた。

「終わったな」

「しかし何でこんなことが？」

「生き残ったのは娘一人なんだろう？」

「こんなことが起こるなんて」

「静かに」

部屋を埋め尽くすほどの大きな声が聞こえると、部屋中の大人が一斉に口を閉ざした。

「・・・よろしい」

先ほどの声の主が不適な笑みでそう言うと、大人達は一斉に萎縮し始めた。

物言いや態度、周りの反応から察すると、この人はよほどの権力者らしい。

「平和そのものだったこの町で、こんな事件が起こるとは思わなかったな。一夜にして死者が4人、いや、犯人を含めると5人か」

事の重大さを伝えると、全員が固唾を呑んだ。

「まず、今回の事件について整理してみようか」

私は悲劇の全貌が明らかになると思い、前のめりになって耳を澄ました。

「始まりは、私の家にかかってきた電話だ。かけたのは・・・」

「俺だ。港にある公衆電話からかけた」

「皆に内容を」

「俺は弟と港にいたんだ。船の最終便が港に着いて、船から一人だけ乗客が降りてきたんだ。そいつは見たことのない男で、どこか、変わった雰囲気をしていた。俺は関わりたくないと思ったんだが、弟がそいつに声を掛けたんだ」

「こんな夜中に観光かい？」

「・・・水無月という名を探している。この町にいるのだろうか？」

「ああ、それなら、港を出てあっちに行くと、鳥居が見えてくる。

その側にある石段を登ると神社があつて、そこに住んでいるよ」

「・・・そうか」

「水無月さんの知り合い、」

「弟がそう言い掛けると、よそ者は弟の首を折ったんだ。弟はまるで・・・糸が切れた人形のように、」

「もういい、分かった。私はその経緯を聞いた後、町内で連絡を回すように促した」

そうだ・・・私の家にも電話がかかってきたみたいだった。

「その異常者は、水無月を探して神社に向かった。そこで刀を手にし、一家を惨殺した。そして、あの娘だけが生き残った」

そう言つて幼い私を顎で指した。全ての視線が幼い私に向けられた。

寒気を感じずにはいられない。

「異常者は発狂していて、手が付けられない状態だった。止むを得ず、警官が発砲。そうだな？」

「はい。全てその通りです」

「刀は今何処に？」

「分かりません。異常者は持っていませんでした」

これが事件の全貌。でも分からない、何故私の家にあの男が押し入ったのか。お互い、知っているような素振りだったし。

「この悲劇は、水無月の者が居なければ起きなかった。そうは思わないか？」

権力者は全てが納得したように、そう力説した。この場にいる人々の全てがこの言葉に流され、浅ましい了見に支配されていった。

同調する意見が飛び交い、声を荒げながら水無月の名を汚す集団は、まるで宗教のようだ。

「水無月だけじゃない。あの刀だって妖しい物ですよ」

襖を少し開き、その隙間から誰かがそう言った。

「お前、休んでいると言ったじゃないか」

「こんな時に休んではいられませんよ。私もこの町の住人。あなたと一緒に町の安全を考える義務があります」

着物を着た女性は冷たい目と口調でそう言うと、この部屋に入り、忌々しい権力者の隣に腰を下ろした。どうやら夫婦のようだ。

「大体、刀を祀っていること自体が不吉ですよ」

「確かに。私もそう思う」

この場の支配者が二人に増えた。

「何人も人を殺めておいて、責の念を感じるどころか、発狂するなんて……。あの刀には人を狂わす妖しい力があるとしたか考えられません」

細い線のような声。どこか聞き覚えがある。

「言われてみればそうかもしれない。やはり、その刀を保持していた水無月家に元凶があると見て間違いなさそうだ」

（何を……私の家族は関係ない……ただの被害者よ）

幼い私に集まる視線が次第に鋭くなっていく。

幼い私は何も理解できず、目を泳がせて震えている。

「この子はどうするのです？」

「この子は水無月家の生き残り。そして町の疫病神」

この声……思い出した。私が泊まった宿の女将だ。

(妖花のような人。・・・何を胸に抱けば、こんな声が出せるの?)

「あなた、厄払いをしましょう」

そう言うのと、着物の袖から紙袋を取り出した。

「そうだな。そうするしかあるまい」

権力者は紙袋を受け取ると、袋を空け、中から毒々しい草を取り出した。

「誰か、この草をすり潰してくれ」

「・・・それは？」

「蠅草と言ってな、体に巢食う厄や災いを焼き尽くす草だ。この娘に塗れば厄払いになるう」

「私がやりましょう。それと、筆を持ってきます」

「・・・では頼む。触れないように気を付けよ」

背中が・・・疼く。

「ちょっと待った。納得がいかないよ」

たった一人、この場の支配者に逆らおうとする人がいた。

「聞けばその異常者は、これまでに13人も人を殺めた奴だっただけだよ。元々頭のおかしな奴だったんだ。水無月家に厄なんかありやしないよ」

それは、トキお婆ちゃんだった。

「水無月さんはね、私らが生まれる前からこの町で仏に遣えていたんだ。由緒ある家系なんだよ。それを元凶だなんて、甚だしい話しだよ」

「トキさん、何かあってからでは遅いんだ」

「何もありませんよ。これ以上朱音ちゃんを苦しめたら、私が許さないよ！」

お婆ちゃん・・・私を助けようとしてくれたんだね。

「誰か、トキさんを外に追い出せ。それから、その娘をここへ」

権力者の声に、この場が大きく動き出した。幼い私に、無数の手

が伸びてくる。

「あつ・・・あつ・・・いやあつ」

叫び声も抵抗も全くの虚無。何の意味も持たない。力づくで全身を？まれ、幼い私は権力者の前に差し出された。まるで生け贄のよう。

「止めな、あんた達みんな狂っているよ」

お婆ちゃんは腕を？まれながらも必死に呼びかけた。

「みんな、狂ってる。朱音ちゃん、逃げて」

遠のくお婆ちゃんの声。私は髪を掻き毟りながらこの場に蹲った。全てを否定するように。

「私には・・・何も聞こえない。何も見えない」

そう言い聞かせる。が、幼い私の意識が心になだれ込んでくる。

(こんな・・・こんな、)

目を閉じても私の中に映り続ける。

大人達に囲まれ、服を剥ぎ取られる。全裸の私をうつ伏せにさせ、この世のものとは思えない、憎悪のこもった力で押さえつける。

「ああああああああ」

今にも弦が切れそうな高い声で泣き叫ぶ幼い私。それと同時に、私の背中にも激痛が走った。煉獄の炎に焼かれるような、激しい痛み。

「もう・・・やめ、て」

悲しみの宿った二人の声。しかしその声に全く躊躇うことなく、筆は文字を描き続けた。

虚空の意識の中で、町人の声が聞こえてくる。

「これで・・・もう・・・大丈夫」

「二度と・・・悲劇は・・・起きない」

「長い・・・夜・・・だったな」

「この子は・・・どうする？」

「厄が抜けるまで・・・神社に」

「いつそのこと・・・神社に火を」

気が付くと、私は光の足りない暗い場所に居た。隣ですすり泣く声が聞こえる。勿論、もう一人の私の声だ。

私はまだ・・・記憶から覚めない。

「お兄ちゃん・・・」

幼い私の微かな声を聞いて、私達は自分の部屋に居ることに気が付いた。

辺りを見渡すと、私達以外に蹲る影があった。

「・・・兄、さん？」

畳を血で黒く染め、全く温もりを感じない。その小さな体は、もう二度と動くことはない。

兄の体には時雨が深々と刺さっており、刀を抜かせまいとしたのか、両手でしっかりと刀身を握っている。

自分の命を投げ捨てて、私を守ってくれた兄。その深い愛を感じ、私は・・・私達は一緒になって泣き続けた。

「・・・ちゃん。・・・あかねちゃん」

誰かが、私を呼んでいる。

「朱音ちゃん」

トキ・・・お婆ちゃん？」

「起きて、朱音ちゃん」

お婆ちゃんは放心状態になっている幼い私の体を、無理やり起こした。

「さあ、服を着て。ここから出るんだ」

お婆ちゃんは幼い私に服を手渡した。服を受け取ると、体が覚えている習慣だけで服を着始めた。

その間、お婆ちゃんは兄に手を合わせて拝み続けた。

「立派なお兄ちゃんだったよ。・・・安心しな、朱音ちゃんは私が守るよ」

「どこ・・・行くの？」

着替え終わった幼い私がおばあちゃんに尋ねた。

「港だよ。さ、行くよ」

お婆ちゃんは幼い私を抱きかかえると、足早に神社を後にした。勿論、私も二人に続いた。

外は夜が明けたばかりで、朝霧が立ち込めている。周りに誰もいないことを確認しながら石段を降って行く。

朝霧でぼやけて見える海は美しく、本当なら喜ぶはずなのだけど・

・今の私はとても笑えそうにない。

石段を降りきり、鳥居をくぐり、私達は誰とも会わずに港に着くことができた。船着場まで行くと、お婆ちゃんは幼い私を背中から下ろした。

「いいかい朱音ちゃん、よく聞くんだよ」

「・・・」

「ほら、しつかりしな」

押し殺した声を出し、幼い私を揺さぶるお婆ちゃん。

「・・・うん」

「よし・・・いい子だよ。いいかい、もうすぐここから朝一番の船が出る。ほら、この切符を持って」

お婆ちゃんは幼い私のポケットに乗船券を入れた。

「その船に乗って、何処か遠くの町に行くんだ。町に着いたら、誰かに助けを求めらんだよ？いいね？」

「・・・分かった」

「それから、ここであったことは全部忘れるんだ。いいね？」

「・・・お婆ちゃんは？一緒に来てくれないの？」

「私はここに残って、町の人に正気を取り戻させなきゃいけない。

朱音ちゃんにしたことは、絶対に許されることじゃないからね」

「一人でなんて・・・無理だよお」

消え入りそうな声を出す幼い私を、お婆ちゃんは強く抱きしめた。

「朱音ちゃんはね、一人じゃないんだよ。お父さんも、お母さんも、妹思いのお兄ちゃんも、みんな心にいるからね」

そう言うと、お婆ちゃんは幼い私の胸に手を当てた。

「私の心も、一緒に」

お婆ちゃんは目を閉じた。

「朱音ちゃんは強い子だよ。紫吹ちゃんに良く似ている」

「しすい？」

「朱音ちゃんのお婆ちゃんの名前だよ。昔からの馴染みでね、私にいい思い出をたくさんくれたんだよ」

「私のお婆ちゃん？」

「そうさ。きつと、導いてくれるよ」

お婆ちゃんは一粒の涙を零した。涙は曲線を描き、私の胸に染み込んだ。

「もう時間だ。さあ、船に乗って」

私達はお婆ちゃんに見送られながら船に乗った。

私達はお婆ちゃんが見えなくなるまで手を振り続けた。

(トキお婆ちゃんが・・・私をこの町から逃がしてくれたんだね。ずっと・・・守ってくれたんだね)

船内には誰もいない。一人きりと言うか、二人きりと言うか。

こうして私はこの町を出て行った。

その後、私達はいくつもの港を通過した。そして、見覚えのある町へ船が着いた。と言っても、幼い私はこの町を知らない。でも幼い私は、まるで何かに導かれるようにこの港で船を降りた。

その後の記憶はとても曖昧で、霞んでいる。誰に助けを求めていいのか分からず、幼い私は町の中を彷徨い続けた。歩き疲れ、途方に暮れていると、一見のお店に目が向いた。

そのお店の外には、お屋敷のお庭に置いてあるような立派なテーブルが飾ってあり、そのテーブルの上には可愛いティーカップが置いてある。テーブルの正面には豪華な椅子があり、誰かに座ってもらうのを心待ちにしている。

幼い私は、心に従うように、その椅子に腰を下ろした。

意識がまどろみ、心が洗われるような感じに、幼い私は淡い吐息を漏らした。

「これはこれは、可愛いお姫様だ。お姫様のお名前は？」

「・・・朱音。水無月、朱音」

（お爺ちゃん。・・・私を・・・お願いね）

こうして、幼い私・・・。記憶の中の私は、お爺ちゃんと巡り逢った。

それを見届けると、静かに記憶の扉が閉められた。

9・深遠の深淵

9・深遠の深淵

「……全部、見てきたよ」

「……そうか」

記憶の中を歩いている時、真愁はずっと手を握っていてくれた。この手に宿る感覚は、全てを知った私を慰めてくれる。

「これで終わったな」

「……何も聞かないの？」

「辛い思い出なんだろう？」

真愁はそう言うと、私の手を離れた。

「薄っすらと朝霧が出てきたな。もう帰った方がいい」

もう終わり？・・・違う、まだ遣り残したことがある。

「まだ終わりじゃない」

「は？」

「もう少し一緒にいて」

そう言いながら私は真愁の手を取り、歩き出した。

「お、おい、何処に、」

私は真愁の手を引き、朝霧の中を歩いて社を目指した。

「助けたいの、水無月に伝わる刀を」

助けられてばかりなんて嫌だった。父にも、母にも、兄にも、何もしてあげられなかった。だからせめて、水無月の歴史だけは守りたい。時雨が悲劇を生み出したものと、罵られるのは我慢できない。刀が持ってしまった戦慄を知って、出来るのなら浄化してあげたい。

社の前に立つと、異様な気配を感じた。

（やっぱり刀はここに）

おそらく処分することが出来ずに、元の場所に戻したに違いない。私は両手で社の小さな扉を開放した。思ったとおり、時雨は社の中で眠っていた。

「なあ、もういいだろ？」

「嫌よ。せめて刀だけでも救ってあげたい。あんな事言われて、退くわけにいかないじゃない。それに……」

「……それに、何だ？」

「私の、最後の家族だし」

私に握られていた真愁の手から力が抜けていく。私はそれを肯定と取った。

「いいのね？」

「言い出したら聞かないな。好きにしろよ、ちゃんと見届けるからさ」

私は無言で頷き、刀に手を伸ばした。

「……何があっても……朱音を守るよ」

静かに刀を手に取ると、しっかりとした重量感が押し掛かった。

（……教えて、時雨）

想い、目を閉じる。いつもなら心に情景が浮かぶのだけど、今回は何も見えない。あるのはただの暗闇。

「……え？」

何かが迫ってくる。

「黒い、感情？」

とつさに身構えたが、そんなことは何の意味も持たない。迫り来る黒い感情が私を突き抜けていく。

（これは……家族を奪った、あの鴉の心）

黒い感情が私の心を侵食していく。

「我は今、時の牢獄に居る」

「魂は彷徨い、廻り続ける」

「終わらない時」

「募る憎悪」

「沸き立つ殺意」

「黒の衝撃」

「黒の衝動」

「お前にも・・・あるはず」

「あ・・・あ・・・あ」

黒い感情が、身も心も驚掴みにして離さない。私の心が徐々に黒く染まっていくのを感じる。

（光が・・・見えない。闇しか・・・見えない）

「朱音、すっかりしろ。刀を捨てるんだ」

（真愁の声？ごめん・・・よく聞こえない）

私を弄ぶ黒い感情は、鋭い声で私を誘う。

（復讐の始まりだ）

「何処へ行く気だ？まさか、町へ？」

（・・・町？）

さつき見た幼い頃の記憶が心に映りだした。私を押さえつける無数の手。背中を染める毒。切り刻む視線。詰る言葉。

(お前にも・・・あるはず)
(・・・ある。持っている。憎しみも、怒りも、踏み躪りたい衝撃も、壊したい衝動も)

頭の中に、鞘から刀を抜く音が響いた。瞼の向こうに鋭い輝きを感じる。

「やめろ、朱音。誰も傷つけるな」

(ああ・・・真愁。お願い、逃げて)

「約束だ、今助ける」

(止まって、)

私の意に反し、体は流れるような動作で刀を構える。

(駄目、止めて)

掲げられた刀を下げ、足の指に力を込めて踏み込む。その勢いを保ち、刀を振り上げる。

「俺、守人っていうのになるんだって」

「朱音を守る役目だってさ」

「そんなの守人じゃなくてもやるって」

「4歳になったから、これから稽古が始まるんだ」

「朱音一等賞だったんだろ？俺と一緒にだ」

「朱音、稽古が終わったらまた遊ぼうな」

「またそうやって泣きそうになる」

「逃げる、朱音」

「朱音は俺が守る。俺は朱音の・・・」

「起きろよ、朱音」

耳元で、真愁の声がする。

その優しい声は光に変わり、私の心を照らして闇を払う。

強張っていた腕から憎しみが消え、持っていた刀がするりと零れ落ちた。

「ほら、もう夜明けだ」

私は真愁の声に導かれ、ゆっくりと目を開けた。

「目、覚めたか？」

「・・・うん」

真愁は朝霧の中で私を抱きしめていた。懐かしい腕に抱かれ、私の心は満たされていく。そして胸いっぱいになった光は、涙に変わって瞳を満たす。

「また・・・そうやって泣きそうになる」

「どうして・・・こんなことに・・・。私、真愁の心を斬った」

次第に真愁の・・・兄の体から力が抜けていくのが分かる。

(今度は・・・私が支えになる)

私は兄を抱えたまま、地面に膝を付いた。

「・・・お兄ちゃん」

「なんだ、気付いていたんだ」

「だって、ずっと真愁から感じていたよ。深い・・・兄弟愛を」

兄の体から光が溶け出し、空に吸い込まれるように消えていく。

「私、取り返しのつかないことを・・・」

「泣くなよ・・・朱音。俺はずっと昔に死んでいるんだからさ」

その事実が、余計に涙を誘う。

「朱音の顔が一目見たくてさ・・・朱音の声が利きたくて・・・ずっとここに残っていたんだ・・・想いが遂げられたと思ったら、

朱音は苦しんでいた。・・・なんとか、助けたくて・・・」

「私を・・・ずっと待って。・・・今まで助けてくれて・・・」

「だって・・・俺はお前の・・・」

涙が止まらない。胸が張り裂けそう。

「そんな顔するなよ」

兄はそう言いながら、私の頭を撫でてくれた。

「笑えよ。今は光の中に居るんだからさ」

闇を払い、光で満たしてくれたのは、紛れもない私の家族。最愛の・・・兄。

「もう・・・時間だ」

私は涙を撒きながら首を振った。

「やだ・・・やだあ・・・」

「聞け、朱音」

兄は私の髪を撫でながら首に手を回し、口元へ引き寄せた。

「いつまでも縛られちゃ駄目だ。黒い影は消えることはないけど・・・怯えるな。これからは、自分の力で振り払うんだ。約束してくれ」

私は無言で頷いた。

「いい子だ。・・・さすがは俺の妹」

そう言うと、兄はもう一度頭を撫でてくれた。

「時雨の意味、知っているか？」

「え？」

「泣いて涙を落とす」

「この刀は自愛の刀なんだ。誰も殺めず、悪しき心だけを斬る刀として水無月家に伝わっている。・・・でも20年前の悲劇で黒く染まってしまった。・・・けど今は・・・お前の手で救われたみたいだ。・・・見ろよ」

私は地面に落ちている時雨に目を向けた。刀身に朝霧が集い、やがて雫に変わった。時雨に出来た雫は刀身を伝い、大地へと帰った。

「ほら・・・泣いて涙を落としている。お前が救ったんだよ」

「・・・ありがとう・・・お兄ちゃん」

「そう。そうやって・・・泣かずに、笑って生きてくれ」

私は強く真愁の手を握った。

「じゃあな・・・幸せになれよ」

兄はそう言い残すと、体が完全に光に変わった。兄の光は私を覆い、私の中に染み込むように消えていった。

「約束するよ・・・優しい思い出をくれて、ありがとう・・・」

10・灯る光に、宿る想い

10・灯る光に、宿る想い

「もう船に乗るね、お婆ちゃん」

「ああ・・・そうだね」

私はあの後、お婆ちゃんの家に戻り、全てを話した。遠い記憶も、兄に逢えた事も。お婆ちゃんは疑うことなく私の話を信じてくれた。それから、その話をしている時、私は泣かなかった。むしろ、微笑みながら話した。この笑顔は、兄がくれた光。絶やさずに灯し続けようと、心に誓った。

「それじゃあ、またね、お婆ちゃん」

「あ・・・朱音ちゃん」

船に乗り込もうとする私を、お婆ちゃんは大きな声で呼び止めた。「どうしたの？大きな声出して」

「朱音ちゃん・・・もうここへは来ない方がいい。また朱音ちゃんが辛い思いをするかと思うと、私は、」

「嫌よ」

私はお婆ちゃんに割って入った。

「だって、お婆ちゃんにまた会いたいし、それに・・・お墓参りもしなきゃ」

そう・・・こんな風に私は。

「その時はまた、ご飯をご馳走してね。お風呂も貸して欲しいな」

笑って、生きていける。

「だから・・・またね、お婆ちゃん」

「・・・ああ、楽しみにしているよ。またね、朱音ちゃん」

こうして私は、流れ着いた故郷を後にした。船に揺られながら外を見ると、夕日が海に沈もうとしていた。始まりの景色は、終わりの景色に変わった。

この旅の果てに思ったのは、後悔のない旅だったという事。いっぱい泣いたり、叫んだりしたけど、私はお婆ちゃんに逢えた。お兄ちゃんにも逢えた。それに・・・私の世界は救われた。

（色んな道があっても、最後は自分の意思で選んだ。そして自分の意思を信じる。そうすれば、例えば選んだ選択が間違っていたとしても、後悔までは至らない。朱音にはそうやって生きて欲しい。・・・心のままに、生きて欲しい。分かるね？）

（分かるよ・・・お爺ちゃん）

「ん・・・はあ」

私は思いつきり背伸びをした後、声を出して笑った。

そしてできたばかりの思い出を胸に抱いて、眠りに付いた。

（ん・・・ハープの音？）

この前夢の中で聞いた音と同じ音色が聞こえる。

（この前の続き？）

私は音のする方向に向かって歩き出した。とは言え、ここは迷路のような路地。そう簡単には辿り着けない。何度も音のする場所を見上げたり、見下ろしたりと、私は夢の中を楽しそうに駆け回った。

（あ、音が近くなった）

そう感じ、先にある十字路を左に曲がると、そこにハープの奏者

はいた。

その奏者とは、ボロボロの服を着た裸足の女性だった。

(ズボンに穴開いているし、裸足だ。でも綺麗な人・・・特に、髪が)

赤茶色の階段に座り、サラサラの髪を靡かせながらハーブを奏で続けるその姿は、何とも言えない美。

私はウットリしながら目を閉じた。そしてそのまま、深い眠りに落ちていった。

11・訪れの時

11・訪れの時

広げた右手が、空を詠む。

雑踏に紛れ、親しい人の軽快な音色が聞こえる。何か楽しいことがあったのかな？と思えるような感じだ。

もう少しでお店の前。私は頼杖を付いている左手の人差し指で力ウントを取った。

(3・2・1・)

次のタイミングで、お店のカーテンコールが鳴った。

「いらつしゃいませ」

私はそう言つて友人を迎え、広げていた右手をキュッと閉じ、拳を作った。

「や、こんちわ」

予想通りの歓喜の表情を浮かべ、友人はここを訪れた。

「例の物、入荷したんでしょ？」

「勿論。すぐに見せられるよ」

私がそう言つと、彼女は高笑いをした。

「最高！さすが！仕事が早いねえ」

「褒めるのは物を見てからにしてよ」

私は席を立ち、友人を手招きした。

「朱音の仕事だから、物は確かつしょ」

「そのつもりだけど」

私達は2階へ移動した。2階はアンティーク品を納めている倉庫になっている。広さは36畳で、柔道の試合が出来るくらいの広さはある。床はフローリングではなく、畳になっている。品物を傷つけない為の配慮だ。

「あれま、ガラガラだね」

倉庫に入った途端に彼女はそう言った。

「やる気ないの？」

「そうじゃないって。最近いい品が手に入らないだけ」

「不景気ってヤツ？」

「別に。十二分に稼いでいるよ」

私は答えながら、頼まれていた品を引っ張り出した。

「早く、早く！」

急かす言葉を背に受けながら、私は嚴重に包まれた箱を開けた。白い手袋を着用し、中から美しい細工が施された台を取り出す。それを側にあつたテーブルに置いた。今度はその台に16個のグラスを収めた。

「はあ・・・美しい」

品を見ると、彼女はウツトリとした吐息を漏らした。これだけで仕事は成功と言えよう。

「これは1990年に作られたグラスハープ。名工が作った至高の一品よ。ガラスの素材一つも最高級の、」

「ん〜細かいことはいいから。大事なのは音色よ、ね・い・ろ」
「説明も仕事なんだけどなあ」

私は依頼人の要望に答える為、他の箱から水の入ったボトルを取り出した。そしてコルクを抜き、グラスに水を注いだ。

「それ、と」

銀製のボールを側の棚から取り出し、それにも水を注いでテーブルに置いた。

「どうぞ。お試しあれ」

「ではでは」

彼女はボールに指先をつけ、水の注がれたグラスの口をそつと指先で撫でた。

美しい音色が辺りに響き渡る。

「ああ・・・素晴らしい。これがグラスハーブ」

彼女に依頼されていた品はグラスハーブと言って、一種の楽器だ。水を注いだグラスの口を撫でることによって音が出る。聞いたのは今が初めてだけど、予想を遙かに上回る美しい音色が奏でられた。因みに、注ぐ水の量を変えると音も変わる。

「気に入った。いくら？」

「2千万でいいよ。今ならその銀製のボールと、天然の軟水を36本と、硬水を36本付けるよ」

「安い、買った！」

「毎度あり」

「小切手でいい？」

「勿論。送り先は？自宅？」

「事務所に送つといて」

彼女の言う事務所とは、所属している音楽事務所のことだ。

彼女の名は「ひじりかなで聖 奏」その世界ではかなり有名な音楽家で、あらゆる楽器を使いこなす天才肌。店一番の御得意様で、私の友人でもある。

「下に戻ろう。お茶でも飲んでいってよ」

「頂きます」

あれから2年。私は家に戻り、お爺ちゃんのアンティークショップを経営して一人で生きている。全てを知った今も、ここでの生活は何も変わらない。平和で、少し退屈で、ちょっと物足りない。誰にでもある日常がここにもある。

変化があったことといえば、私の右手の能力が発達したことだ。具体的に言うと、心を閉じて右手を広げれば、辺りの空気が読めるようになった。近くに誰がいるとか、何をしようとしているとか、そんなことが分かるようになった。あまり役に立たないし、やるのは気が引ける。

何故私はこんなことが出来るのだろうか？なんて、分かるはずのない事を幾度となく考え続けている。知っているなら、誰か教えて欲しいな。

「・・・ピアノの音」

お店からピアノの音が聞こえてきた。

「さすがね」

そう洩らしながら、レモンを輪切りにしてティーポットに沈める。

「~~~~」

カップを取り出す指が音色に合わせて踊り出す。

「~~~~」

「お待たせ」

私がそう言くと、奏は大振りで最後の音を奏でた。

「いいね、このピアノ」

「でしょ？グラスハープと一緒に入荷したんだ」

「あんま見ない型だね。なんてピアノ？」

「クラスペディア。心の扉を叩くって意味があるそうよ」

「おお、カッコいい」

その歓喜を指先に集め、奏は再び演奏を始めた。私は椅子に座り、その演奏を独り占めするように目を閉じた。

（・・・澁刺な音色。奏らしいな）

強気で一直線な雰囲気漂わす奏だが、子供の頃は病気がちで、満足に外に出られなかったらしい。先天性の小児癌に掛かっていたらしく、女医である母親と共にあちこちの病院を転々としながら、治療法を探していたことがあったそうだ。

その最中、同じ年頃の女の子と友達になり、その子にピアノを教わったと言っていた。

その子とはそれ以来会っていないし、連絡も取れないでいる。いつの日か、ピアノを教えてくれたその子と、音楽の世界で再会を果たすのが奏の夢。

荒ぶる情熱が冷める前に、またしても大振りな一音で幕を下ろす奏。

「・・・どう？今の曲」

「奏らしいよ。なんて曲？」

「クラスペディア、心の扉を叩く」

「ふう・・・それじゃ、殴る、でしょ」

奏は高笑いをしながら両手を首の後ろに回し、子供のように足をバタつかせた。

「でもこのピアノ、扱いづらいよ」

「そういう評価のピアノだからね」

「へえ」

「そのピアノはバレンタインモデルと言って、歴史的ピアノ奏者である、バレンタインが特注で作ったピアノのレプリカなんだよ」

「これが・・・あのピアノ・・・光栄だ」

奏は感無量の声で呟いた。

「扱いにくいという評価は、鍵盤がとても軽く、軽く触れただけでも音が出るからだそうよ。だからほんの少しの力加減でニュアンスが変わってしまうって話」

「そうなんだよねえ。ピアノニッシモが全然できない」

だから、殴る、に聞こえたのか。

「暴れ馬に乗っているみたいだったよ。ところで、このピアノはいくら？」

「五千万」

「・・・ちよつと高くない？」

「素材は一級品だからね。因みに、バレンタイン本人が使っているピアノなら億の値がつくよ」

「ピアノに・・・億」

「これはレプリカだけど、本物と全く同じ作りなんだよ」

「なのに半額になるの？」

「バレンタイン本人が使ったかどうか、それが値を決めるのよ」

それがアンティークの世界。物だけじゃ、いい値にはならない。そこに想いがなければ、ね。

「そのピアノを自在に操れたなら、1千万にしてあげるよ」
奏は両手を頭の上に掲げた。お手上げ？

「やあ」

カラン、とカーテンコールを鳴らし、お店に一人の男が訪れた。

「近くまで来たからさ、経過報告をと思っただね」

「久しぶり、迷探偵。少し痩せた？」

「どうか。聖君は相変わらずだな」

訪れたのは設楽したらくと言う名の探偵さん。奏の紹介で知り合った人だ。少しお肉が余っているような体格だが、その割にはよく動く。

「この香りはレモンティーだね。頂こう」

「はいはい」

私はカップを取りに行く為、席を立った。

私が設楽さんに依頼したのは、22年前に私の家族を殺めた異常者の素性。もう終わったとは言え、まだまだ謎が残っている。それを知りたいと思い、依頼したのだ。

「報告なんだが・・・」

設楽さんはそう言うのとチラリと奏を見た。

「奏は全部知っているよ。私の協力者」

「そうそう、誰がこの仕事を紹介したと思ってるの？」

「いや、ならいいんだ」

設楽さんはレモンティーを飲み、仕切り直した。

「まずその異常者の名前だが、鳥村 高貴。当時25歳。見た目は強面だが、周りの人からは真面目と評価されていたようだ」

「普通さあ、真面目な奴が人を何人も殺したりする？」

奏の言うとおりだ。

「まあ聞きなよ。その鳥村だが、急に人が変わったと、当時同じ職場だった人から証言を貰った」

「急に？」

「そう。彼はその証言者の目の前で、豹変した」

「どういうことよ？」

「証言者と鳥村が一緒にいる時、急に鳥村が独り言を言い出したそう
うだ」

「・・・どんな？」

「規定、欲望、得られるもの、失くすもの。かなり昔のことだから断片的な言葉しか覚えていなかったが、そう言っていたそうだよ」

「訳分かんない」

「そうなんだよな」

「それで？その後は？」

「鳥村はしばらく俯いた後、証言者を無視するように歩き出した。名前を呼んでも返事は無いし、彼からいつもと違う雰囲気を感じたそう。証言者が鳥村を追いかけて肩に手を掛けた瞬間、殺気と狂気がむき出しになっている形相で睨まれたそう。驚きのあまり、凍り付いて硬直していると、鳥村はその場から姿を晦ました」

「そして・・・渡瀬に？」

「・・・そう。ついでに言うと、鳥村は渡瀬に辿り着くまでに13人殺している。渡瀬までの足跡を残すようにね」

話が見えない。分からないことだらけだ。水無月家とは何の関係があるのだろうか。

「どうして13人も殺す必要があったの？」

「それは分からない。被害者に共通点はないし、場所も時間も適当意図があるとは到底思えない」

「さすが、迷探偵」

「そう言うな。強いて共通点を挙げるとすれば、一瞬で殺しているってこと。確実に即死するように急所ばかりを狙っていたようだ」

「話し掛けられて、挨拶代わりに殺したって感じ？」

「案外そうかもめないな」

だとしたら、そいつは憎悪の塊。私が掬い取った記憶に出てくる鴉と一致する。・・・だけど、水無月と何の関係があると言っただるう？

それに、刀に残っていた鴉の意識が語っていた時の牢獄とは？

魂は彷徨い、廻り続ける。その言葉の意味は？

「鴉・・・一体何なの・・・」

「カラス？・・・そう言えば、」

設楽さんは急にカバンの中を物色し始めた。

「どうしたの？」

「その言葉を聞いて思い出したよ。証言者が言っていたんだ、カラスがどうって」

設楽さんはカバンから手帳を取り出し、目当てのページを開いた。「頭の中に、左目が紅いカラスがいる。そう鳥村が言っていたそうだ」

(左目の紅い・・・カラス)

押入れの中を覗き込む深紅の眼。

蘇る記憶が私に身震いを起こさせた。

「・・・っ」

「どうしたの？朱音？」

「・・・いや、何でもないよ」

私は平然を装いながら、そっと自分の肩を撫で下ろした。

「すまないな、今報告できるのは以上だ」

「・・・ありがとう、引き続きお願いね」

「任せてくれ」

設楽さんがそう答えると、お店のカーテンコールが鳴り響いた。

「水無月さん、お届け物です」

「あ、はい」

私はカウンターから判子を取り出し、荷物を受け取った。

「何？何を仕入れたの？」

「さあ・・・何だろう。最近仕入れはしてないはずだけど」

届いた荷物は細長く、筒状に包装されており、嚴重にガムテープが巻かれている。

「結構、重い」

そう言いながら筒を振ってみると、先端の包装が破れ、中身が飛び出してきた。そして、カラン、と金属音を立て、布に巻かれた中身が床に落ちた。

「何、何？」

「さあ？」

私は床に落ちた、中身を包んでいる布をゆっくり剥ぎ取った。

「・・・水無月君、これ本物かい？」

「・・・マジもん？」

届いたのは日本刀だった。私の家に伝わる刀。名は、時雨。

12・歩み寄る真実

12・歩み寄る真実

「この刀、もしかして神篝かむかがりかい？」

「何？それ？」

「神篝とは歴史的名刀の名だよ。新聞に載っていただろ？最近博物館から盗まれたって。何の痕跡も残っていないから、内部の犯行だろうという見解だそうだが」

「そうなの？朱音」

「その記事は私も読んだよ。でもこの刀は神篝じゃない、時雨っていう水無月家の刀」

突然すぎて、何をどうすればいいのか分からない。

「まず、隠した方がいいのでは？」

「それだ、さすが探偵。ほら、朱音」

「そうだね」

私は刀を拾い上げると、カウンターの下にそそくさと隠した。

「発送場所は・・・渡瀬。トキって人からだな。何か聞いているかい？」

私は設楽さんの言葉を聞くと、素早く刀を包装していた筒を奪い取った。

刀は間違いないく、トキお婆ちゃんの住所から発送された物だった。

「一体どうして・・・？」

筒を覗いてみると、中に手紙が入っているのに気が付いた。私は手を入れ、筒に合わせて半円を描いている手紙を抜き取った。

「何？何だって？」

「問題かい？」

「もう、静かにしてよ」

私が一括すると二人は大人しくなり、私の肩から手紙を覗き込ん

だ。

朱音ちゃん。突然こんな物を送って済まないね。ここ最近、時雨の様子がおかしかったので、まずはそれを伝えます。

いつものように、水無月家の供養をしに神社へ訪れた時です。刀を祀ってある社から、霧が出ていました。もう正午なのに、おかしいな、と思い、社を開けてみました。すると、中には霧が充満していて、時雨からはたくさんの雫が滴り落ちていました。

何故だろうと考えてはみたものの、ハッキリと言えるものは何も分かりませんでした。しかし、その時雨の姿が頭から離れず、ずっと心に引っかかり続けました。

そしてその日の晩のこと。私の夢枕に、紫吹ちゃんが現れたのです。紫吹ちゃんは泣きながら、「トキちゃん、私の代わりに孫の朱音を守ってあげて。こんなこと頼めるのは、トキちゃんだけなの」と言いました。「勿論、任せて」と私が言うと、紫吹ちゃんは紫色の花を一輪、私に手渡して、「朱音に伝えて。宿命の時が迫っている。

時雨と共に、過去を断ち切って」と言って、スーッと消えてしまいました。

今にして思えば、時雨から零れていた雫は、紫吹ちゃんの涙だったのではないかと思えます。私には何も分からないけど、これは紫吹ちゃんの頼み。それに朱音ちゃんの為。そう思い、筆を取りました。

「宿命?・・・過去を?」

何のことだかさっぱり分からない。謎が謎を呼ぶとは正にこのこと。

「直接会って話した方がいいんじゃない?」

「・・・うん」

(時雨が・・・涙を零した?今回は、自愛の涙じゃない?)

私は隠した時雨を取り出し、両手でしっかりと持った。

(・・・あの時感じた邪気はもうない。あなたは一体・・・水無月

家の何なの？宿命の時って何のこと？)

時雨は何も答えない。

(・・・眠っている。今はまだ、その時じゃないってこと？)

「それにしてもさ、カッコいいよね。刀が似合う女って」

「同感だ」

「・・・そう？」

分からないことを考えるのが面倒になった私は二人の話に乗り、
見かねで刀を構えた。

「いいねえ、凛々しく見えるよ」

調子に乗った私は、左の親指で鍔^{つば}を弾き、わずかに時雨の刀身を
露にした。

「・・・美しい。惚れちゃいそう」

「いや、もうまずい。そろそろ隠した方がいいだろう」

「だね」

私は時雨をさっきの場所に戻し、何食わぬ顔でレモンティーを飲
み干した。

私に・・・知らない過去があるのだろうか。全てを思い出した今、
まだ知らない真実が何処かにあるのだろうか。

私の心は何も語らない。何も教えてくれない。

(宿命・・・って言われてもなあ)

私は自分の右手を広げ、手相をなぞるように目で追った。

「・・・今日は満月、か」

教えてくれたのはそれだけ。

「今日はもう終わり」

閉店にはまだ早い、人の歩みが全く感じられない今宵、これ以上
お店を空けていても無駄だ。

そう思った私は、「CLOSE」と書かれた看板を手に取り、そ

のままお店の外へ。

夜空には満月がくつきりと浮かんでいた。雲を一切纏わぬその姿は勇ましく、どこか視線を集める魅力を持っている。

「私の瞳を盗むとは・・・やるね」

誰もいないから言えること。

「・・・お団子」

しばらく月を眺めた後、私はポツリと呟きながら看板をドアにぶら下げた。

中に戻り、照明を消そうとスイッチに手を掛けた時だ。ふと、時雨が私の目に映った。

「・・・」

昼間と同じく、時雨は静けさを保っている。

「・・・宿命」

再び蘇る口伝。

(私と・・・時雨と・・・宿命。役者は揃った?)

誰も、何も答えない。

「あ、鍵掛けてないや」

私は照明を消した後、月明かりを頼りにカウンターの下に置いてある鍵に手を伸ばした。

「・・・ひっ」

突然、私の体を冷たい感覚が突き抜けた。凍れる雰囲気は私の肌を震わせる。

(何か・・・来る)

震える右手がそれを教えてくれた。

(何だろう・・・これ)

光を飲み込みながら迫る闇。そんなイメージが頭に映り出した。

(やだ・・・怖い)

私は荒れる呼吸を口で諫めながら、護身用にと思い、側にある時雨に手を掛けた。そして、迫る闇が過ぎ去ることを祈った。

壊れた記憶を見た時の、押入れの中に隠れている私。その時と同じような感じが私に纏わり付く。

徐々に近づいてくる黒い闇が、歩みを止めた。

(お店の前・・・すぐそこにいる)

震える手でカタカタと時雨を揺らしながら、闇が再び歩き出すのを強く念じた。

黒い影はドアに手を掛け、少し押してカーテンコールを鳴らした。その瞬間、私の血液が物凄い勢いで流れ出した。食い破るような圧力がお腹に押し掛かり、私は堪らず手を当てた。

「もう・・・店終いですけど?」

何が何だか分からない私は、習慣でそう答えた。

「邪魔はいない・・・都合だ」

そう答え、黒い影はお店の中に足を踏み入れた。

「ちょ、ちょ、ちょっと、」

時雨を握る手に力が入る。

「何よ、強盗?」

「強盗? 略奪者のことか? なら、そう言えなくもないな」

「お、お金ならあげるから、さっさと出てってよ」

「欲しいのは紙ではない」

(一体・・・何なの)

何が起こっているのかも、これからどうなるのかも分からない。これ以上の恐怖はない。

「そう怯えるな、水無月の者」

全身の毛が逆立つような感覚が体を駆け巡った。

(その物言い、)

「誰よ・・・あんた」

「・・・鴉。そう言えば分かるだろう?」

(・・・鴉?)

「この目に見覚えはないか？」

影はそう言うと、今まで閉じていたと思われる左目をゆっくり開けた。

「・・・ひっ」

私は息を呑んだ。

黒い影に浮かぶ、深紅の眼。私を見定める、深紅の眼。

一瞬で蘇る記憶。関連する全ての記憶の欠片が次々と頭に重なっていく。

「・・・何で・・・どうして」

「何も知らないのか。なら困惑するのも無理はない」

その声が、私を更に混乱させる。ほんの一時の間に連なる現実が、私の心を乱し、理性を狂わせる。

「興を殺ぐその目、気に入らないな。水無月とは名ばかりか」

(これが・・・宿命?)

不鮮明な思考の中、ふと過ぎった宿命という言葉に反応し、私は握り締めていた時雨を取り出して身構えた。

「ほう、時雨を手に使っていたのか」

少しは動じるかと思っただが、甘かった。刀に怯む様子は全くなく、むしろ深紅の眼に鋭さが増した。

(この感じ・・・間違いなく鴉だ)

「そんなに震えて挑めるのか？お前の守人とは大違いだな」

「守人？」

(・・・真愁の、こと?)

亡き兄を想うと、心から何かが湧き上がって来た。小さな衝動が私の胸を叩く。

「思い出したか？お前を守ろうとして何人死んだ？」

「うるさい！」

私が吼えると、涙が頬を伝い始めた。これは・・・どんな意味の涙？

「そつだ、怒れ。恐怖を飲み込むほどの憤怒を生め」

鴉の言葉に乱され、血が沸きあがる。黒い衝動が暴れ出し、心を食い散らかす。

「あんたが憎くい。憎くて堪らない」

あの時と同じだ。時雨を浄化しようと手に取った時、私は今と同じ感情に蝕まれた。

「我にはずっと見えていた。お前に宿るその闇が。その闇は、刀に触れた時に宿った我の闇。心を染め、お前の強くする」

こうなるのを待っていた。そして、この時を待っていた。そんな言い方だった。

(そんな事はどうでもいい。今、ここで刺し違えてやる)

(駄目だ、朱音)

澄んだ声が心に響いた。

「え？」

(笑えよ。今は光の中に居るんだからさ)

闇を払い、光で満たしてくれた、あの時と同じ言葉。

(これからは、自分の力で振り払うんだ。約束してくれ)

「・・・約束」

私を咎める優しい記憶が、波紋のように心に広がっていく。

「・・・」

心を覆っている暗闇の雲が晴れ、光が差し込む。それはまるで、雨上がりの天使のよう。

「宿命は・・・復讐じゃない」

(・・・さすがは俺の妹だ)

私は目を閉じ、大きく息を吸い込んだ。そして、済んだ鏡に映る自分の素顔を想像した。兄が、一番喜びそうな顔を。

(・・・こんな感じ?)

私は目を開けた。

「何が・・・お前をそうさせる?」

少し歪んだ深紅の眼で、鴉はそう言った。

「教えてあげない」

私は口を緩めてそう言った。すると、時雨の鞘から一粒の雫が落ちた。

(ほんの少し・・・心が解け合ったね)

「・・・まあいい」

鴉は少し身を屈め、何かを取り出して手の上で躍らせた。

(・・・ナイフ!)

不気味に輝くその正体に気が付くと、私の心が再び揺れ動いた。が、私をかばうように時雨の意識が流れ込んできた。

(え?何?)

私は時雨に心を傾けた。

「・・・夜想の調べ?」

私と時雨。結ばれた手が呼応する。無拍子だった体が、情意の下で誓い合う。

「礼・文・翡・商・翡・文・蘭」

語る私を静かに見据えていた鴉の目が、次第に細く鋭くなっている。躍らせていたナイフを手中に収める。そして刃をゆっくりと私に向けた。

「武・信・翡・・・?続き、何だっけ?」

「眠れ、永遠に!」

鴉は柔軟な動きで体を少し屈め、一步を踏み出した。その途端、機敏な身のこなしで、私目掛けて跳び出した。

「・・・武・文・礼!」

重なり合う二つの意思。静寂を断つ気高い時雨の音。目覚めた刀身に、月明かりが宿る。

13・紫の花

13・紫の花

(・・・ハープの音だ)

目を開けると、そこは夢の続きだった。ボロボロの服を纏った綺麗な人が、途切れることなくハープを奏でている。

(これは・・・何の夢だろう)

意味を持たない夢。何故かそうは思えなかった。

(・・・まあ、何でもいいや)

少なくとも、私にとっては楽しい夢であることに違いないし。

(不思議な感じ)

彼女の音色を聞いていると、気持ちが悪く落ちていく。目を閉じて聞き入ると、私の心は、一面に広がる黄色い花畑へ運ばれた。強い日差しの下でいい香りに包まれ、時折通り抜けていく風がとても心地いい。

(なんて素敵なんだろう・・・これは、初夏の心地)

同じ初夏でも、現実とは大きく違う。ずっとここに居るのもいいな。と、私は思い始めた。

最後の一音が静寂に溶けると、彼女はハープを唇から離れた。すかさず私は「今の何て曲？」と尋ねた。すると彼女は「ミモザ」と答えた。

不思議なことに、声が聞こえない。私の声も、彼女の声も。心に字幕が浮かぶように理解ができる。まるで台詞のない、音だけの映画だ。ここはそんな世界。

彼女は再び唇にハープを当てた。

「・・・きて。起きてよ、朱音」

私を呼ぶ声が心に聞こえる。

(もう少し、ここに居たいな)

「お願い、起きて」

今度は泣きそうな声でそう言われた。

(・・・どうしよう)

私は困った表情でハーブの奏者を見た。すると彼女は、私に向かって手を振った。

(また、会えるよ)

そう、心に言葉が浮かんだ。

(・・・きつとだよ)

そう唇を動かし、私は目を閉じた。

「・・・ん？」

「朱音、聞こえる？私だよ、奏だよ？」

「うん・・・聞こえるよ」

「はぁ・・・よかった」

私の手を握り締めていた奏は、その場に力なく座り込んだ。

「どうしちゃったの？それに、ここ何処？」

私は今、知らない天井を見上げている。

「どうした、じゃないでしょうが！」

「・・・？」

「昨日の夜、偶々お店の前を通りかかったら、お店のカーテンが開いたままだったのよ。変だな、と思って中を覗いたら、朱音が血を流して倒れていたんだよ」

「・・・そっか。じゃあここは病院か」

「そっか、じゃないでしょう！」

奏は力いっぱい私の手を握り締め、布団に顔を埋めた。

「・・・ごめんね、心配かけて」

奏の姿に、私の涙腺が緩み始めた。

「無事かい？水無月君」

病室のドアが開くと同時に、設楽さんの声が入ってきた。私はとっさに瞳を拭った。

「平気。今日が覚めたところ」

「ふう、そりゃよかった。昨日の夜、奏君から電話があつたんだ。

「朱音が死んじゃう、何とかして！」ってね。そりゃあ大きな声でね、思わず耳から受話器を離したよ」

「うるさいな。そんなことより、お店は大丈夫なんでしょうね？」

「問題ないよ。ちゃんと片付けてきた」

「・・・何が、どうなっているの？」

奏の話によれば、昨日の夜、倒れている私を見つけた後、すぐに設楽さんに連絡をしたらしい。お店には血が落ちていて、私の側に時雨が落ちていたそうだ。何か事件性があると考えた二人は、「刀を所持している」という事実が事を面倒に思うと思い、奏は救急車を呼ばないで、自分の母親が勤めている病院へ私を運び、設楽さんにお店の方を任せたとそうだ。

「今度は朱音の番。昨日の夜、一体何があつたの？」

私は昨日の夜にあつたことを全て話した。鴉と名乗る男が現れたことから、時雨を抜いたことまで、全部話した。

「・・・よく生き残ったねえ」

「本当に死ぬかと思つたよ。それで、お店の方は？」

「血痕の位置から察して、これは2人の血であると考えた。今聞いた話を混ぜて考えると、一つは君の、もう一つは鴉と名乗った男の血だろう。刀で斬りつけたのは明らかだったし、君が刀を抜いたなら、相手も刃物を持っていたのだらう。君に依頼されたことと大きく関わっていると思つてね、血痕から散乱した物まで全部片付けてきたよ。勿論、時雨もね」

つまり、隠ぺい工作をしたということか。

「素晴らしい判断。いい仕事したよ、設楽さん」

「まあ、警察に言っても信じないだろうし、面倒なだけだもんね」

すっかり安心しきった奏は、設楽さんが持ってきてくれたお見舞いの果物からリンゴを持ち出し、皮を剥かずそのまま噛り付いた。

「しかし、一体何がどうなっているんだろうか。僕が調べた鳥村と関係があるのか？」

「全くの無関係じゃないと思うよ。水無月である私を狙っていたのだし」

「共通するのはカラスって言葉だけか。カラスに祟られたって話じゃ終われないな」

「祟られた・・・？」

設楽さんは言ってみただけなのだろうけど、私は心に引っかけた。

「もつと調べないと。とりあえず、僕は昨日君を襲った奴を調べてみるとしよう」

「朱音は？これからどうするの？」

「私は・・・水無月を調べてみる」

「どうやって？」

「勿論、渡瀨に行つてよ」

奏のお母さん、恵与けいよ先生の診断によると、私が負った傷は浅く、綺麗に急所から外れていたため、数日したら退院してもいいとのことだった。

退院後、私はすぐに旅立つことにした。

船に揺られながら、私は恵与先生が言っていたことを思い出していた。

「この切り傷、見事なものよ。正確に筋肉の走っている方向に切っている。おそらく、完治したら傷一つ残らないでしょうね。．．．それにしても、どれだけ人を切ったらこれだけの技量が身に付くのでしょうかね」

先生の言うことが本当なら、私は鴉に生かされたことになる。．．．何の為？

(今の私じゃ、殺すに値しないってこと?)

目の前に広がる穏やかな海とは違い、私の心中は渦巻いていた。

(分からないことばかりだ。私を無視して、全てが動いている)

何となく、気持ちが晴れない。現状を考えれば当たり前なのだけど．．．。どこか、遊びに混ざれない子供のような心境だ。

「ねえねえ、見てよ朱音」

「．．．ん？」

「さっき買ったお弁当なんだけどさ、ご飯の上にあった梅干が、今見たら漬物の一角に移動していたんだ。これって．．．イリュージョン？」

隣にいる奏はそう言って高笑いをし始めた。

(．．．うぜえ)

「奏．．．何故着いてきたの？」

「何故って、朱音が行くって言ったからでしょ」

「私が、行くから？」

「そう。私から見た朱音ってさ、変わり者で、可愛くて、ほっとけない人だからさ」

「．．．遊びじゃないよ」

「分かってる。だから行くんだ」

「．．．」

「朱音の使命、何も一人で背負う必要はないって思うよ。だから、私も手伝う。友達だからね」

奏は私に味付きのゆで卵を差し出した。

「私がいないと朱音、ずっとそんな顔しているでしょ？」

「え？」

奏の言葉を聞いて、私は我に帰った。自分を忘れていたわけじゃないけど、何かを見失っていた。それに気が付いた。

私はゆで卵を受け取った。

「これ・・・美味しいよね」

「まだあるよ」

そう言って、ゆで卵の入ったネットを私の目の前でブラブラ揺らした。

私は思わず笑みを零した。

(・・・そうだった。私はこんな思いがしたいために、生きているんだ)

港に着いた私達は、一目散に港を抜け出した。

「迎え、来ないの？」

「来ないで、って連絡しといた。目立ちたくないからね」

「そっか、そうだよね」

時刻は夕暮れ。この港で降りる人も少なく、人波も疎ら。何事もなく、時は流れている。

「変装して来ればよかったのに」

「こんな田舎でそんなことしたら、余計に目立つよ」

「そんなもんかねえ」

少しだけ胸がドキドキしている。久しぶりに故郷へ帰ってきたからではなさそうだ。嬉しさとも、怯えとも違う胸の内が、私を足早にさせる。

「お婆ちゃんの家、遠いの？」

「いや、もう着いたよ」

私は一軒家を指差した。まだ外は明るいのだが、家には黄色い明

かりが灯っている。それが私を何とも言えない気持ちにさせてくれる。

「なんかいいね、こづいづの」

「どづいづの?」

「ここは朱音の帰れる場所なんでしょ? 明かりを灯して、誰かを待つ家」

(誰かを待つ家、か)

改めてお婆ちゃんの家を見ると、ご飯の匂いがした。

「さ、行こつよ」

奏が私の背中を押してきた。

「分かつたつてば」

私は玄関の戸に手を掛け、ガラガラと音を立てて開けた。

「あの、」

戸を開けると、お婆ちゃんはエプロンで手を拭きながら玄関へ駆けて来た。

「お帰り、朱音ちゃん」

「あ・・・うん」

「そちらは奏ちゃんだね。朱音ちゃんから聞いているよ。さ、早く中に入って」

トキお婆ちゃんは嬉しそうに手招きをした。

「お帰り、だつて」

肘で私をつつきながら、小声で奏は言った。

「・・・うん」

「ほら、早く入んなさい」

胸のドキドキは、お婆ちゃんに会った時にどうすればいいのか、という不安だった気がする。

「・・・ただいま」

いつの間にか消えていた胸のドキドキ。消えたのはきつと、ご飯の

匂いがした時。

私を待っていてくれた人と囲む食卓は、とても賑やかで、隙間なく誰かが喋り続けていた。

久しぶりの、和みの時。こんな時間を知ってしまったと、立ち向かうのが怖くなる。なんとしてでも、生きたくなる。この一時を守るには……やっぱり、

「お婆ちゃん。そろそろ、聞きたいことがあるんだ」

「……ああ、分かっているよ。私が見た夢の話しだね」

私は申し訳なさそうに頷いた。

「では先ず、紫吹ちゃんについて話さなきゃならないね。お婆ちゃんの事、何も知らないだろう？」

「……うん」

「仕方ないよ。紫吹ちゃんはね、朱音ちゃんが生まれる少し前に亡くなったんだ。紫吹ちゃんのお兄さんは、それよりも前に亡くなった」

「お兄さん？」

「そう、紫吹ちゃんは双子だったんだ」

(私と、一緒だ)

「お兄さんは箏そうの名人でね、そりゃあ見事な腕前だったよ。今でも憶えている」

お婆ちゃんはそう言って首を揺らし始めた。

「箏って何ですか？」

「お琴のことね」

「琴？」

「箏っていうのは、簡単に言うと13弦の琴きんの事。本来琴きんというのは、奈良時代に中国から伝わってきた7弦の琴きんを意味しているんだよ」

「詳しいね、朱音ちゃん」

「職業柄、ね」

私にとって、この手の話しは得意だった。

「昔は3人でよく遊んでいたんだけどね、お兄さんの稽古が忙しくなると、その機会も少なくなっちゃったよ」

(稽古・・・そう言えば、お兄ちゃんもそう言っていた)

「でもね・・・年を幾ら重ねても、私達はずっと友達だった。それは今も変わらないよ」

お婆ちゃんは目を細め、しみじみと話した。

「その、夢に出てきたってというのは？」

「手紙に書いた通りさ。紫吹ちゃんが私の夢枕に立って、「朱音を守ってあげて」って言って、一輪の花を私に渡したんだ。・・・ちょっと待ってね」

お婆ちゃんは立ち上がると、仏壇の前に足を運んだ。仏壇に手を合わせて拝んだ後、お婆ちゃんは供えてあった一輪の花を手にとった。

「ほら、これだよ。紫吹ちゃんが私に手渡した花」

私は花を受け取り、それを眺めた。

(この花・・・)

「朱音、何の花分かる？」

「うん。多分、桐の花だ」

「桐？桐って花が咲くの？」

「桐は5月頃になると紫の花を咲かすんだ」

「5月？今は7月だよ？」

「桐の花・・・琴の材料。・・・家具・・・家具？」

「・・・何か分かったのかい？」

「うん、多分正解」

「で、何、何？」

「正解を知るには、水無月の神社に行かなきゃいけない」

私はスツと立ち上がった。

「まさか、今から行くのかい？」

「勿論。夜のほうが人目に付かないし、早い方が良いと思う」

「それじゃあ、私も、」

「お婆ちゃんはここで待ってて」

「でもね、」

「お願い」

これ以上巻き込めない。その一身で私はお婆ちゃんを止めた。

「私はついて行くよ」

「奏もここで、」

「朱音！」

奏の瞳には、私には消せない感情が灯っている。私はその気迫に押され、口を閉ざした。

「・・・決まりね」

私の考えが正しければ、神社に全てを知るヒントがあるはず。真愁と訪れた時に見た、あの場所に。

(・・・もつと、急いだ方がいいな)

時雨のない今、再び鴉と遭遇したら勝ち目はない。

(おそらく鴉は、私の居場所を知ることが出来る)

鴉と対峙した時、鴉は言っていた。刀に触れた時に宿った闇が見えると。

水無月への復讐。その一角として、トキお婆ちゃんを狙う可能性だっただけ考えられる。

(急がなきゃ、)

「ま、待ってよ・・・朱音」

後ろを振り返ると、石段の途中で力尽きようとしている奏の姿が見えた。

「ほら、頑張って」

私は奏を促しながら、石段を登りきった。

「もう・・・暗いし怖いし、幅は狭いし、登り難いったらありやし

ない」

毒づきながらも足を動かす奏。

「ほら、もう少し」

私は少しでも恐怖心が和らぐように、明るく大きな声で言った。

首に薄っすらと浮かぶ汗を拭いながら空を見上げると、いつもより星が輝いて見えた。

(こうやって、星を眺めたりしたのかな)

遠い記憶を思い、偲ぶ。

「ゴール・・・はあ、心臓が、破れる」

「ご苦労様。じゃ、行こうか」

「・・・鬼」

私は神社に向かって歩き出した。奏もそれに続いた。

「ねえ、中に入るんだよね？」

「そうだけど。やっぱり怖い？」

「そりゃあね。朱音は怖くないの？」

「うん。慣れたって言うか、これ以上の恐怖を知っているとと言うか、ね」

「・・・いつの間に、そんなに強くなったのよ？」

「・・・そんなんじゃない」

私は戸に手を掛け、開いた。

「さ、入ろう」

私は奏に手を差し伸べた。奏は無言でその手を取った。

中は以前と変わらない様子だった。静かに眠っている、そんな感じだ。

「・・・ひ、人」

「じゃなくて、ただの観音像。私も前に来た時に同じ事言ったよ」

「・・・そう、気が合うね。それで、何処に手掛かりがあるの？」

奏の音が震えている。置物だと知っても、やっぱり怖いのだろう。
「多分、そこ」

私は懐中電灯を取り出して、灯りを点けた。そして観音像を照らした。

「ちよつと！そんな物照らさないでよ！」

「ごめん。でも見て、観音像の下」

私は観音像の載っている箱に明かりを向けた。

「……紫の模様が書いてある」

「この箱は桐で出来ている。紫の模様はね、桐の花の模様なんだよ」

「じゃあ、この中に？」

「多分、ね。持ってた」

私は懐中電灯を奏に預け、観音像に手を伸ばした。ひんやりとした感覚が伝わってくる。

「罰当たんなきやいいけどね」

「変な事言わないでよ」

灯りに動揺が伝わった。と同時に、私は観音像を床に置いた。続いて箱の上蓋を開けた。

「……何か入っている」

手を伸ばし、それを掴んで外に出した。

「何、何？」

灯りで照らすと、それが本であると分かった。本と言っても、片端を紐で結ってある手作りの本だ。

「何かの書誌かな？」

私は本を床に置き、捲ってみた。

「……？」

「何も書いてないじゃない」

奏の言うとおり、本には何も書かれていなかった。隅々まで明かりで照らしたが、一文字も書かれていない

「もしかして、外れ？」

「……そうかな？」

無意味な物を手の込んだ場所に置くとは思えないし、紫の花の意味を考えると、これが正解としか考えられない。

(紫の花・・・私へのメッセージ)

「・・・そうか。そういうことね」

「何か分かった？」

「うん。しばらくの間、ここで待っていて」

「待っていてって、何処行くの？」

「この本の中」

私は本を手に取り、目を閉じた。

「この本は・・・扉」

私はいつものように、物に宿る記憶を掬い取った。

14・宿る命と、悪しき悪戯

14・宿る命と、悪しき戯事

「同じ、は？」

本に宿る記憶の中、なのだろうけど、さっきまでいた場所と変わらない。ただ、夜ではなく、ここは日中だ。

「・・・新しい？」

私知知っている神社とは雰囲気が違う。観音像は輝いているし、床も隅々まで綺麗に掃除されている。なにより悲しい空気がない。

「・・・惨劇の前、かな」

私は外の様子を見ようと、戸に向かって歩き出した。

「朱音なら、来てくれると思ったよ」

戸に手を伸ばした時、後ろから声が聞こえた。

「誰？」

振り返ると、一人の老婆が立っていた。

「・・・もしかして、紫吹お婆ちゃん？」

私がそう言つと、老婆はにっこり微笑んだ。

「お婆ちゃん」

私はお婆ちゃんに駆け寄り、手を取った。

「嬉しいねえ。会つのは初めてなのに、私のことを分かってくれるなんて」

「分かるよ、それに感じる。私の家族だつてこと」

お婆ちゃんは目を細め、私の頬に手を当てた。

「意識だけだけど、朱音に会えるなんてね。トキちゃんに感謝しなきゃね」

私は急に緊張が解け、力が抜けていった。そして甘えるようにお婆ちゃんの胸に顔を埋めた。

「・・・辛いだろっね。こんな宿命を背負う事になったなんて。変

わってあげたいのだけど・・・私はもう・・・」

私は強く目を閉じた。泣かない為、声を出さない為、なにより、お婆ちゃんのために。

「私・・・何も分からない。何がどうなっているの？私は・・・どうすればいいの？」

「そう、それを伝える為に、この書誌を残したんだ」

「でも・・・何も書いてなかった」

「順を追って説明しないといけないね」

お婆ちゃんは私の両肩を優しく掴み、瞳を覗き込んだ。

私は覚悟を目に宿らせ、頷いた。

「朱音には、ものを触るとその心が見える力がある。その力はね、一世代分の隔世遺伝をして継承されてきたものなんだよ。つまり、私にもその力がある」

隔世遺伝とは、世代を隔てて現れる遺伝のこと。一世代ということとは、お婆ちゃんがその力を持っているなら、子には継がれず、孫の私に継がれるということ。

「これは・・・何の力？どういう意味があるの？」

「その話をする前に、もう少し水無月について話そう。触れたものの心が分かる力は、月詠つぐよみという力。その力を持った水無月が子を産むと、必ず女子が生まれる」

「その子供は、月詠は使えない」

「そう。そして生まれた女子が更に子を産むと、必ず男と女の双子が生まれる」

「私も・・・そうだった。お婆ちゃんもそうだよね？」

「そう。そして、生まれた長男には守人としての使命が、長女には月詠の力が継がれ、断罪者としての使命がそれぞれ背負わされる」

「・・・守人と・・・断罪者？」

「断罪者とは、時雨を振るい、悪しき心を断つ者。守人とは、断罪者を守り支える者」

つまり、お婆ちゃんは私の前の断罪者。お婆ちゃんのお兄さんが守人ということ。

お婆ちゃんの子供、つまり、私のお母さんには宿命はなく（力を継ぐ子を産む使命はあるのだろう）、その子供である私が断罪者。そして、兄である真愁が守人。

「ここまでいいね？」

「・・・うん」

「では、先代から受け継いだ水無月の記憶を見せよう。さあ、目を閉じて」

私は言われたとおり、目を閉じた。

（何だろう、強い光を瞼の向こうに感じる）

思わず身構えてしまうほどの光。両腕を盾にしても光がなだれ込んでくる。

「さあ、目を開けて」

私は恐る恐る目を開けた。

「・・・ここは？」

目を開けると、私は知らない場所に立っていた。白い布で覆われた陣地のような場所で、春日造りの神社が建っている。

（・・・戦国時代？）

「ここはね、水無月家の宿命が生まれた場所。鴉と水無月が出合った場所とも言えるね」

「・・・鴉」

甦る紅い眼。私を何度も震わせる。

「朱音、神社を」

声の誘いどおり、神社に目を向けると、中から袴を着た男女が出てきた。

「あれが十四代目の有資格者。ゆかり（縁）と、えにし（縁）」
「私の・・・ご先祖様？」

その証である時雨が、ゆかりの手に握られている。

「朱音に問題を出そう」

「・・・問題？」

「刀の刃に向けて鉄砲を撃つたでしょう。さて、刀はどうなる？」

私はこの答えを知っている。勿論、職業柄で。

「刃こぼれ一つしない。当たった弾丸は二つに切れる。でしょ？」

「そう、さすがだね。では、飛んでくる弾丸目掛けて刀を振るい、当てる事が出来るかい？」

「それは無理でしょ。人は弾丸ほど速く動けないもの」

漫画や映画じゃあるまいし、現実にそんな事できっこない。

「それじゃあ、正解を見てみようか」

「え？」

私とお婆ちゃんが話している間に、武家の者と思われる人が何人か、この場に現れていた。その内の一人が、時雨を持つゆかりに向けて火縄銃を構えた。

「え・・・ちよつと、」

ゆかりは流れるように刀の柄に手を掛け、ほんの少し鞘から刀を抜いた。

「・・・」

ゆかりが頷くと、銃を持った人は改めて標準を合わせた。

（・・・まさか、出来るの？）

私が固唾を飲んだその時だ。辺りに轟音が鳴り響いた。それとほぼ同時に、金属同士の鋭い衝突音が私の耳を切り裂いた。

「凄い・・・撃つより先に刀を抜いた」

私は耳を塞ぎ、大きく仰け反ってそう言った。

露になった刀の美しい曲線は、現在と同じ輝きを放っている。

「朱音が言ったように、人は弾丸より速く動くことはできない。だけれどね、撃つ瞬間が分かれば対応できなくもない。これが月詠の使い方さ。相手に触れず、空を読む。そして撃つ瞬間を読み取り、刀を振るう」

お婆ちゃんは簡単に言ったけど、私には到底できそうもない芸当だった。

(同じものを持っているのに、こつも差が出るなんてね)

自信を失くしそうになったのを感じたのか、お婆ちゃんは私の肩を優しく擦った。

「心配しないで、時雨が教えてくれるから。何もかもね」

「何も、かも？」

私はゆかりに見とれながら呟いた。自分の目に、意識に焼き付けるように。

「今のはただの儀式。本当に見せたいのはこれからだよ」

「・・・儀式？」

「そう、集中力を高める作法」

「何の為？」

「水無月の断罪者はね、月詠を使い、人の悪しき心の在り処を知ることが出来る。そして、その心を時雨で切り捨てる」

「・・・殺すってこと？」

「いや、身は斬らず、心だけを斬るんだ」

「心だけを・・・斬る」

「闇払い。それが水無月の業」

お婆ちゃんがそう言った時だ。白い布を掻き分けて5人の武士がこの場に現れた。その武士達は、縄で縛られた一人の男を従えていた。縛られた男は身窄らしい格好で、目と額を隠すようにボ口切れを巻かれている。

「来たね」

「・・・何が？」

「あの縛られた男はね、この時代の匪賊。あらゆる罪を犯し、数え切れない程の屍を築き上た者」

「・・・」

身窄らしい男は乱暴に引つ張られ、ゆかりとえにしの前に差し出された。そして力づくで頭を押さえられ、その場に跪かせられた。

「朱音、よく見ていなさい。これから闇払いが行われる」

ゆかりは匪賊に向けて手を翳し、目を閉じた。それを合図に、えにしは琴を弾き始めた。

(・・・?)

匪賊は暴れることなく、じつと琴の音色に聞き入っている。私にはそう見えた。

(この音色・・・どこかで聞いたことがあるような気がする)

「お婆ちゃん、この曲は？」

「月詠歌・夜想の調べ。古くから水無月に伝わる曲だよ」

おそらく、守人が奏でる仕来りなのだろう。これが闇払いに必要なものだとしたら、私はどうすればいいのだろう・・・。

(・・・!)

ゆかりが活目すると、一瞬にして辺りの空気が変わった。鋭い霧困気が私の不安を射抜き、瞳を奪った。

(始まる)

刀の柄を握ると同時に抜刀。一筋の閃が走った。

「・・・!」

まるで時が止まったようだった。言葉通り、目にも留まらぬ神速。時が動き出した今、既に時雨は鞘に収められていた。

「ちゃんと見たかい？」

「見た。見たけど・・・見えなかった」

今になって全身に鳥肌が立ってきた。躍動する心音が、けたたましく鳴り出す。

「全く反応できなかった」

まるで雷のようだ。音速を抜き去る閃光と、遅れて伝わる音。

硬く握られた手を開くと、じわりと汗が滲んでいた。

「まだ終わっていないよ。さあ、よく見て」

私はキュツと拳を握り、斬られた匪賊に目を向けた。

「・・・？」

匪賊の体に走った閃光から、黒い霧が溢れ出してきた。

(何だろう……。とても禍々しい感じがする。それだけじゃない、心の全てを飲み込もうとする威圧感がある)

「本来、この闇払いを受けた者は、このような黒い霧が噴出して終わる。けどね、今回だけは違った」

黒い霧はまるで意思があるように宙を漂い、一ヶ所に集まり始めた。

異質な事態に驚いたのか、守人は琴の演奏を止めた。

「・・・あはは、」

集まった黒い霧は、左目の紅い鴉と、右目の紅い鴉の二羽に姿を変え、空を舞い始めた。そして、まるで獲物を定めるように、空から紅い眼でこの場を見下ろしている。

全員が上を見上げ、不安に駆られている。一人の侍が刀を抜こうとして鴉から目を逸らした時だ。その隙を見逃さず、一羽の鴉がその侍に飛び掛った。

鴉と侍が衝突すると、鴉は再び霧に戻り、侍の体に纏わりついた。侍は悲鳴をあげ、抵抗するように体を痙攣させているが、全くの無意味。黒い霧は徐々に侍の体に染み込んでいく。

「体を・・・乗っ取るつもり？」

霧が完全に染み込むと、侍の痙攣が治まった。そして、俯いたまま動かなくなった。

「・・・」

他の侍達は、もう一羽の鴉を警戒しつつ、動かなくなった侍の様子を窺っている。

えにしは琴から離れ、かばうようにゆかりの前に出て、脇差に手

を掛けた。

張り詰めた空気に耐えられなくなったのか、それとも虫の知らせが働いたのか、一人の侍が刀を抜き、黒い霧が染み込んだ侍に向かつて踏み込んだ。すると、さっきまで俯いていた侍が顔を上げた。その侍の右目は赤く染まっている。

「右目が、」

私が言いかけた瞬間、右目を染めた侍は刀を抜き、踏み込んできた侍の喉を真一文字に貫いた。

悲鳴を上げることなく崩れる侍。その向こうには、返り血で身を赤く染めた鴉が高らかに笑っていた。

「・・・こんなの、」

血よりも紅い右目が、一瞬にしてこの場を支配した。

覚悟を決めた一人の侍が刀を抜いて斬りかかったが、鴉は軽くそれを往なし、素早く刀を振り上げた。切り落された手首が刀ごと宙を舞う。

上を見ながら悲鳴を上げる侍。それに苛ついたのでか、鴉はその侍の首を切り落した。

「・・・酷い」

今見ているのは剣劇ではなく、命の摘み合い。・・・いや、一方的な蹂躪だ。その証拠に、残った侍達の戦意は消え、恐怖に支配されている。

鴉は血を払うように鋭く刀を振り伸ばした。そしてその切っ先をゆっくりと動かし、ゆかりと、えにしへ向けた。

「・・・」

先に踏み込んだのは鴉だった。えにしはゆかりを肩で後ろへ押し、迎え撃った。

鴉はえにしの右肩目掛けて両手で刀を振り下ろすが、脇差でそれを弾く。その反動で、今度は右手だけで左肩を狙って振り落とした。

が、えにしは両手でそれを楽に弾く。

両手の利が出たえにしの目が活目され、素早く次の動作に移った。が、刀を打ち込む前に、えにしの顔が歪みだした。鴉が左拳でえにしの肝臓を打ち抜いたからだ。

時が止まったようにえにしは動かない。その隙を見逃さず、鴉はえにしの首を目掛けて刀を横に払った。

(！)

ゆかりが二人に割り込み、時雨の鞘で鴉の刀を止めた。続けて時雨を振り上げたが、鴉は後ろへ飛び、紙一重でかわした。

間合いを取り、仕切り直す三人。

「・・・ふう」

ほんの数秒の光景。ただ見ていただけなのに、私の顔には汗が浮かんでいた。精神は疲れ、今にも集中力が切れそうだ。

「・・・朱音」

お婆ちゃんの声に顔を上げると、刀を抜いた侍一人、この場に増えていた。

「・・・あれも、鴉」

侍の左目は赤く染まっていた。側には侍の死体が一つ転がっている。いや、それだけじゃない。この場にいた武家の者全員が息絶えている。

(立っているのは四人。つまり二対二)

挟まれた二人。背中を合わせるかと思ったが違った。ゆかりとえにしは同時に右目の鴉に飛び掛った。

右目の鴉はえにしの刀を、体を横にしてかわし、そのまま肩で押し返した。次にゆかりの時雨を刀で押さえ、鏢競り合いとなった。ゆかりは腰を下ろし、左手に持った鞘を競り合う刀に打ち込んだ。刀身と鞘で十字を描き、鴉を押すが、力では利がない様子。その間にも左目の鴉が後ろから駆け寄ってくる。

ゆかりは尻目に駆け寄る鴉を見ていたが、力を緩めるわけにはいかない。

「あ……あつ」

後ろから駆け寄る鴉が刀を構えた時だ。起き上がったえにしが、競り合っている鴉の左手を切り落した。その瞬間、力の均衡は解け、ゆかりが押し勝った。が、すぐ後ろにはもう一人の鴉が迫っている。えにしは体勢の崩れた鴉の首を目掛けて刀を振るった。と同時に、ゆかりを押しのけた。そして後ろから迫る鴉に向けて、返す刀を全力で突き出した。

(……どう、なった?)

えにしが大地に膝を付いた。突き出した刀は左の鴉を捕らえなかった。逆に鴉の刀はえにしの右の肺を貫いていた。

ゆかりは二人の鴉から間合いを取ると、真つ先にえにしを見つめた。大地にひれ伏すえにしが気が付くと、澄んだ目に動揺が現れた。えにしは気力を振り絞り、吐血しながらも地面から膝を離れた。それは一瞬だった。風に晒され、零れ落ちる砂のように、その身を大地に崩した。

「……っ」

えにしの姿が兄と重なって見える。大事なものを失った時の虚無感。空っぽの心。冷たく悲しい風が私の中に吹いている。

「……許せない」

湧き上がる火焰が、貪るように心を焼き、焦がし始める。

「朱音！見なさい。まだ、終わりじゃない」

荒れ狂う心を抑え、私は顔を上げた。

(……ゆか、り?)

私と同じ心境だったのか、ゆかりの表情には鬱積した怒りが滲み出ていた。

(あつ、)

感情に任せたゆかりの、獅子を噛むような咆哮が辺りに響き渡った。その叫びは私の怒りを消し去り、気圧し、貫いた。

(これは・・・怒りだけの心)

ゆかりの咆哮に物怖じない鴉達は、再び戦の態勢に入った。左目の鴉はえにしに刺さった刀を抜き取り、構えた。右目の鴉は残った右手で首を押さえている。押さえた手から血が溢れているのが見える。仕留める事はできなかったものの、致命傷にはなったようだ。

ゆかりは左目の鴉目掛けて力任せに刀を振るった。しかし鴉は刀で受けず、身をかわした。それに構わず刀を降り続けるゆかり。空を切る刀が、逆にゆかりの体を振り回している。

(分かるけど・・・それじゃ、)

左目の鴉は隙だらけのゆかりに刀を突き出した。

(勝てないよ)

いち早く反応したものの、ゆかりはかわしきれなかった。鴉の突き出した刀はゆかりの左肩を貫き、その刀身に赤い血を滴らせた。

傷口を広げるように、刀を持つ手をねじる鴉。苦痛に歪むゆかりの顔。耐えるように唇を噛む。

鴉は更に刀をねじった。ゆかりの左手から鞘が零れ落ちる。肩から流れた血が、力なく広がった指先まで伝い落ちてきた。

苦痛に耐えながら、ゆかりはえにしに目を向けた。おそらく、再び心を燃やすため。

(・・・怒りだけじゃ・・・勝てない)

ゆかりは左の指先に力を込めた。そして自ら肩を動かし、更に深くまで刀を刺した。そうやって間合いを詰め、左手で鴉の手首を掴んだ。そして右手に持った時雨を振り上げ、鴉の右手を肘の辺りから斬り落とした。続けて時雨を振り下ろして追撃に掛かった。時雨は鴉を捕らえたものの、鴉が後ろに仰け反ったため、切り口は浅く、致命傷には至らなかった。

(もう・・・やめて)

皆が傷を負い、血を流し、命が揺らいでいる。

鴉達は目配せをした後、その場から逃げ出した。ゆかりは追おうと足を一步踏み出したが、崩れる体を支えるのが精一杯の様子で、その次が踏み出せなかった。

「これが宿命の始まり。ゆかりは一命を取り留めたけど、この失態を責められ、この地を去ることとなった」

「そして・・・渡瀬に？」

「そう。そしていつの日か、鴉を討ち取るためにと力を継承し続け、今に至る」

「私が・・・その十四代目」

「・・・そうだね」

「まだ分からないことがある。何故、水無月は闇払いができるの？」
「それは分からない。煉獄から逃げ出した不浄の魂を追って、天女がこの世に舞い降りたという話を聞いたことがあるけど・・・どうだろうね」

（じゃあ・・・あの匪賊が鴉を生んだわけじゃないってこと？もつと昔に、何かが）

「さあ、もう帰ろう」

お婆ちゃんがそう言うと、ここに来た時と同様に光に包まれた。

光が消え、ゆっくり目を開けると、私は元居た水無月の神社に立っていた。とは言え、私にはさっきまでの光景が残光のように残っている。

「・・・これから・・・どうすれば」

「時雨と共に、立ち向かいなさい。そうする他ない」

「でも、私は一人。守人もいない。刀なんか振るったことないし、習ったこともない。赤ん坊に包丁を持たせるようなものよ・・・」

勝てるわけない」

「なら・・・逃げなさい。時雨を置いて、名を捨てて、何処までも。私は咎めないよ」

「・・・それは、」

「鴉達はこれからも残刻を繰り返すだろうね。そうだとしても、私は朱音に生きて欲しい。多くの命を犠牲にしても、私は朱音に生き残って欲しい。そう願うよ」

（・・・全てを犠牲に・・・）

奏、設楽さん、トキお婆ちゃん。鴉は私をおびき寄せるために皆を犠牲にするかもしれない。もしそうだった時・・・私は知らん顔できる？のうのうと自分一人だけ生きることが出来る？

「・・・きつと、できない」

それは死ぬより辛い。自分が散華される方がよっぽどマシだ。

「・・・そうだろうね。それが人つてもんだよ。迷い、戸惑い、理屈に合わないことをする。人の温かさは、そうやって生まれるのかもしれないね」

それが人の弱さであり、希望でもある。

（答えは・・・出ているのでしょうか？）

「朱音自身が選びなさい。これからのこと、全て。何を選んでも、私は朱音の味方だ」

私は臆しながらも、お婆ちゃんに向かって頷いた。

「私は・・・抗う」

お婆ちゃんはニッコリ笑うと、私の頬を両手で包んだ。

「いい目だよ。怯えていても、明かりが灯っている」

「・・・」

「もし・・・立ち向かう勇気が欲しいのなら、時雨で自分の恐怖心を斬るといい」

（そういう使い方もある・・・でも、）

「それも・・・自分で決めるよ」

お婆ちゃんは嬉しそうに頷いた。

「さて、もう時間だ。行かなくちゃね」

私は目を閉じて、頬を包むお婆ちゃんの手を触った。

「見ていて、これからの私を」

「……ああ、いつまでもね」

私はゆっくり目を開けた。するとそこは、真夜中の神社だった。私の手には一冊の、白紙の本が握られている。

「……」

「……朱音？」

不安そうに私を覗き込む奏。

「全部分かったよ」

「……そっか」

奏の手には数枚の紙が握られている。

「……？」

「ん？これ？」

奏は手にしていた紙を私に見せた。

「何、それ？」

「その本と一緒に、桐の箱に入っていたんだ。暇だから読んでた」

「……？」

私には全く読めなかった。何故なら、全て漢字だけで書かれていたからだ。

仁・智・礼・義・信・文・武

翡・蘭・商・斗・為・巾

という漢字だけで書かれた文面。

「はて、どこかで……」

記憶を辿ってみたが、巧く探ることができない。

「……まあいいや。疲れたし」

15・危つきもの

15・危つきもの

あれから3日。私の周りでは何も起こっていない。平穩そのものなだけで、私の心中は穏やかではなかった。

私は家に戻った後、お店にある物の殆どを売り払った。そして、何もなくなった二階の倉庫の畳の上で、時雨を抱いたまま浅い眠りを繰り返していた。

意識がハッキリしている時、私は死刑が執行されるのを待つ囚人のような心境になり、何もする気が起きず、忍び寄る恐怖心と悲しみにふと気が付いては、逃げるように目を閉じる。

目を閉じた時、脳裏に浮かぶのは過去の記憶ばかり。過去を整理し、楽しいことばかりを選んでリプレイしている。中には一度も思い出したことがない思い出もあった。

（これは・・・いつ頃の思い出だっけ？）

自分の足跡は思っていたよりも長く続いていて、私は時折迷子になって立ち止まる。現実には背を向けたいが為に、その記憶に留まり思い出し続ける。色褪せた記憶にもう一度彩色を施し、欠けた部分を作家のように創り、埋める。

思い出の足跡はいつの間にか、今へと辿り着いていた。

お爺ちゃんの死から始まる、旅立ちの記憶。

真愁との出会いから始まる、古の記憶。

時雨から始まる、水無月の記憶。

思い出したくない事がいっぱいあるけど、他に思い出は残されていない。

(・・・もう駄目か)

思い出は必ず今に繋がっている。足跡の終わりは、目を開けた時の今で途切れている。

この時が来ると分かっていた。この時とは、対峙の時。打ち破らなければならぬ、宿命の時。

(もう・・・心は引き返せない)

思い出される、ゆかりとえにし。憧れすら抱いてしまう二人の立ち振る舞い。しかしその二人ですら、二羽の鴉を退けることしか出来なかった。

(私に・・・出来るのかな・・・)

命の摘み合い。流れる血。凍てつく空気。私の心は、砕けずにいられるのだろうか？

刹那の判断。拮抗させる力。討ち取る技量。私の体に、それだけの力があるのだろうか？

(・・・駄目だ)

どんなに都合よくイメージしても、私が勝ちを得る想像ができない。心に浮かぶ絵は、瞬きの間に散る、私の命。永遠の眠りについた私の周りに撒かれる、蓮の花。それしかなかった。

(守人はいない。月詠歌はない。あるのは、私と時雨だけ・・・)

私は寝返りを打ち、時雨を抱き直した。

(私のこと・・・憶えていてね)

そう心の中で呟いた。私以外、もう誰も記憶を探れないというのに・・・。

突然、私の心に知らない思い出が浮かび上がった。

(・・・?)

若い二人が、剣術の稽古をしている。母親の指導の元で木刀を振るい、汗を流している。

(・・・そっか。これは時雨の記憶ね)

だとすれば、これは先代の記憶である。私は何も思わず、ただこの場を見続けた。見ただけで巧くなるわけがない。そうだとしても見続けた。

素振りを終えた若い二人は、休まず次の稽古に移った。お互いに向き合い、木刀の切っ先を向け合っている。

最初に動いたのは男の子だった。

(・・・?)

男の子は女の子に向けて、物凄くゆっくり木刀を振り始めた。数秒かけて振り落とされる木刀。女の子は難なくそれを受け止めた。

(数秒なんて、打ち合いでは気の遠くなるような時間なのに)

今度は女の子が木刀を振るい始めた。同じく、長い時間をかけて

(まるでお遊戯ね。でも二人の歳を考えれば相応かも)

その後も、二人は交互に木刀を振るい、受け止め続けた。何度も何度もそれを繰り返した。

もう随分時間が経ったが、二人の稽古は終わらない。ひたすらに攻防を続けている。そしてそれを見続けていて、気が付いた。

(これ・・・お遊戯なんかじゃない。一つ一つの動作の確認をしているんだ。流れを体に染み込ませて、素早く反応させるための訓練なんだ)

その証拠に、二人の打ち合いが段々早くなっている。

(この二人にすら・・・私は敵わない。どうして時雨はこんな記憶を?)

その後も、時雨は私に記憶を見せ続けた。記憶と言つより、水無月の歴史そのものだ。

移り変わる時雨の使い手。受け継がれる宿命。磨き、研ぎ澄まされた術。

（時雨が教えてくれるって、お婆ちゃんが言っていたけど・・・このこと？）

しかし、それを身に染めるまで鴉は待つてくれないだろう。時雨に詰まった先代の記憶。それから学ぶには時間がない。なら、いつそのこと・・・。

（・・・そうだ。そうすればいい。いや、きっとそういつことなんだ）

私は記憶から覚め、汗ばんだ体を起こした。

「・・・後は、心の問題」

今、は夜になっていた。暗闇は私の恐怖そのものを表している。

私は少しだけ、時雨を鞘から抜いた。白い刀身に月明かりが宿る。「恐怖心を斬る、かあ」

時雨に私の顔が映っている。

（私は・・・何が怖いのだろう）

単純に考えると、それは「死」だろう。けど、死んだ後どうなるかなんて、私は知らない。

（私は、知らないものが怖いのか？）

いや・・・そうじゃない。私はきつと、全てを失くすのが怖いんだ。奏や設楽さんと話せなくなることや、トキお婆ちゃんに会えなくなる。紫吹お婆ちゃんや、兄のことを想えなくなること。それが怖いんだ。

「・・・」

恐怖心を斬り捨てたら、私はどうなるのだろうか？恐れを知らぬ私は、これからどうするのだろうか？

「・・・」

きつと、宿命を果たす事だけを優先する人になるだろう。

(うるさい！)

(あんたが憎くい。憎くて堪らない)

(そんな事はどうでもいい。今、ここで刺し違えてやる)

恐れを塗り潰した怒り。あの時のように、命を使っても使命を果たそうとするだろう。

私の死。それは兄も紫吹お婆ちゃんも望んでいない。勿論、奏や設楽さんや、トキお婆ちゃんだって。

命を失うことは、悲しみしか生まない。それはお爺ちゃんが最後に教えてくれたこと。

「私は・・・生きたい」

私は時雨を鞘に収めた。

「宿命の為だけに、この命を使うわけにはいかない」

私は自分の心を斬らないことを選んだ。

恐れを知らない心はただの慢心。その心はこの身を滅ぼすことになる。それよりも、生への希望を持つべきだ。

「・・・うん」

その心の方が強い。そして、美しい。

(・・・さすがは俺の妹だ)

「！」

兄の声が聞こえた。そんな・・・気がした。

「・・・！」

遠くから闇が迫って来ている。この前と同じように、光を飲み込みながらここに近づいて来る。

私は右手をキュッと閉じた。

「私の光は・・・飲み込めやしない」
左手に握られた時雨が、私の意志に呼応した。

16・巡り逢う二人

16・巡り逢う二人

断罪。

罪に対する判決。

贖罪。

罪の償い。罪滅ぼし。

人が人に罰を与えるなんて……。
おこがましい限りだ。

しかし、私は断たねばならない。
命を摘み続ける者を。

闇夜に響く、訪れの音。

私はゆっくりと目を開け、正座の状態から立ち上がった。

「以前とは違うな。……覚悟を決めたようだな」

「今宵で、終わりにしましょう。水無月の宿命も、あなたの狂気も」
私は時雨を左手で持ち、右手の手の平を柄の先に当てた。

「……終わるのか？」

鴉は手にしていた物を覆っていた布を取り払った。

「……神篝」

闇夜に現れた名刀、神の篝火。

「……やつぱり、鴉の仕業だったんだ」

鴉は鞘を抜き捨て、刀身を露にした。不気味に蠢く月光が、私を照らす。

鴉は妖艶な動きで刀の切っ先を私に向けた。

(この前とは鴉の容姿が違う。また体を取り替えたのか)

以前よりも鴉が大きく見える。

(私の心がそう映しているのかな?)

「ほう……前より怯えなくなっただな。いつの間に、強くなった？
余裕の口ぶり。全てを見通すような紅い眼が、私を斬りつけてくる。」

(向かい合っているだけなのに……こんなに疲労を感じるなんて)

汗ばむ体。熱い吐息。まるで地震が起きているように揺れる体。

水面に雫が落ちた音が聞こえた。心に広がる波紋。

(……時雨)

整う心音。涼の音が熱くなり過ぎた体に静けさを戻す。

呼吸と共に抜けていく熱。しかし、心の火は消えない。小さくも、力強く燃え盛る炎。

(鴉が揺るがす大地なら、私は……月を射る心火)
重なる心。繋がれる手。

(さあ……行きましょう)

「……瞬！」

先に仕掛けたのは私だった。足の親指に力を溜め、解き放つ。瞬時に間合いを詰め、鳩尾を狙って鞘を突き出した。

(・・・入った！)

分厚い感触が鞘を通して伝わってくる。仰け反る鴉に、戸惑う私。「っ、」

私は鞘から刀を抜き、力いっぱい突き出した。しかし、時雨は鴉を捕らえず、空を貫いた。時雨に引つ張られ、私は大きく身を崩した。

「・・・見事な踏み込みだったが、その後は何だ？」

背後から聞こえる鴉の声。私は慌てて向き直った。

既に間合いを取り、余裕の表情を浮かべている鴉。

(・・・心がずれた！)

私は透かさず集中し直した。鴉はそんな私を見て、自分の頬を指先で軽く叩いた。

「・・・？」

何かの意図を感じた私は、鞘を握った左手の甲で自分の頬を撫でた。

「・・・！」

撫でた甲に血が付いている。傷口は非常に浅いようで、血が垂れて来る様子はない。

(いつの間に、)

心が乱れた私を見て、鴉は鼻で小さく笑った。そして、私に向かって何かを投げつけた。足元に落ちたそれは、このお店の名刺だった。角には薄っすらと私の血が付いている。

「今のお前に、刀は必要ないな」

私は血の付いた甲を右手の甲で拭いた。

「なら刀を捨てたらどう？」

減らず口を叩きながら、動揺する自分を鎮めた。再び心に広がる波紋。

私は時雨を鞘に収めた。

(やっぱり・・・私の先行では駄目だ)

私は身を託すように、全身の力を抜いた。そして時雨に右手を掛ける。

(時雨、先代の記憶の下で、私を使って)

これは私が思い付いた秘策だった。私に刀を振るう技術はない。なら、数多の先代を知っている時雨に、私を使わせるという考えだ。

「・・・そう」

時雨の記憶が私を動かす。

抜かれた刀を、私の前で軽く鞘に重ねる。足の位置、膝の曲げ具合、身の屈め方、力の配分、全て時雨が教えてくれる。

(やっぱり、こういう意味だったんだ)

「・・・構え、下弦の月」

私は浮かび上がった記憶を読み上げた。

「・・・先の言葉、取り消そう」

鴉は刀を構え直した。

(・・・来る！)

構えを解き、踏み出す鴉。無形の型で私に迫ってくる。右に持った刀に左手を添え、私の脳天目掛けて振り下ろした。

私は左に持った鞘で刃を受け流した。力では勝てない。時雨はそれを知っている。力の向きを変え、生じた隙を突く。が、

(近すぎる、この間合いでは刀が振れない)

私の目の前には紅の眼が。

(臆するな。心に静寂と涼を保て)

私は身を横にして左足を踏み出した。畳を踏みつけると、左足の親指に力が生まれた。その力は膝を通り、腰を通り、右の肩へ。上乘せされた力は肘を通り、刀を握る拳へ。そして僅か数センチ先に

いる鴉に柄の先をぶつけた。

(急所から外れた。いや、外された)

僅かに身をよじり、鴉は私の狙いを外した。

(けど、こちらが有利)

私は逆手に持った鞘を素早く胸元に運び、そのまま横に払った。鴉はそれを紙一重でかわす。

(この間合いだ)

先の要領で今度は時雨の切っ先を突き出した。間合いがある分、先ほどよりも鋭い一撃となった。

「受けてみる！」

耳を貫く鋭い金属の衝突音が響いた。白い閃光が脳裏に輝く。

(・・・やった！)

私は神簪を弾き飛ばした。

「終わりよ」

振り下ろされる時雨。が、自分でも分かる。体が力み過ぎている。鴉は手の平で時雨を私と同じように受け流した。

「なら、」

続けて私は鞘を振り上げようとしたが、

「遅いな」

その前に私は左の二の腕を？まれた。

「！」

鴉は右手で私の胸倉を掴むと、背を向け、私を引き寄せながら身を屈めた。

気が付くと、私は仰向けで天上を眺めていた。

「・・・はっ」

慌てて四つん這いになると、鴉は悠々と神簪を拾い上げていた。

「そう急くな、隙だらけだ」

「・・・くっ」

私は起き上がり、側に落ちていた時雨と鞘を拾い上げた。

(鴉の言うとおりだ。私の心が先走った。水無月の記憶は通用する・
私が心を乱さなければ)

「だがしかし、よくぞここまで」

鴉は構えを解き、全身から力を抜いた。楽な仕草と十分な間合い、それと賞賛の言葉に釣られ、私は緊張を緩めた。

「・・・」

「守人もなしに、たった一人で挑むとは」

「守、人・・・」

鴉が私の心を引つ掻く。

「守人か・・・思えば、お前の守人は勇敢だったな。死を恐れず、使命を全うしたのだからな」

「お前に・・・水無月の何が解る！」

「解るさ、伊達に長生きはしていない。守人とは、時雨を振るう者を守る為に生まれた命なのだろう？」

「そんな言い方、」

「だが事実だ」

これは鴉の挑発。前回対峙した時と同様に私を乱し、熱を持たせようとしている。

「・・・そうね、認めるよ。兄、真愁は、私の為に命を散らした」
だからこそ、今ある命を無下にするわけにはいかない。

私は揺れかけた心を自ら調律し直した。

「兄だけじゃない。私の為にたくさんの方の命が犠牲になった。だけど、次は自分の番だとか、この命に換えて鴉を討つとか、そんなことはもう思わない！」

整う心理。闇を払う光を、私は自ら生み出した。

生み出したのだけど・・・。

鴉は紅い眼を細め、高らかに私を笑った。私の光に臆することなく。

「何が可笑しいの？」

「思い違いをしているようだな」

「何が」

「先の話し、お前の守人だが。本当にお前を守ったと思っているのか？」

心に風が吹いた。

「……そうよ、だから今ここにいる」

「違うな、守人が守ったのはお前じゃない。水無月の使命と掟だ」

鴉の羽ばたきに、揺れる心火。

「その為だけに生まれた命」

心が……定まらない。何故？どうして？と心が濁る。

「……そんなの、」

「真実が解らないのか？気にするな、結果は一緒だ」

鴉が私を侮辱する。私の信じていたものを踏み躪る。これはただの戯言……でも、許せない。

「もう一度言おう。守人が守ったのは、お前ではなく、守人の使命と掟だ」

「うるさい！」

私は繋がれた手を離し、燃え盛る心に身を委ね、闇を砕こうと足を踏み出したその刹那。

(！……)

足元から大振りの一音が聞こえた。全身に纏わり付く揺れはまる

で、何かの崩落を表現しているようだ。

再び揺さぶるような一音が鳴り響いた。駆け巡る振動が共振を余儀なくする。

(・・・そうか、売れ残ったピアノか。ならこれはフォルテフォルティッシモ)

「これは、何のつもりだ？」

(そうよ、何の真似？・・・奏)

私の問い掛けに、奏は答え始めた。

速く、小さなアルペジオで始まるイントロ。時折混じるffの低い一音。

「この曲・・・知ってる」

「厄介だな」

「これは・・・月詠歌」

守人が琴で奏でていた曲だ。ピアノでアレンジしているものの、曲の輪郭がくつきりと残っている。

「朱音の使命、何も一人で背負う必要はないって思うよ。だから、私も手伝う。友達だからね」

「私がいないと朱音、ずっとそんな顔しているでしょ？」

旋律が奏の心を物語る。

「そつだ・・・私は・・・一人じゃない」

自暴自棄になっていた私を誡める、奏の心。古の楽曲が語る、水無月と時雨。

(・・・「めんね」)

私は時雨にそう伝えた。

(もう一度、一緒に行こう)

私を支える者の語りの下で、再びこの手は繋がれた。

「姦しい」

「あなたには心がないの？」

旋律に合わせ、時雨を払う。難なくかわされるものの、素早く間合いを詰め、攻め手を緩めない。

かわされる度に生まれる遠心力をステップで往なし、次の一手に繋げる。

（体が軽い。速く、もっと速く！）

自ら生み出す力の流れに逆わらず、望みのままに操る。

（これはまるで、円舞のような剣の舞）

三拍子に体に乗ると、不思議と強弱弱の加減が腕に生まれた。

「すっかりその気が」

鴉は低く身を屈め、時雨の横払いをかわした。左手を畳に付けると、バネのように体を押し上げ、刀を振り上げた。

（残念、詠めているよ）

旋律にこの身を任せると、鴉の刀は私の目の前を紙一重ですり抜けて行った。巻き起こる風が私の髪を揺らす。

（あ！私の前髪が、）

数本の髪が舞い落ちた。

（・・・この、）

お返しに時雨を振り落とすと、体勢の整っていない鴉は刀を素早く引き戻し、受け止めた。

鴉が片腕で受け止めたため、私は押し返されなかった。それどころか、体勢の差が手を貸して、私は鴉をそのまま押さえ込んだ。拮抗する力が互いの刃を震わす。

（ならこれで、）

現状を打ち破ろうと、私は左手に持った鞘を打ち下ろした。しか

し、それに素早く反応した鴉が刀に左手を添える。
閃光を散らすような音が響いた。

力の拮抗は続いている。私が体重を掛けると、鴉は片足を後ろへ
動かし、膝を曲げて力を流した。

（何の為に・・・あなたは生まれたの？）

（同じ問いを、お前は答えられるのか？）

鴉は体重を膝に乗せ、片足を浮かせた。そして蹴りを突き出した。
私は身を横にし、肩でそれを受け止めた。拮抗は破れ、間合いが
開く。

二人とも刀を構え直した。向かい合う大地と月。

17・曇りない鏡と澄んだ水

17・曇りない鏡と澄んだ水

「悲しい存在ね・・・」

「お前に何が解る」

ほんの少し、鴉の怒りが見えた。その現れが神籬に宿り、私を狙う。

ぶつかり合う名刀。互いに宿る月明かりが飛び散る。

(力じゃ勝てない。だけどね、心じゃ負けない)

私の眼力に押されるように、鴉は後ろに退いた。私は切り返さず、その場で時雨を構え直した。

「構え、落月」

刀身を鞘に収め、時雨の鞘と柄を持ち、目の前に水平に差し出す構え。攻め気を内に収めた鉄壁の陣。

「・・・切り崩す！」

前傾姿勢で踏み込み、力の乗った一撃を放ったものの、私は難なくそれを弾き流した。その時生じた隙を、私はあえて攻めなかった。

「・・・貴様」

鴉は二度三度と続けて刀を振るったが、私はハンドルを切るように時雨を操り、それを全て払い除けた。

付かず離れず、旋律に合わせて間合いを保つ。

鴉は刀を構えながら、肩の力を抜いた。その瞬間、私は神籬を狙って素早く時雨を抜刀した。鞭のようにしなる柔の一撃は正確に神籬を捉え、鋭い音を立てた。そして弾かれた反動で時雨を鞘に戻す。

「・・・あざけりのつもりか？」

(・・・正解)

私の挑発は逆鱗に触れたらしく、鴉は荒れ狂うように刀を振り翳し始めた。その姿はまるで嵐の濁流。対する私は静寂の清流。

(確かに・・・あなたは強い。だけどね、大河であるほど濁流の勢いは強くなるの)

絶え間なく続く攻防の中、私は鴉の心を詠み始めた。

(何が・・・あなたをそうさせるの?)

(黒い感情・・・それが鴉)

(それは誰に向けた感情?)

(醜い霊長・・・人間)

(醜い?あなたは醜さが解るの?)

(解るさ・・・妬み合い、奪い合い、殺し合う愚かな心。それはいつの時代も変わらない、未来永劫繰り返される)

(・・・人の心は、それだけじゃない)

(・・・知らないな)

(醜さが解るなら、美しさも解るでしょ?)

(・・・何故?)

(醜いものがあるから、人は美しいものに気が付ける)

(そんなものはない!)

(・・・哀しい心魂ね。闇が強すぎて、光が見えないなんて)

(黙れ!)

鴉の全力で放った一撃が私を押し退けた。広がる間合い。向かい合う光と闇。

「あなたは・・・煉獄から逃れた者じゃなくて、厭離者えんりしやなの?それとも、その両方?」

「・・・さあ。遠い記憶など憶えていない。知りたくもない」

どうあれ、これ以上犠牲者を増やすわけにはいかない。鴉を止める。その為には、魂を断つこと意外に手段はない。

「ここは閻浮えんぶ。あなたが居ていい場所じゃないの」

時雨が月明かりにその身を染めた。

「構え、新月」

「そつだ・・・それでいい」

奏のピアノが月詠歌の終章に入った。それに合わせ、私は踏み出した。迷いのない一撃が、鴉を捕らえる。

今までで一番鋭い音が響き渡った。無月の終わりを告げるように、その音は部屋中を駆け巡った。

「血が沸く！」

私を射抜くように突き出す刀。私はかわしながら次の動作に移る。今までにない激しい打ち合いが始まった。それに負けぬように、ピアノの音が大きくなった。

刃がぶつかる度に飛び散る月光。旋律に合わせ、徐々に速まる攻防。研ぎ澄まされた集中が、無我の境地へと誘う。

いつしか私達は、無規律のカデンツァの中にいた。瞬く間に変わる刀の閃。もはや心を読む月詠は意味を持たない。体の全てが反応し合う、刹那の世界。

艶麗すら感じる互いの技巧。しかし、その全ては命を絶つ為のもの。その姿は正に、この世界の姿。「醜くも、美しい世界」。

渾身の力でぶつかり合う私達は、互いに弾かれ、体勢を崩した。退き、素早く構えを整えると、二人の間に大きな間合いが生まれた。

(これで、)

(終わりにしましょう)

私達は同時に駆け出した。

鴉の心を目掛けて、振り下ろされる時雨。
私の命を目掛けて、振り上げられる神簀。

大振りの一音が鳴り響くと同時に、私と鴉は互いをすり抜けた。最後の音の木霊が消えると、辺りは静寂な月夜に変わった。

(我は今、時の牢獄に居る。魂は彷徨い、廻り続ける)

(終わらない時)

(それを断てるのは・・・水無月の者のみ)

私の手から、時雨と鞘が滑り落ちた。全身から溢れ出るように力が抜けていく。

崩れそうになる膝を踏み止まらせると、涙が零れ落ちた。

私の心を表現するように、哀しげなピアノが鳴り始めた。

その音は私の心を撫で、落涙を煽る。

私が後ろに向き直ると、鴉は鋭い目を解き、私を見ていた。足元には神の篝火が落ちていて、その灯りは切なさを残して燃え尽きていた。

「こんな・・・」

鴉の体から黒い霧が静かに噴き出してきた。

「こんな哀しいことをさせる為に・・・」

霧が全て体から噴き出ると、鴉に使われていた体は崩れるようにその場に倒れ込んだ。

「私を・・・選んだなんて・・・」

噴き出した黒い霧は一つに集まり、一羽の鴉へと姿を変えた。左目に、再び深紅が宿る。

私は時雨を拾い上げた。

「・・・あなたを・・・葬ります」

涙に濡れた声が、ピアノと重なる。

無韻の詩の語り。

言葉に変えられない心。

「構え・・・上弦の月」

時雨に月明かり宿る。振るわれた時雨が、鴉に閃を刻む。

18・傷に咲く華

18・傷に咲く華

私は疲れ果てた魂を抱え、浅い眠りの中にいる。考えることを止め、真夏の暑さすら無視してひたすらに寝転んでいる。

(・・・まだ)

夢の中で何度も繰り返される鴉との対峙。まるで自分が出演している映画を見ているみたいだ。

(・・・眠れない)

深い眠りに落ちる前に、私は必ずこの夢で目を覚ます。

(・・・眠れない)

何度寝返りを打つても、この夢に背を向けられない。

(もう・・・考えたくないのに)

薄目を開け、夢から今に戻る。眩しい夕焼けが私の目を刺してくる。

「ん・・・に～～」

癩癩を起こしたように髪を掻き毟ってみる。何かが変わると信じて。

「朱音、時間だよ」

お店から奏の音が聞こえた。

「・・・何の？」

私は上半身を起こして、ポツリと呟いた。

「・・・もう！」

ドストスと音を立てて階段を駆け上がってくる奏。それに気が付いた私は、不貞腐れたように寝転がった。

「ほら、起きなさいって」

私は奏に背を向けた。

「この前約束したでしょ！打ち上げ花火見に行くってさ」

(・・・そうだった)

「ほら、起きなさい。・・・3・2・1」

奏のカウントダウンが始まった。何が起ころのかは知らないけど。
「ねえ・・・起きてよ。ここでこうしているよりはいいと思うよ」

奏は私の体を引き寄せた。

「どうしたの？その顔」

「・・・眠れないんだ」

「・・・そっか」

奏は溜め息を吐きながら、私の側に座り込んだ。今気が付いた。

奏は浴衣を着ている。

「だったら尚更行こうよ。気が紛れるかもしれないよ」

「・・・」

それでも、解決にはならない。

「鬱憤を乗せてさ、綺麗な花火を打ち上げてようよ」

「・・・んん」

私は鼻から溜め息を吐いて喉を鳴らした。

「じゃあ決まり！ほら起きて・・・ん？」

奏は私を掴む腕を伸ばして仰け反った。

「あんだ・・・臭いよ」

言われてみれば、あれからお風呂入ってない。

「シャワー浴びてきなよ、準備しとくから。浴衣持ってたよね？何処にしまったの？」

「相変わらず、綺麗な髪だよね」

奏は私の髪をブラシで梳きながら言った。

「・・・まだ、行く気にならない？」

「・・・そんなことないよ。第一、強引に浴衣を着せて言うこと？」

奏は高笑いをした。

「それは言わない約束でしょ」

「そんなのいつした？」

奏らしい。私をよく釣り上げる。

「はれ？前髪どうしたの？」

「ああ・・・斬られちゃった」

「何それ、酷い奴だな」

髪を梳くブラシに力が入る。

「うん・・・それより痛い、頭の皮が剥けそう」

再び高笑い。

「よし、いい女になった。それじゃあ行こうか」

奏は素早く立ち上がり、私の腕を引き上げた。

「そうそう、この巾着、どっち持っていくの？浴衣と一緒にしまっ
てあっただけ」

奏は二つの巾着を私の前に差し出した。金魚の形をした赤い巾着
と、出目金の形をした黒い巾着だ。

「ん〜どっちでもいいかな。そうだ、一つあげるよ」

「本当！じゃあ私は出目金ね」

奏は物凄い勢いで中身を入れ替え始めた。それにしても、お洒落
なブランド物の巾着より出目金の方がいいなんて・・・芸術家の美
的感觉はよく解らない。

「さあ、行こうか」

奏は私の手を取り、駆け出した。

「でも良かった、来てくれて」

「うん・・・ごめんね、愚図っちゃって」

「朱音はそれでいいの」

どうして？と聞こうとしたが、私は声を人の波の前で飲み込んだ。
そんな私を奏は強引に引き寄せた。

「今回の花火は今までとは一味違うよ。なんせ私が後援と演出を担
当しているからね」

「・・・奏が？何で？」

「私はこの町の有名人だからね。前から町の繁栄に協力してくれて頼まれていたのよ」

「なるほどね」

「それで急だったんだけど、閃いたことがあってね、花火大会の演出の内容を変えてもらったんだ」

「へえ、どんな風に？」

「それは、始まってからのお楽しみ」

「ねえ、設楽さんは？」

「場所取りしてもらっている。さっき電話したんだけどさ、出ないんだよね。あいつきつと飲んでるぜ」

奏は気分が高揚しているようだ。自分の感情には素直に従うこと。それが奏の掟。

私も、見習うべきだろう。

「あ、いたいた」

設楽さんは縁日の出店で買い物をしていた。両手には抱えきれないほどの食料を持っている。

「いい所に来てくれた。済まないが手を貸してくれないか？」

「それより場所は取れたの？」

「肯定だ。河川の前にシートを敷いて、クーラーボックスを置いてきた」

「ご苦労。じゃあ先に行ってるね」

と言つて私を引つ張つて歩き出す奏。

「あ、ちよ、」

奏は人ごみの中をスイスイ進んで行き、瞬く間に私達の場所へと辿り着いた。

「ちょっと悪くない？両手いっぱい荷物を持っていたよ」

「いいの、荷物運びは男の仕事なんだから。それに意外と動ける奴だから問題ないって」

「その悪態、僕はどうかと思うね」

いつの間に?・・・奏の言うとおりだ。

「何買って来たの?」

・・・無視?

「一通り。始まってから並ぶのは冴えないからね」

・・・順応?

「さすが、いい仕事するね」

「お待たせ致しました。これより、第十二回、夏空の花火大会を、開催致します」

設置されたスピーカーから、始まりを告げるナレーションが聞こえた。

「春に訪れ、秋に去る夏鳥。初夏に咲き乱れる、ミモザの花」

(・・・ミモザ?)

「夏草の中を駆け巡る、少年少女。そして、夏空に咲く花火。夏の風物詩は、今宵の星の数ほどあります。その風物詩を、夏の名曲に合わせて始めたいと思います」

「第一章・風凧のメモワール」

「この曲って、」

「そう、私の曲。今年は私の音楽に合わせて花火を打ち上げるんだよ」

この花火大会は毎年音楽を流し、それにナレーションを入れ、花火を打ち上げるのが特長。

「この曲を創った奏さんは、子供の頃、一緒にピアノを弾いて遊んだ友達に、この曲のヒントを貰ったそうです」

「奏、その友達って」

「そう、私が捜している人」

奏はちよっと切なそうに遠くを見た。あまり見せない表情に、私

の胸が少し痛んだ。

「この曲を何処か世界の片隅で耳にして、私が音楽の世界にいと知ってくれればいいな。それと、私のことを少しでも思い出してくれれば・・・言うことないね」

「その時の季節も夏だったそうです。是非皆様も、夏の思い出を胸に浮かべて、見上げて下さい」

ナレーションが終わると、奏の音楽が鳴り始めた。音楽に合わせて打ち上げられる花火。私は花火の太い音を体で受け止めながら、空を見上げた。

(夏の・・・思い出、か)

光が矢筋を残して舞い上がる。

(私は・・・何を想えばいい?)

空に光が飛び散る。数多の彩色を闇に施し、一瞬の儚さを描く。

「何を・・・見てるの?」

「ん?・・・遠く」

あの涼しい声。もう、想うことしかできない。どんなに聞きたくても、心が奏でるだけ。私の側に・・・その声はない。

連続して打ち上がる花火。大地から空へ尾を引く光はまるで、

(天に昇る魂)

そう思った瞬間、花火は大きな音を立てて美しい華を夜の星空に咲かせた。

しかし、それは短い命。光は消え去り、最後は空を濁し、風に攫われた。

(駄目・・・もう隠せない)
私は膝を抱え、その場に俯いてしまった。

19・夜明け前

19・夜明け前

「第十章・エトランゼの鍵。をお贈りしました」

私はここまで、顔を上げることにはなかった。ずっと俯いたまま、想いに心を捕らわれていた。

「ここで、毎年恒例の、灯籠流しに移りたいと思います。ご面倒をお掛けしますが、河川沿いで花火を見ていた方々は、橋の下を潜った先に移動をお願いします」

アナウンスがそう告げると、辺りは賑やかな話し声で埋め尽くされた。

「警備員が橋の向こうを解放したようだけど、あそこに何かがあるんだい？」

「川に流す灯籠が用意されているのよ。見物人全員分は用意できないから、早くから場所取りしていた人、つまり河川沿いで見物していた人にその権利を与えるってわけ」

「なるほど、苦労が報われるわけだ」

辺りは雑踏と多くの足音でいっぱいになった。私はそれに怯えるように、俯いたまま浴衣の裾を強く摘んだ。

「しかし凄じくないか。今回は君のプロデュースなのだろう？」

「と言っても、選曲して、少しナレーションを考えただけなんだからどね」

「だとしても、何度も甘い吐息で多くの人を包んでいたよ。まるで風変わりなコンサートだった」

「じゃあ来年は花火を控えめにして、生演奏でやろうか」

「それも面白そうだね」

多くの足音が遠くに消えていくのに、二人はこの場から動こうとしない。

(・・・気を使っている、よね)

それが辛かった。でも、私はこの場を楽しむ気にはとてもなれなかった。それどころか、顔を上げることすら心が拒む。

「・・・朱音、私達以外誰もいなくなつたよ。そろそろ話してくない？何が、心を覆っているのか」

「・・・」

「・・・私達にも、話せないことなの？」

「・・・」

話せないわけじゃない。むしろ、話すべきなのだろう。ここまで付き合ってくれた二人なのだから。

「けど・・・言葉が出てこない。」

「ああ・・・こんな時になんだが、報告をしておこう。君を襲った鴉についてだ」

「そんなの後にしなよ」

「いや、今話すべきだと僕は思う」

「・・・」

「刀が届いた日に君を襲った鴉だが、調べてみたら罪人だったよ」

(・・・罪人?)

「罪は主に強盗だ。その際に、殺しこそやっていないが、怪我人は何人も出ている。裁かれるべき罪人だったと言えるね」

「じゃあ今頃刑務所にいるわけだ」

「調べたらそうだったよ。これで被害者が減るだろう」

「設楽さんは言葉を選び、私を慰めようとしてくれた。きっと、そうなのだろう。」

「それと、今回の鴉についてだ。彼も罪人だったのだが、罪の桁が違つ」

「と言つと?」

「暴力主義者。つまり、テロリストだったんだ。それも全世界に指名手配されている程の大物。数え切れない罪を犯し続けた人間だつ

たよ。僕は人とは思いたくはないがね」

「凄じじゃん、朱音！そんな奴らをやつつけたんだからさ」

「正確には、そいつ等を操っていた鴉を、だけどね」

「同じ同じ。凄じことに変わりはないよ」

（私が・・・凄じ？・・・それは、）

「違う」

「・・・え？」

私は、鴉を斬った時に見えた心を思い出しながら話し始めた。

「鴉はね・・・死にたがっていた。魂だけの存在で、永遠に終わらない生に苦しんでいた。最初は・・・過去の因縁だけで水無月を憎んでいたけど・・・その憎しみは私の家族を殺した時に薄れたみたいだった」

「・・・だから、逃げた幼い朱音を捜しだしてまで、殺そうとしなかったの？」

私は俯いたまま、頷いて答えた。

「その時から、鴉の心は変わった。今までは欲望を満たす為、水無月に向けられた殺意を紛らわす為に人を殺めていたけど、今度は妬みで人を殺し始めたの」

「妬み、とは？」

「死ぬことのできる魂。終わりがある命。それは鴉が持っていないもの。永遠と続く命、その苦悩と葛藤が更なる殺意を生んだの」

「そんな我がままで、多くの犠牲が？」

私は頷いて答えた。

「・・・そして思い出したの。時雨を使い、心を斬ることの出来る水無月なら、自分を滅ぼしてくれらるって」

「そして、君の所へ訪れた」

「・・・でもその時の私は、時雨が使えなかった。だから生かされたの」

浴衣を掴む手に力が入った。まるで鴉の苦悩と葛藤が私に乗り移ったように、心に風が吹き荒れている。

「でもさ、もういいじゃない。鴉の駒として動いたわけだけど、朱音が終わらせたことに変わりないよ。もう・・・宿命は終わったんだよ」

解っている。もう、私は自由だったこと。だけど・・・いくら求めても解らない答えがある。

「そう・・・もういいんだ、そんなことは」

「だったら、顔上げなよ」

奏は私の頬を両手で包み、俯いた私の顔を起こした。

「・・・」

奏は私の顔を見て言葉を失った。止まらない涙に、笑うことの出来ない虚ろな表情。

「朱音・・・どうして？」

「鴉が言ったの。兄が、命を捨てて守ったのは・・・私じゃなくて、守人としての掟だって」

私は鴉の残した闇を吐き出した。

「あんな奴の言葉なんか信じるの？お兄さんのこと、一番よく知っているでしょ？」

奏の荒げた声に、私は目を閉じて涙を切った。

「自分の心に聞いてみなさいよ。本当の意味で、それが出来るでしょ！」

「搜したよ、片隅まで。でも見付からなかった」

「だからって、」

奏は私の肩を強く揺らした。揺さぶられる度に、私の涙が零れ落ちる。

「止めよう、これ以上は酷なだけだ」

設楽さんは間に入り、私と奏を解いた。

「何で止めるのさ！誰が聞いたって同じ答えを言っに決まってるよ。それが解らないなんて、」

「それ以上は言うな・・・お願いだ」

私はとうとう声を出して泣き出してしまった。眼の奥が熱い。喉がカラカラで張り付いている。

「どうして・・・私を、守ったの？」

そう呟いて、私はその場に崩れた。

私の胸に、小さな光が灯った。

「また泣き虫に戻ったな？」

「え？」

涼しく、懐かしい声に反応して、顔を上げた。

「だけど・・・そこに真愁はいない。」

再び泣き崩れそうになると、もう一度胸に光が灯った。

「起きろよ、朱音」

「・・・」

私はハツとしながら、言葉に従い、体を起こした。

胸の光は全身を包み、その強さを増していく。

「朱音？その光、」

奏にも、私を包む光が見えている。

光は私から抜け出すと同時に、辺りを強く照らした。眩しさに私は強く目を閉じた。

（・・・ここは？）

何も聞こえない。

（・・・闇の中？）

何も見えない。

（・・・自分の、心の中？）

きつとそうなのだろう。そう思い、私は目を閉じようとした。

（きつと私は・・・このまま闇に）

瞼が閉じる瞬間、私の前に光で満ちた手が差し出された。

（・・・温かい光だ）

奈落に落ちる私に向けて、広げられた手。
私は戸惑いながらも、その手を取った。

「それはな、朱音。俺が、お前の兄貴だからだよ」

心に響く声が、私の鐘を鳴らした。繋がった手が夜明けの光となり、闇を振り払う。

「……かね、朱音！」

私を呼ぶ声。

「ねえ目を開けてよ、朱音！」

(そつだ……夜明けなら)

私はゆっくり目を開けた。滲んだ顔の奏が見える。設楽さんの顔も。

「……」

次第にハッキリと見え始めた二人の表情。

(……泣いてるの？……怒ってるの？)

(……どつちも、か)

私が掴んだ手は暖かさを残して消えていた。握られた手を開けてみると、蛍のような光が一つ、空へと昇って行った。

「……奏の言うとおりだった」

もう泣かない、そう約束した。

「真愁は……私の兄貴だった」

これからでも遅くない。

「……ごめんね」

この涙が止まったら、約束の始まり。

20・光の川

20・光の川

川を流れる灯籠を眼で追う。ぼんやりと灯った明かりは月夜に良
く似合う。

「・・・綺麗」

そよ風に揺れる数多の光は、何処へ辿り着き、何を照らすのだろうか？

「お待ちせ致しました。これより、最終章・追憶の正射影。をお贈
りします。流れ行く灯籠を眺めながら、お聴き下さい」

「はて？こんな曲あったかい？」

「未発表曲、と言うか新曲」

急遽予定を変更したと言っていたけど、このことだろうか？

「これはね、朱音の曲」

「へ？」

どういうこと？と聞く前に音楽が聞こえ出し、その答えが解った。

「これって・・・」

「そう。朱音と鴉が対峙している時に、私がクラスペディアで弾い
た曲」

つまり・・・月詠歌・夜想の調べ。

「どうしてこの曲知っているの？だって、私しか聞けなかったはず
なのに」

「桐の箱に楽譜が入っていたの。ほら、漢字で書かれたやつ」

「漢字で・・・」

憶えている。お婆ちゃんの記憶から戻ったとき、奏が読んでいた
漢字だけで書かれた書誌。

「あれ、楽譜だったの？」

「そう、琴の楽譜。あいや、13弦だから、箏の楽譜か
そうか、そういうことか。」

「楽器の事は知っていても、楽譜のことは知らなかったでしょ？」
奏は口元を緩め、ニヤニヤしながら言った。

「そつちだつて、箏と琴の違い分かんなかったくせに」

私は言い返した。

「まあまあ。しかし、この原曲が琴、いや、箏とは誰も思わないだ
ろっね」

「楽器が変われば表現も変わる。人が変われば尚更でしょ」

「でも・・・これは夜想の調べだよ」

その証拠に、目を閉じると水無月の歴史が走馬灯のように流れて
見える。

「・・・追憶、か」

暗い記憶も、明るい記憶も、全ては過去のもの。

「この曲ね、創っていて何度も不思議な感じに包まれたよ。ずっと
遠い昔のことを思い出す感じ、つて言えばいいのかな？」

(遠い・・・昔?)

「今まで忘れていた事をたくさん思い出したよ。友達とか、遠足と
か、裸足で歩いた海とか、オルガンの音とか」

「・・・」

「会ったこともない父親の顔とかもね。変だよ、知らないことま
で思い出すつて」

「知らないことまで思い出す。その矛盾が、私には何となく理解で
きた。」

「変じゃないよ。だって、心があるんだもん。きつと胸に残ってい
るんだよ、生まれる前に授かった、父親の優しい思いが」

「・・・そうかもね。いいね、ロマンがあつて」

私はちよつとだけ・・・切なくなつた。離れた友達とか家族とか、
自分の宿命を背負うまで、時々でも思い出すことがなかったから。

「それでね、会いたくなかった。私にピアノを教えてくれた友達とさ。今までよりも強く、そう思うようになった」

「・・・そうだよね」

「だからこの曲を発表したら、しばらく活動を休止することにした。それで・・・逢いに行く。世界中捜して、必ず巡り逢う」

「・・・そっか」

「一緒に行かない？もう宿命は終わらせたんでしょう？今は、きっと何かを始める時だよ」

過去の記憶はあっても、未来の記憶は無い。未来は自分が望むように創るものだから。確かに、何かを始める時なのかもしれない。

・・・だけど。

「・・・ごめん」

「・・・行きたくないの？」

「そうじゃないよ。楽しそうだし、奏と一緒になら」

・・・だけど、鴉はもう一羽残っている。

「じゃあ待つてる。朱音がその気になるまで、ずっと待つてる」

「・・・奏、」

「決めた。そう決めた。決めたったら決めた。ずっと待つてるって決めた」

「・・・奏」

揺るぎない奏の世界。その世界が、私を望んでいる。

「分かった、待つてて。必ず一緒に行くからさ」

誓い。未来の誓い。私が、生きる為に。

「橋の向こうから灯籠を貰ってきたよ。二つしか残っていなかったけどね」

話に夢中で気が付かなかった。設楽さんがいなかったことに。

「あれ？ここにいなかったの？」

「言わなくてもいい事を……。」

設楽さんは首を傾げ、辛そうに瞬きをした。

「貰った時に聞いたのだけど、この灯籠には亡くなった人の魂が灯っているそうだ」

「らしいね。盆時期にこの花火大会をやるのは、そういう意味があるからだったさ」

私は何も知らなかった。

「川を流れる灯籠は、やがて安息の地に流れ着く。だから最終章は音楽だけ流して花火は打ち上げないのよ」

「……そうなんだ」

「そうだよ。だから追憶の正射影を選んだんだよ」

奏はそう言いながら、設楽さんから灯籠を受け取った。

「二つとも、朱音が流しなよ。この曲に乗せてね」

私は明かりの灯った灯籠を受け取った。

「早く。終わっちゃうよ」

「……うん」

私は川辺へと移動し、膝を曲げた。そして灯籠を一つ、水面に浮かべた。静かに波紋が広がる。

「……！」

私の腕から滲み出る光が、灯籠に移って行く。

（……真愁）

この手を離せば、きっともう会えない。

（お別れだ……もう大丈夫だろ？）

私は後ろで見守る二人に目を向けた。

(うん・・・私は一人じゃないから)

私の手から灯籠が離れた。

(今まで・・・ありがとう)

様々な想いを乗せ、灯籠は流れて行く。夜想の語りを聞きながら、光の川を流れて行く。

その輝きを胸に刻み、私は目を閉じた。

私はもう一つの灯籠を手を取った。

(これは・・・鴉の分)

そう胸の中で語り、私は灯籠を川に浮かべた。

(あなたのこと、酷く憎んだ。今もそれは変わらない。だけど・・・あなたの抱えていた苦悩は・・・ほんの少しだけ、分かる気がする。だから、一人だけ寂しい場所には行かないよう・・・祈ってあげる) 私の手を離れ、流れ出す魂。その魂は他の灯りと同じく、安息の地へ向けて流れて行った。

「・・・バイバイ」

21・譚詩

21・譚詩

やり切れない夜。魂の鎮魂を込めて灯籠を流した夜も、それは変わらない。永遠と続く気さえする。

「・・・」

夢と現実の狭間にいる私は、浅い眠りに、恨めしそうに眉間にしわを寄せてみた。すると体が勝手に寝返りを打った。

(予定・・・調和)

薄目を開けてみると、辺りはまだ深い夜。

「・・・ふう」

溜め息を吐きながら、私は再び目を閉じた。

(ね、また会えたでしょ)

(へ?)

心に響く声に、私は目を開けた。すると目の前には、この前の夢の続きがあった。

相変わらず、裸足の女性はハープを吹き続けている。

(そう言えば確かに、また会えるって言ってたっけ)

長い夜。夢はないよりはいい。

(相変わらず、心地いい音色だね)

彼女はにっこりして演奏を続けた。

(・・・夢を見ている時、人は浅い眠りなんだって。そう誰かが言っていたよ)

私は心の中でそう語った。彼女は何も言葉にせず、シャープの付いたメロディで答えた。

(・・・どうせ眠れないなら、目を閉じている間はここにいたいな)
彼女は何も答えない。ただただ、演奏を続けている。

ふと風が止むように、彼女は丹花の唇からハープを離した。

私は訪れた風を拍手で迎えた。誰もいない裏路地に、歡喜の音が響き渡った。

長い拍手が終わっても、彼女はハープを唇に当てなかった。

(・・・あの、どうして裸足なの?)

私は何となく、彼女がこの場から去っていきそうな気がした。それが寂しく感じ、何でもいいから質問をした。

(靴は裸足の子にあげた)

(新しいの、買わないの?)

(お金もあげちゃった)

(・・・そう、なんだ)

風変わりな彼女に戸惑いながらも、私は次の質問を考えた。すると彼女は、

(大地の恩恵を感じるから、裸足のままでいい)
と言った。

(大地の・・・恩恵?何のこと?)

(素晴らしき世界の仕組み)

(・・・素晴らしき、世界?)

その言葉を聞いた途端、私の顔は少しずつ俯いていった。

今まで見てきた残酷な世界。それが私の胸に浮かんでは消え、浮かんでは消えていく。

その世界の果てに見たのは、私が刈り取った、鴉の魂。

(暗闇の世界を知っている人はね、素晴らしい世界が、より美しく見える)

(それは・・・)

(今まで何気なく見ていたものが、とても愛しく感じたり、当たり

前なことが、とても大事に思える)

(・・・そうだよ)

以前、私が鴉に語った言葉と同じ意味。だけど、私は忘れていた。彼女の言葉に動かされ、私は思い出を振り返ってみた。それも、至極当たり前のことを。

いつもの朝食とか、いつも会う友達とか、いつも聴く音楽とか。

退屈なお昼時のお店とか、紅茶の香りとか、

カーテンコールの音とか。

春の野と、暖かい風。

夏の日差しに、打ち上げ花火。

秋の月夜に、窓を打つ木枯らし。

冬空から舞い降りる牡丹雪に、

(・・・こたつに、ミカン)

なんだか・・・切ない。

(もう、その美しさを見続けていいんだよ。その素晴らしいさを感じ続けていいんだよ。だって、鴉はもういないのだから)

(え?・・・何で、)

私は驚きのあまり、膝を付いて起き上がった。

(右目の紅い鴉はもういない。もう二度と目覚めることはないよ、きつと)

(どうして・・・いや、それ本当?)

(本当。だからね、もう安心して深い眠りに付いていいんだよ。素晴らしい世界を、心のままに生きていいんだよ)

彼女はそう私に語りかけた。

不思議と安らぎを感じる。今の言葉が真実であると、私の心が言っている。

(あなたの言葉は・・・信じられる。だって、私の心がそう言うんだもん)

彼女はハーブを口元に運んだ。

(子守唄、聞かせてあげる)

柔らかな風に撫でられるように、女神の音色が私を包み込んだ。

(万物を照らす・・・太陽が見える)

私は眩しい世界に目を閉じた。

(恵みの雨が生命を育み、草木は動物を育て、苔みは綻びて安らぎを与え、花となって虫を育てる)

私は腕を枕にして寝転んだ。

(尽きた生命は土へと還り、大地を育てる。大地は全てを支え、世界を象る)

何だか・・・泣けてくる。

(生きとし生けるものは様々な恩恵を受けて生きている。そして、やがてはその恩恵の源へと還る)

私もまた・・・森羅万象の一つ。

(・・・おやすみ)

22・素晴らしき世界

22・素晴らしき世界

私が目覚めたのは、お昼を過ぎてからだだった。

気持ちのいい背伸びをし、カーテンの隙間から差し込む光に目を細める。

潤った目を擦り、起き上がる。

この腕を広げ、大きく息を吸い込み、ゆっくりと吐き出す。

私を支える裸足の足が、窓辺に向かう。何も持たない手がカーテンを開け放つ。そしてそこに広がる、美しい世界。

「ああ・・・光が満ちている」

「準備、しなくちゃ」

闇を知った私は、光がより輝いて見えるようになった。

絶望の淵に立った人は、何もかもが美しく見える。そしてそこを抜け出すと、自分に優しくなれる。心のままに生きることができ、奪われたたくさんの大切な命。それは今でも悲しい。その悲しみはいつまでも続く。だけど・・・人の心はそれだけじゃない。数え切れない程の思い出は、悲しみだけでできているわけじゃない。

この鼓動は、色んな想いで動いている。昔も今も、これからも。この世界で、命ある限り。足跡が、続く限り。

「朱音。つて、何？その荷物」

私を支え続けた声。

「約束したでしょ？一緒に行くって」

「いつも、私の手を取ってくれた。」

「・・・まさか、本当？本当に本当？」

「今度は・・・私が手を取ろう。」

「行こう、素晴らしき世界の中へ」

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0639t/>

夜葬曲

2011年5月7日10時41分発行